魔法少女とアカデミア

ささみの照り焼き

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

周りより少し『個性』豊かな女の子が、ヒーローになろうと頑張るお話。

※注意書き※

作者の独断と偏見でキャラクターの会話を書いているため、ご想像と異なるキャラクター像が描かれている場合があります。

上記に注意した上で、お話を読んでいただければ幸いです。

目次

雄英高校：入学前
魔法少女と原点 ―― 1
魔法少女と商店街 ―― 8
魔法少女と秘密の特訓 ―― 16
魔法少女と実技試験 ―― 25
雄英高校：序章
魔法少女と入学初日 ―― 40
魔法少女と戦闘訓練 ―― 63
魔法少女と恋の味 ―― 80
雄英高校：ＵＳＪ編
魔法少女と委員長 ―― 94
魔法少女とＵＳＪ ―― 118
魔法少女と襲撃事件 ―― 130
魔法少女の全力全開 ―― 143
幕間：救助訓練編
魔法少女と宣戦布告 ―― 156
魔法少女と後遺症 ―― 168
魔法少女と救助訓練 ―― 184
魔法少女と彼 ―― 196
雄英高校：体育祭
魔法少女と体育祭① ―― 208
魔法少女と失敗作 ―― 217
魔法少女と障害物競走 ―― 221
魔法少女とチームメイト ―― 229

雄英高校…入学前
魔法少女と原点

覚えている。
真っ白な部屋で、スピーカー越しに聞こえる声に従っていた日々を。
覚えて、いる。
真っ赤な水たまりで、苦悶に喘ぐわたしを絞め殺していたことを。
おぼえて、いる。
まっくろなスーツをきたおとこに、ちにぬれたかみをなでられたことを。
おぼえ、て――
まっさおなかおのおんなが、ひっしにいのちごいをするすがたを。

おぼ――え、て――

記憶に走る、ノイズの向こうに。
瓦礫に埋もれた肉塊。
未完成のわたしたち。
燃え盛る木々。
鼻を突く錆びた鉄の匂い。
溺れそうな程の血潮。
そして――

そし、て――

真っ黒なスーツの男に手を伸ばされて。
真っ黒な闇に包まれて。
黒。黒。黒。黒。黒。黒黒黒黒黒黒黒――

「もう大丈夫だ」

覚えている。

「私　が　来　た　！」

黒を消し去る、黄金の輝きを。

☆

ペン、プォーン。

「……ん、んん」

間抜けな玄関チャイムの音で、私は目を覚ました。

ぺぇん、ぽぉーん。

2度目のチャイムに顔を顰めつつ、ソファから体を起こす。

ソファの前のテーブルには乱雑に積まれた参考書の山。どうやら寝落ちしてしまったらしい。

ぷぅぇん、ポーン。

溢れていないあたりギリギリ意識はあったらしい、と当たりをつけたところに3度目のチャイム。

うちのチャイムは、毎回毎回、あの人が連打するからこんな間抜けな音になったのだ。責任を取って弁償をしてもらおうか、と思いつついい加減ソファから腰を浮かせた。

ぷぅえ……、ポーン。

「はいはい、今出ますよぉ……」

4回目のチャイムはタメが長かった。

あの男、どうやら待っている間暇すぎて遊び始めているらしい。

「どちら様ですかーっと」

分かりきっている事だが、敢えて尋ねながら玄関のドアを開ける。
こうしてあげると、彼は機嫌よくこう答えてくれるのだ。
「やあ！　魔乙女（まおとめ）少女！」

――私が来た！」

Ｎｏ．１ヒーロー《オールマイト》は、今日も画風が違っていた。

☆

「突然だが、魔乙女少女。君、進路は決まってるかな？」
普通サイズのマグカップを器用に持ちながら……いや、つまみながら、オールマイトは突然に問うてきた。
巨躯という言葉がとても似合うオールマイトが居ると、テーブルも、その上に並べられた朝食の盛られたお皿たちも、おままごとの道具にしか見えない。
「進路ですか？　いえ、私はまだです。ぼんやりと、雄英のヒーロー科辺りに行こうかな、と思ってるんですけど。適当に」

「適当で合格するところじゃないんだがなあ……。まあ、魔乙女少女ならさらっと合格しそうだけどさ」

ちなみに、理由は？

と、画風（容姿）にとても似合うアメリカンスタイルな朝食に手をつけながら、オールマイトは質問を続けた。

それに対して私は、食事の手を止めて両手の指同士をくっつけた。

「だって、オールマイトが居ないなら、私の学びたいことは学べそうにないですし……」

てれてれ、と、そんな擬音がつきそうな感じで、視線を逸らしながら答える。

するとオールマイトは、顔を伏せながらプルプルと身を震わせて、

「んんん～～！　嬉しいことを言ってくれるじゃないの、魔乙女少女！」

ＨＡＨＡＨＡ！　と快活に笑って、私の肩をテーブル越しに叩いてきた。

正直結構な衝撃なので勘弁して欲しいが、彼なりの照れ隠しなのだと思えば悪くない。

「そんな君に朗報だ！　なんと！　私が！　雄英に！　教師として！　来る！　――予定だ！」

やけにテンションが高くなったオールマイトは、一区切りごとにマッスルポージングをとり、最後にビシッとサムズアップを決めた。

思わず、私はポカンと間抜けな顔を晒してしまう。
オールマイトが？　雄英に？　教師として？

「――雄英に行きます」

思考とか、理解とか、そういうのを全部吹っ飛ばして、私は身を乗り出しながら鼻息荒く言い切った。
お、おう……。と引き気味に頷いたオールマイト曰く、この時の私はかなり目がやばかったらしい。

こうして私、魔乙女　愛（ういー）は、雄英高校ヒーロー科へと進路を定めたのだった。

魔法少女と商店街

☆

オールマイトが、雄英に教師として赴任すると判明した翌日。

私は全ての欄を『雄英高校　ヒーロー科』で埋めた進路希望調査を担任に叩きつけ、上機嫌で学校からの帰路に就いていた。

ちなみに、提出した後にオールマイトが必ずしもヒーロー科の授業を受け持つとは限らないことに気づいたが、彼がヒーロー科以外の授業を受け持つとは思えないので、一人で勝手に安心することにした。

「今日の晩ご飯は何にしようかな……。やっぱり、オールマイトの雄英就任を祝して豪勢にしたほうがいいよね」

お寿司にしようか、ステーキにしようか、ううん。

そんな風に私がうんうん唸りながら歩いていると、行きつけの商店街のある方面がにわかに騒がしくなり始めた。

心なしか何かが爆発したような音も聞こえるし、気のせいじゃなく黒い煙も昇ってい

る。

まさか、と私の脳内を最悪の予想が駆け巡る。

「オールマイトの就任祝いが……！」

すぐさま『個性』を発動する。

普段は煩わしいことこの上ない『個性』ではあるが、こういう時は非常に便利だ。

足元のコンクリートに、淡く光る魔法陣が出現する。

私がそれを軽く蹴って跳躍すると、普段３０センチにも満たないはずの距離が軽く１００ｍを超えようかというほどの勢いへと変化した。

体を打ち付けるはずの風圧は、胸元で回る魔法陣が軽減してくれている。本当に、便利な『個性』だ。

勢いが緩やかになった頃合を見計らい、商店街へと目を向ける。

何故だかビル並みにでかい女性が邪魔で良く見えないが、爆発と煙が見えた。

予想は悪い意味で大当たりらしかった。

☆

商店街手前の道路に着地する。

衝撃も風圧も、全て『個性』で軽減しているので問題は無いが、周囲の野次馬がギョッとした目でこちらを見た。

そりゃ、制服姿の女子中学生が空から降ってきたら、『個性』があると分かっていても驚くだろうな、とどうでもいいことを考えながら服についた土埃を払いながら商店街へと向かう。

……が、野次馬が壁となって前が良く見えない。

必死に背伸びして様子を確認しようとするが、それほど高くない私の身長では無意味に等しかった。

それはそれとして、真上にいるビッグウーマンのせいで影になって諸々見えにくい。正直邪魔だった。

とはいえ、爆発の衝撃と切羽詰まったヒーローたちの声はここからでも確認できた。

ああ……私とオールマイトの就任祝いが……お寿司が……ステーキが……。

「ま、魔乙女少女!?」

「――オールマイト?」

と、私が落ち込んでいる折に、痩せぼそった金髪の男性が驚いたように声をかけてきた。

不健康極まりない容姿だが、今の彼が本来のオールマイト、謂わばトゥルーフォーム

とでも言うべき姿だ。

何故か彼はその姿をあまり私に見せたがらないのだが、今回はそれを気にする暇もないらしい。珍しく切羽詰まった様子だった。

「助かった！　すまない魔乙女少女、学生の身である君にこんなことをお願いするのはどうかと思うが、『個性』を使って敵（ヴィラン）を止めてくれ！　今、爆発系の『個性』を持つ少年がヴィランに拘束されて――」

「――馬鹿野郎!!　止まれぇぇぇぇ!!」

ヒーローの必死な叫びが聞こえた。反射的に、『個性』を使って跳び上がる。

オールマイトは恐らく個性の使いすぎで動けないのだ。服に血の跡が付いていたし、私の前であの姿でいることが何よりの証拠。

そんな状況で――　一人の少年が、野次馬の中から飛び出していた。

見るからに貧弱そうな体。敵を怯ませるためか、背負っていたバッグを投げた時のフォームも素人のそれ。

運良くヴィランの目に命中し、人質になっている少年の前まできたというのに、必死に叫びながら人質を拘束する泥を掻きむしっている様子から、恐らく彼は『無個性』。

それでも――

「君が、救けを求める顔してた――！」

この場の誰よりも、彼はヒーローだった。

☆

情けない――！

その言葉を聞いた瞬間、オールマイトの胸中を埋め尽くしたのは自身への叱咤だった。

あの緑髪の少年を救けた時点で、オールマイトの活動時間は限界を迎えた。

これ以上の『個性』の使用は体に負担を強いることになる。そうなれば、タダでさえ短く、愛との邂逅の際にも使っている制限時間がもっと短くなる。

制限時間が短くなれば、その分救けられる人間も減るのだ。

だからこそ、オールマイトは運良く現れた愛に、助力を求めた。

唯一この状況を覆せる彼女に、普段なら見せることも憚るトゥルーフォームで、みっともなく、切羽詰まって、あのヴィランを止めてくれ、と。

情けないッ――!!

だが。

彼は――オールマイトの救けた、一人の『無個性』の筈の少年は、誰もが手出しの出来ないでいる状況の中、たった一人で駆け出した。

考える前に体が動いていた、と。

人質になった彼が、救けを求める顔をしていたから、と。

本当に情けない――ッ!!

彼に諭しておいて、己が実践しないなんて――ッ!!

☆

背後で感じ慣れた気配を感じて、私は魔法陣を蹴ろうとしていた足を止めた。

そんな。何で。

疑問と衝撃が頭をよぎるが、体は勝手に被害を食い止めるために動き始めた。

「オール、マイト……!?」

少年の驚く声が聞こえる。
私だって、本当は叫びたかった。
貴方が無理をする必要は無い。
私が何とかして見せる。
だから、止まって、と。
だけど一度駆け出したあの人は止まらない。それに私は追いつけない。
理性は本能を抑え込む。
既に、魔法陣は野次馬やヒーロー達を守るように展開してあった。

「ＤＥＴＲＯＩＴ　ＳＭＡＳＨ　！　！」

オールマイトの拳がヴィランを吹き飛ばし、余波の風圧が逃げ場を求めるように天へと渦をまく。
その渦はやがて雲を呼び、雨雲となって雫を落とし始めた。

歓声が上がる。
オールマイトは活動時間をオーバーしたせいで、もうフラフラだ。本当なら立っているのも辛い位なはず。
だというのに、彼は。
平和の象徴『オールマイト』は、その拳を掲げて、いつもの笑顔を観衆へと向けた。

☆

魔法少女と秘密の特訓

☆

「オールマイト、貴方馬鹿ですか？　いえ馬鹿でしたね、この馬鹿ヒーロー」
「ゴフォアァ！」
事件の事後処理、マスコミからの取材等など、諸々を済ませたり振り切ったりした後。
私は前を歩くオールマイトの痩せぼそった背中を冷めた目で見ながら、流れるように罵倒を吐いた。
ついさっき無茶をした病人ヒーローに言う言葉ではないが、こうでも言わないと彼は反省というものをしない。ほっとけばまた無茶をするだろう。
「い、いや……あの時駆け出した少年に講釈垂れてて、それを私が実践しないのは情けないと思って……」
「Ｓｈｕｔ　Ｕｐ」
「お、ＯＫ……ゴフッ」
ピシャリと言い切ってやると、オールマイトは血を吐きながら落ち込んだ。

……今晩はレバニラかな。

「あー、それより魔乙女少女。あの少年はこの先に居るんだよね？」

「ええ。そこの角を左に曲がった突き当たりの右手に「ＯＫ！」あっ、ちょっと！」

私が答えている途中に、オールマイトは変身して凄まじい速度で駆け出していった。

余談だが、私は変身した状態をマッスルフォームと呼んでいる。

「またあの人は……」

とうに時間切れなはずなのに、わざわざ『個性』を使って行ってしまったオールマイトに呆れつつ、探知用に出していた魔法陣をしまって、オールマイトの後を追う。

『個性』を使って追ってもいいのだが、オールマイトは彼に話があると言っていた。男二人の大事な話だ、とも。

男同士の話を女である私が邪魔しに行くほど、私も野暮ではない。なので、少しゆっくり目で歩いていくことにした。

――今日、オールマイトは無茶をした。

彼の個性の詳細は聞かされていないが、5年前の事件で怪我を負い、『個性』の発動時間に制限がついてしまったということは聞いている。

その事件については詳しく聞かせてはくれないものの、怪我の跡は見せてくれた。よ

くもまあ、あれで動けるものだと思う。
恐らくだが、オールマイトは活動限界を超えて『個性』を発動したことで、制限時間が縮んでしまったはずだ。
わざわざ私と面と向かって話す時はマッスルフォームになっているのだから、その時間を考慮すると……3時間か、それより短いぐらいになっている。
「これから話す時は、無理矢理でもトゥルーフォームにさせないと……」
そのための手段を考えていると、突き当たりにたどり着いた。この右手に、オールマイトとあの少年が居るはずだ。
「オールマイト、話は終わっ……何してるんですか馬鹿ヒーロー」
「誤解だゴフォア！」
そこには、腕を抱え込むようにして蹲る少年と、トゥルーフォームに戻って血を吐きながら叫ぶオールマイトが居た。

☆

彼、緑谷　出久くんは、オールマイトの後継者（候補）になったらしい。
あくまで候補らしく、正式な後継者とするためにこれからオールマイト直々に鍛える

らしいが。

当面の目標は、海辺にある公園のゴミを全て片付けることらしい。

なんでもその公園は海流の関係から漂流物が溜まりやすく、それに紛れて不法投棄も発生しているため、文字通りゴミの山と化しているそうだ。

オールマイトや私なら一晩でどうにか出来るだろうが、鍛えてもいない素人じゃ何ヶ月、いや下手したら一年あっても無理かもしれない程だとか。

オールマイト曰く、それを何とかしてこそ後継者に成れる、と。

緑谷くんには申し訳ないが、この男が無茶をしなくて済むように、無茶をするぐらいの勢いで頑張って欲しい。

それはそうと、後継者って……オールマイトの個性は引き継げるということらしい。

そこら辺を突っ込んだらマッスルフォームで引き攣った笑顔をしていたが、まあオールマイトが口を滑らせたのだから仕方がない。聞かなかったことにしておくと言うと、あからさまにホッとしたような、複雑そうな顔をしていた。

☆

「こんちには」
「えっ？　あ、こっ、こんにちひゃっ！」
　鮮やかな紅葉が目立ってきた頃、私はオールマイトから伝えられた公園へと来ていた。
　そこで準備運動をしていた少年に声をかけると、キョドった動きで吃った挨拶を返された。
「初めまして、私、魔乙女　愛って言います。今日はオールマイトから言われて、彼の代わりに貴方の監修をすることになりました」
「は、はひめましでっ！　ぼ、ぼぼぼ僕は、みどっ、緑谷　出久って言います！　宜ひぐお願いしますっ！　……えっ？　か、代わり？　監修って!?」
　面白い子だなあ、というのが七割。話すの面倒くさそうだなあ、というのが二割。最後に、やっぱり体は貧弱だなあ、というのが残りの一割。
　テンパっている割に情報の整理は早い方らしいが、人と話すのに慣れていない感じだ。……いや、オールマイトの時は普通に話してるっぽかったから、女子限定だろうか？　まあいいや。
「はい。オールマイトは今日、外せない用事があって一日ここに来ることが出来ません。でも、体づくりは一日休めば三日分の遅れが出ることになります。なので、代わりに私

が来て、貴方の監修を務めさせてもらいます」
「あ、はい。そうなんだ……いやそうなんですか！」
「別に敬語じゃなくても良いですよ。なんなら、女の子と話すのに慣れるために、友達同士のフランクな会話形式でもいいですし」
「い、いいいいえ！　そんな恐れ多いことはッ！　と、特訓に行ってきます!!」
バビュンッ、という擬音がつきそうな勢いで、緑谷くんはゴミ掃除に向かっていってしまった。
あの事件の時よりもフォームが良くなっているし、特訓の成果はそれなりに出てそうだ。現に今も、冷蔵庫を危なっかしくも持ち上げているし。
それから暫く見ていたが、特に監修の意味もなさそうな感じだった。オールマイトの教えをしっかり守っているんだろうな、というのが感想だった。

オールマイトの外せない用事。
それは、雄英高校に赴任するにあたって必要な書類や、学園の施設などを見て回る事だ。
来年の春から、オールマイトは雄英高校の教師となるわけだが、その為には様々な手続きが必要となる。

雄英出身のオールマイトには学園の案内はいらないかも知れないが、それでも新しく増えた施設などを確認しておく必要があった。

さらにその後、現教師陣との顔合わせもあるので、距離も考えるとほぼ一日緑谷くんの監修ができないことになる。

さりとて、どちらかを捨てるという選択肢はオールマイトには無く、代わりができる緑谷くんの監修を、この私が請け負ったということだ。

幸いにも今日は祝日、学校は休みだし、丁度予定もなかったのでこうして「私が来た」わけだ。

「緑谷くん、そろそろお昼休憩にしない？」

「あ、うん。ありがとう、魔乙女さん」

ゴミ掃除をしている間に心の整理がついたのか、最初と違って、緑谷くんは普通に返事をした。正直、少し面白くないが、面倒くさくなくていい。

「……えーっと、その、魔乙女さんは、オールマイトとどんな関係なの？」

「え？」

「あ、ごめん！　言い難いことだったら別にいいんだけど！」

別に、オールマイトとの関係は言い難いことではない。ないけれど、正直そんな質問

をされるとは思っていなかったので、返答に困っただけだった。
　その旨を伝えると、緑谷くんはホッと息を吐いて、苦笑いしながら私お手製のホットドッグにかぶりついた。
「……孤児とその保護者、ですかね」
「えっ？」
「私と、オールマイトの関係ですよ」
　昔、私はとある施設に軟禁状態にされていた孤児で、オールマイトはそんな私を救けてくれた保護者、みたいなものだ。
　詳しく話すと長くなるので、出来るだけ簡単に、触れても問題ないような要点だけ伝える。
「そう、だったんだ……。ごめん、嫌な事思い出せちゃって」
「いえ。別に気にしてないから大丈夫です。緑谷くんこそ、気分を悪くさせちゃったらすいません」
「そんなことないよ！　むしろこっちが無神経な話しちゃったんだし、気を使うのは僕の方で……！」
「――優しいんですね、緑谷くん」
「うぇっ!?」

体育座りの体勢で膝に頬を乗せながら呟くと、さっきまで必死な顔だった緑谷くんの頬が真っ赤に染まった。

私はそれをクスリと笑いながら、自分の分のホットドッグにかぶりつく。

「うん。我ながら上出来」

「やさしい……やさしい……」とうわ言のように呟き続ける緑谷くんに首を傾げながら、私はほっぺたに付いたケチャップをペロリと舐めた。

魔法少女と実技試験

☆

結論から言おう。
緑谷くんは、見事、公園の掃除と『個性』の継承を成し遂げた。
それも、受験日当日に。

「うう……何だか、口の中にまだ髪の毛が入ってる感じが……」
雄英高校の最たる特徴は、その広大な敷地面積にある。
とにかくでかい。そして施設が多い。ついでに常駐しているヒーローも多い。
もちろん、受験もその有り余る広大な敷地面積と無駄な予算を使って行われる訳なのだが。
その校舎を目の前に、緑谷くんは青い顔をして口元を抑えていた。
オールマイトのＤＮＡを取り込むために、オールマイトの髪の毛を飲み込んだのが原因だろう。

「大丈夫？　緑谷くん」
「うん、多分、大丈夫。ありがとう、魔乙女さん」
あの監修以来、緑谷くんと私はそれなりに砕けた調子で会話をするようになった。
オールマイトはそれを見て「魔乙女少女はやらんぞ、緑谷少年！」と、まったく別ベクトルの勘違いを披露して、私の『個性』でカチカチ山の再現をしたが。
「それにしても……さすが雄英。何もかも、規模が桁違いだね」
「そうだね。敷地も、校舎も、受験者も、多分日本で一番なんじゃないかな？」
そして、日本一、いや世界一、いやさ宇宙一のヒーローも、ここに来る予定なんだけど。
と、心の中で呟く。この情報はまだどの筋でも未解禁な情報なので、下手に口を滑らせて混乱を招くのは面倒くさい。特に緑谷くんとか、緑谷くんとか、緑谷くんとか。
「おい。邪魔だ退け、殺すぞ」
バラした時どんな顔をするだろうか、と私がニマニマしていると、背後からドスの効いた声が聞こえた。
「か、かっちゃん!?」
緑谷くんの慌てぶりを見るに、どうやら知り合いらしい。
何処かで見たことのある少年は、アワアワと慌てふためく緑谷くんに一方的に言葉を

ぶつけると、私の顔を見て訝しげな顔をして去っていった。
「……知り合い？」
「……えっ、と。一応、幼なじみ」
複雑そうな顔を見るに、何やら訳ありらしい。
私は暗に、深くは聞かないよ、と伝えるために携帯で時間を確認して「そろそろ行こうか」と歩き出した。
「う、うん」
戸惑いつつも、少し慌てながら緑谷くんは歩き出す。
だが、足元がおろそかになっていたらしく、踏み出した足に二の足をぶつけて、緑谷くんの体が傾いた。
携帯の画面を確認していた私は、反応が遅れ、少し距離も空いていたために間に合いそうになかった。
緑谷くんに悪いが、上手く受け身を取ってもらうしかない。バッグの肩紐に手をかけているから、それも望めなさそうだけど。
「大丈夫？」
初っ端から転ぶとか縁起悪いなあ、と思っていたら、横合いから伸びてきた少女の手が緑谷くんに触れる。

すると、緑谷くんの体がまるで風船になったかのように浮かび上がった。
「ごめんね？　私の『個性』、勝手に使っちゃって。でも、コケちゃったら縁起悪いもんね！」
「あっ、あああ、ありがとう！」
おお、特訓の成果か。少しどもりながらだけど、あの緑谷くんが女の子にちゃんとお礼を言えている。
少女は緑谷くんと一言二言話すと、「じゃあね」と言って手を振りながら校舎に向かっていった。
手を振り返していた緑谷くんは、少ししてプルプルと震えだしたかと思えば、私に向かって勢いよく振り返り、
「どうしよう魔乙女さん！　女子と喋っちゃった！」
「……うん。私も、女子なんだけどな」
「あっ」
これから入試だというのに、緑谷くんはまるで死を覚悟したような顔をしていた。

☆

もちろん、緑谷くんがオールマイトと同じくカチカチ山の再現をする、なんてことは無く、場所は受験者が一同に集められた講堂に移る。

緑谷くんとは受験番号が離れているから途中で別れたが、どうやらあの幼なじみくんと隣になったらしい。さっきから緑谷くんの辺りから不穏な空気が漂ってきていた。

筆記試験は無事終了し、今は実技試験の説明待ち。

何百人という人数を収容している馬鹿でかい講堂は暗く、ついでに見える範囲で雰囲気の暗い人たちもいる。多分、筆記が絶望的な人たちだろう。

と、暇つぶしに周りを観察していると、唐突にスポットライトが照らされた。

『今日は俺のライブへようこそォ！　エヴィバディセイヘイ!!』

実技試験の説明は、そんなダダ滑りな掛け声で始まった。

☆

実技試験の内容は、割と単純なものだった。

仮想ヴィランとして配置されたロボットを倒す。倒したロボットの種類と数によっ

て、合計ポイントが決まる、と。そんな感じだ。
とはいえ、それだけで終わらないのが雄英高校。
倒してもなんの得にもならないお邪魔ロボットがいるらしい。
司会をしていたプレゼント・マイク曰く「とてつもなく強いから、リスナーは避けることをオススメするぜ！」だそうだ。

説明の途中、ヤケに噛み付くような態度をしていた男子生徒が手を挙げていたが、多分試験に緊張しているからだろう。
いわゆる、青春、というやつだ。

さて、再び場所を移して、実技試験会場。
案内されたそこには、大きな門と囲いの向こうに、市街地をそのままくり抜いてきたかのような擬似演習場が広がっていた。
さすが雄英、やることなす事規模がでかい。これが何個もあるとか、いったいお金は何処から出ているのか。
ちなみに、緑谷くんとは試験会場が別だった。
彼はまだ『個性』を使用したことがないはずなので少し心配だが、まあ、多分大丈夫

だろう。

オールマイト曰く、彼は土壇場で盤面をひっくり返す才能がある、ということらしいから。

『はいスタートォ！』

え？　と、疑問を浮かべるのと、反射的に体が動き出すのはほぼ同時。

ポカンとマヌケ面を晒す受験生たちを追い抜き、門と市街地の境界線を超えた頃、やっと私は試験が始まったということに気がついたのだった。

☆

実の所、私は自分の体を上手く扱えないでいる。

諸事情あって、様々な技術が詰め込まれた私の体は、私の意に反して動くことが時たまある。

例えば、ヘドロ事件の時。

例えば、ついさっきの超反応。

もちろん、私が本当にしたくないことに対しては動くことはないのだが、無意識のう

ちに動かれるのでこちらも対応に困るのだ。
知らない間に痴漢を蹴り飛ばした時とか、居合わせた人も、痴漢犯も、被害者である私も、何が起きたか分からなくて、事態の収集に時間がかかった。
とはいえ、仮にもヒーローを目指している本人が、『個性』ならともかく自分の体を上手く扱えないのは流石にまずい。
もちろん今後も善処していく方針だが、
「よっ、ほっ」
こうして半自動で敵の攻撃を回避してくれるというのは、なかなかに便利な所もあり、もうこのままでもいいんじゃないかな、とも思い始めていたりする。
「これで……えーっと、何ポイントだっけ？」
内部から焼け焦げた何体かの仮想ヴィランを眺めながら、人差し指をくるくる回しながら思い出す。ついでに、指先でくるくる回る魔法陣から電撃を出して、背後の仮想ヴィランをショートさせた。
「うーん。だめだ、覚えてない」
とりあえず見つけ次第倒していたので、何体倒したか思い出すことが出来なかった。
まあいいか、と次の目標を探そうとした時、グラリと大きく地面が揺れた。
今までにも誰かの『個性』の反動で揺れることはあったが、今回のは一際大きい。し

かも、この揺れは地中からだ。

嫌な予感がしてその場から離れた、次の瞬間、コンクリートの地面をぶち破って巨大なロボが出現した。

「でっかー……」

思わず、ポカンと呆ける。

形状的に、説明にあったゼロポイントの仮想ヴィランらしいが、それにしたってこれはない。

周りの建物の高さなんて余裕で越しているし、腕部なんてそれこそちょっとしたビル並に太さがある。

プレゼント・マイクが逃げろと言っていたのも納得の大きさだった。

確かに、これを倒して得られる恩恵なんて無いのだから、無視してほかの仮想ヴィランを倒した方がいい。

実際、周りの受験者たちは一目散に逃げ出しているし。

もちろん、私もその例に漏れずに逃走を図った。

なんてことはなく。

とりあえず、周囲を見渡してみる。

何人かの受験者たちが、飛来した瓦礫で怪我をしたり、身動きが取れない状態になっていた。

躊躇いなく、『個性』を発動する。

対象は瓦礫と受験者たち。

瓦礫は突風で押し上げ、怪我をしている受験者たちを柔らかい風で近くまで運んだ。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ。助かった、ありがとう」

「いえ、困った時はお互い様です。それより、動けそうなら何人か背負って運んでいってください。あなた達もお願いします」

一番軽傷だった尻尾の生えた少年に声をかけ、足が不自然に腫れている受験者を運ぶように依頼する。

他にも動けそうな人達がいるので、怪我人の運搬は問題なさそうだ。

ヒーローたるもの、見捨てることなかれ。

私はオールマイトから、たくさんの事を学んでいる。
これも、その一つ。
例えその行為が利になるものでなくとも、ヒーローは見捨てることは絶対にしない。
まあ、その言葉を教えて貰った理由が、私との待ち合わせに遅刻したオールマイトが、道中に何人もの人を救けて遅れて来た時の言い訳だったのだけれど。

「これで全員かな……」
未だ暴れ回るゼロポイントから離れた場所で、私は探知用の魔法陣を出しながら呟いた。
ゼロポイントが現れた余波の瓦礫で発生した怪我人、及びその後に発生した怪我人は、私の『個性』で確認できる限り、全員スタート地点へと戻っていった。
残り時間はせいぜい五分。
序盤で十分にポイントは得ているので、試験的には問題は無いだろう。
そう、試験的には。
「さて、それじゃあ……少し頑張ろうかな」

☆

「彼女が、君の言っていた生徒かい？」
「はい。彼女こそが、魔乙女　愛。……あの実験の被害者です」
雄英高校、モニタールーム。
そこでは、所狭しと並べられたモニターに、各試験会場の様子や受験者たちの情報が映し出されていた。
それをジッと注視しているのは、雄英高校の教師や、世間でも名の知れているヒーローたち。今回の実技試験では、彼らが採点役として起用されているのだ。
「そうか、彼女が……」
そんな中、明らかに異質な人物が二人。
一人はオールマイト。愛曰くのマッスルフォームの彼は、優秀なヒーローが集まる中でも、やはり一際存在感というか、画風が違った。
もう一人は、そんな彼と話している小さな影の主。ネズミのような顔と、左目を縦断するような大きな傷跡が特徴的だ。
「校長である僕がこう言うのは何だけれど、彼女の合格は間違いないだろうね。十分な数の仮想ヴィランを倒しているし、先ほどの救助の手際は鮮やかなものだった。戦闘、救助、両方においてトップクラスの成績になるだろう」

「それは……はい。贔屓なしに見ても、彼女の戦闘能力は……特に、『個性』の応用性は規格外です」

オールマイトの言葉に頷き、校長はモニターに視線を移した。

同時に、周囲からどよめきが起こる。

それは中央にある大きなモニターの内、二つのモニターに映し出された光景によるものだった。

試験会場A。

たった一人の少年が、自分の力だけでゼロポイント仮想ヴィランの頭部を、拳の一振りで破壊していた。

驚くべきは、彼の獲得ポイント。彼は今まで、一体も仮想ヴィランを倒していない。だと言うのに、一人の少女が瓦礫に足を挟まれて動けないでいたのを見て、自分の手足を犠牲にしてまで救けたのだ。

試験会場C。

一言で言えば、剣山。

ゼロポイント仮想ヴィランの至る所から、無数の剣が飛び出していた。

特筆すべきは内側からという点。いくら仮想ヴィラン、魂のないロボットだからといえ、その手段は凶悪に過ぎた。

前者は感嘆の、後者は息を呑むようなざわめきが上がった。
「……あのように、彼女の『個性』は作られたもの故の凶悪性を秘めています。幸い、彼女自身は理性のある真っ当な少女なので、あれがそのまま人に向けられる可能性は少ないでしょう」
「今回のアレは？」
「恐らく、ただのデモンストレーション。もしくは、……」
「もしくは？」

「……ストレス発散かと」
二人の間で沈黙が降りた。
「……君、随分彼女に心配かけてるみたいだね」
「その、彼女は少し心配性なところがありまして……」
「それを言うなら、君に無茶をする癖がある、だよ」
「……面目次第もございません」
マッスルフォームのオールマイトが小さく縮こまる姿は、それはそれはシュールな光景だったそうな。

「ところで、あの少年。もしかして君の後継者かい？」
「あれ？　話していませんでしたか？」
「聞いてないなあ。……君、もうちょっとホウレンソウをしっかりしようね」
「……はい」

雄英高校：序章
魔法少女と入学初日

☆

「おはよう、緑谷くん。……その、大丈夫？」
「おはよう、魔乙女さん。うん、ダイジョウブ」
雄英高校ヒーロー科の試験から暫く。
私は、オールマイトから預かった受験結果を届ける為に、緑谷くんの家に訪れていた。
愛嬌のある顔立ちのお母さんに案内され、少し待っていてと通されたリビングは一般家庭のそれだった。
彼のヒーローに体する憧れは人一倍強いものだったから、てっきりヒーローグッズで埋もれているのかと思っていたので、少し意外だ。
お母さんの方はそれほどヒーローに詳しくなさそうなので、緑谷くんは趣味を自分の部屋に留めているのかもしれない。
後で見せてもらおうかな、なんて思っていると、緑谷くんが今にも死にそうな顔で現

れた。
　朝の挨拶ついでに心配して尋ねてみたのだが、返ってくるのは覇気のない笑いと返事のみ。これは重症だ。
「今日は、オールマイトから試験結果を預かって来ました。これをどうぞ」
「へっ？　オールマイト、から？」
「うん、オールマイトから。そこら辺は、その封筒に入ってる投影機を起動すれば分かると思うよ」
　早く確認した方がいいよ、と彼の背中を押して自室へと押し込む。正直、今にも死にそうなあの顔は見ていられない。
　そうなると、必然、リビングに残されるのは私と緑谷くんのお母さんになる訳なのだが。
「お母さま、先に一言断らせていただきたいのですが、私は緑谷くんとは交際関係にありません。ただの友達です」
「あ、あらそうなの？」
「そうなのです」
　緑谷くんのお母さんが口を開こうとした瞬間、被せるように先手を打つ。こう言うのはとっとと明言しておくほうがいい。

もっとも、お母さんの様子から察するに本当に彼女だとか思ってはなさそうだったが。緑谷くん、強く生きろ。

「緑谷くんとは、同じ雄英高校を目指す友人として、去年から切磋琢磨させて頂きました。……彼は、とても強く、芯の通った人です。お母さまは彼のことが心配でたまらないかと思いますが、信じてあげてください。身近な人からの信頼と応援というものは、時に何よりも支えになりますから」

「……ええ、分かったわ。もとより私は、出久のお母さんだもの。息子のことは誰よりも信じているつもりよ？　……ところで、ヤケに出久を買っているのね？　もしかして、」

「いえ、そんなことは断じてないです。はい、断じて」

「あ、あらそう」

彼はヒーローとして、また一男性として立派な志を持っていると思うが、それとこれとは話が別だ。

私は将来、お嫁さんになるのならオールマイトの傍に侍ると決めているのである。

☆

筆記試験は問題なし。
実技試験は、敵（ヴィラン）ポイント、０。そして、救助（レスキュー）ポイント、６０。
それが彼、緑谷　出久の入試成績だった。
実技試験において、ポイントのある敵を一体も倒せなかった彼だが、その身を犠牲にしてまで一人の少女を救け、さらにその心を動かしたことが評価され、晴れて合格となった。
オールマイトは緑谷くんのことに関して一切伝えていなかったそうだから、純粋な評価が成されたと言える。つまり彼は、現役のヒーロー達にヒーローの素質ありと認められたわけだ。
文字通り滝のような涙を流しながら喜んだ彼は、ハッと我に返ったかと思うと私の結果を聞いてきた。
別に隠すことでもないので、簡潔に結果を伝える。
筆記はもちろん問題なし。
敵ポイント、６７。救助ポイント、３５。合計ポイント、１００点オーバー。
あんぐりと口を開けて驚く緑谷くんの顔には、思わず吹き出してしまった。

☆

合格が決まったからと、安心するのはまだ早い。
各教科ごとに出された事前予習や、制服などの採寸と注文。緑谷くんは『個性』の制御等など、課題はまだ山積みである。
そんな訳で、今日も今日とて、緑谷くんはいつもの公園でオールマイト考案のトレーニングメニューをこなしている。
オールマイト曰く、全ての始まりは基礎から、だそうで、緑谷くんは筋トレを主にこなしていた。
残念ながらオールマイトは教師としての準備などあるので来れないが、この程度のメニューなら放っておいても問題はなさそうだ。

ぺらり、と制服のポケットから出した紙を広げる。
オールマイトから預かった緑谷くん宛の書類に混じって、私の結果も同封されていた。なんだか緑谷くんのついでみたいで癪に触るが、まあオールマイトにそんなつもりは無かったのだろう。
緑谷くんに伝えた結果の下には、ラメ入りで虹色に輝く「1位」の文字。
どうやら少しやり過ぎたらしく、入試トップの成績を出してしまったようだった。

というかオールマイト曰く、合計ポイント１００点オーバーは史上初だそうだ。あれぐらいならオールマイトでも出来ると思うが、まあ学生の身なら難しいことなのだろう。

目が痛くなりそうな輝きの、さらにその下。

割り当てクラスと書かれた欄は「ヒーロー科　Ａ組」となっていた。

Ａ組ということは、Ｂ組もあるのだろうか。なんだか、どっちが優秀だとかで争いが起きそうだなあ、とぼんやり思う。

まあ最初のうちはそんな暇もないだろうけど。

とはいえ、ヒーロー科。ヒーロー科だ。

「これでオールマイトの授業が受けられる……っ！」

興奮のあまり、思わず握り潰してしまった結果届けは、しっかり伸ばして封筒にしまっておいた。

☆

さて、時の流れとは早いもので、入学式当日。

と言ってもひと月ちょっとしか経っていないのだけれど、まあ気分的な問題だ。

「それじゃあ緑谷くん、また後でね」
「う、うん、また後でね、魔乙女さん」
校舎の玄関口で緑谷くんと別れ、私は一人職員室へと向かう。
入試成績1位の私は、入学式の挨拶を任されているためだ。
挨拶の内容は既に覚えているが、壇の場所など詳しい説明を受けなければならない。
「――っと、ごめんなさい」
「いや、こっちこそ悪りぃ。考え事してた」
「そうなんですか。なら、お互い様ですね」
「ああ。怪我はないか？」
いえ、と言いながらぶつかりそうになった相手の顔を見る。
半分分けで色の違う髪と、左目の火傷後のようなものが特徴的な男子生徒だった。
服が新品同然なことから私と同じく新入生だろう。もしかしたらヒーロー科かもしれない。
「はい。至って健康体です。それでは申し訳ないのですが、私は急いでいるのでこれで」
「ああ、悪かったな」
「いえ、こちらこそ」
特に自己紹介などすることもなく、すれ違う。少しすれば分かることだ、今確かめる

必要も無い。
とにかく今は、久しぶりに会うオールマイトの顔を一刻でも早く見たかった。

☆

……あいつ。
轟　焦凍は、今しがたぶつかりかけた女子生徒の後ろ姿を見送りながら、自分の記憶と彼女の特徴を確かめた。
制服が新品同然なことから、恐らく新入生。
身のこなし、ぶつかる寸前に『個性』のようなもので体勢を整えたことから、かなりの力量を持っていると見える。
彼女が向かっていった方向は職員室。先ほど焦凍も訪ねたところだ。あそこに向かうのは、特待生か、入学初日から行かなければならない理由のある生徒だ。特待生は焦凍を入れて四人、一応全員の名前と顔は把握しているが、彼女はその中にはいなかった。
と、なれば。
「……あれが、親父の言っていたオールマイトの養子」
焦凍の父、エンデヴァーから毎日のように、今日だって朝から長々と聞かされたから

覚えていた。
入試で歴代最高の得点を叩き出した、オールマイトの養子がいる、と。
恐らく、彼女は新入生代表の挨拶の打ち合わせのために職員室に向かったのだろう。
もしくは、オールマイトに会うためかもしれない。
「どっちにしろ……俺は、負けねえ」
父を、母の力だけで超える。
その為には、父が憎むオールマイトを超えなければならない。
目下の目標として、彼女は焦凍にとって最適であった。

☆

「失礼しました」
キチンと礼をしてから、扉を閉める。
職員室特有のピリピリした雰囲気から抜け出した私は、小さく息を吐いた。
入学式の説明は簡単なものだった。
会場の見取り図を出されて、呼ばれたらここからここまで歩いて、ここで挨拶してもらって、席に戻って終わり。

覚えやすいように最前列の席に配置してもらったこともあって、困ることは無さそうだった。

ただ、説明してくれた先生曰く「無駄になるかもしれんがな」ということらしい。

無駄とはなんだ、と疑問に思うも、「あの人が君らの担任」と指で示された人物を見て納得した。

あれはダメだ。オールマイトとは別ベクトルで無茶をする人だ。具体的には生徒を翻弄して密かに愉悦してるタイプの教師だ。

もしかしたら、苦労して覚えた挨拶も無駄になるかもしれなかった。

☆

「でっかあ……」

3メートルは余裕である教室の扉を前に、私は半ば呆れたように呟いた。

雄英に来てから、ことある事に言っている気がする。だってしょうがない、ここ、何かもかもスケールが違うんだから。まるでコミックみたいだ。

気を取り直して、思ったよりも軽い扉をスライドさせて中に入る。

教室の中には、既に何人かの生徒が居た。席に座って本を読んでいる人もいれば、既

に仲良くなって話している人もいる。
「あっ」
「え？」
と、私の顔を見るなり驚いたような声を出したのは、廊下側から数えて2列目の最前列にいる男子だった。
彼の後ろで揺れる尻尾のようなものを見て、ああ、と思い出す。たしか、実技試験の時に救けて、その後も救助活動を手伝ってもらった人だ。
「おはよう。俺のこと覚えてる？」
「はい、その節はどうも。あなたのお陰で迅速な救助が出来ました」
「いやいや！　こっちこそ救けて貰って、本当に助かったんだ。俺、君のお陰で合格したようなもんだしさ」
少し話しただけなのだが、彼はとても良い人だなと感じた。謙虚さがここまで体から染み出る人もそうはいるまい。
ただ、申し訳ないのだが、彼はどこまでいっても「良い人」で終わりそうな気もした。がんばれ、名も知らない少年。
「俺、尾白　猿尾。よろしく」
「私は魔乙女　愛と言います。これからよろしくお願いしますね、尾白くん」

「こちらこそ、魔乙女さん」

その後、彼に席順を尋ねると、自由に座っていいということを伝えられた。尾白くんはたまたま空いていた自分の出席番号の席に座っていたらしい。

折角なので、私は尾白くんの後ろに座ることにして、彼と親睦を深めることにしたのだった。

☆

最悪だ、と私は声に出すことなく、ため息と共に吐き捨てた。

現在地はグラウンド。

予想通り、担任である相澤　消太先生は、私たちを入学式会場に案内することなく、突然グラウンドで個性把握テストをすると言い出した。

私の労力が全て無に帰した瞬間である。

個性把握テストとは、『個性』を使用しての身体能力テストのことだ。

普段法によって縛られた『個性』だが、雄英はそんなの知ったことかとばかりに全面的に『個性』の使用を許可している。

まあ、『個性』の扱い方を教えるための学校でもあるのだから、当たり前のことなのだが。

そんな訳で、現在私は小さな円の中で、ハンドボールを持たされて棒立ちしていた。

「よし、始めろ」

何が始めろだよファッ○。と言いたいところだが、流石に口を噤む。

所謂デモンストレーションとして、成績最上位者である私が選ばれ、こうしてソフトボール投げを強要されているわけだが、いろんな意味で勘弁して欲しかった。

タダでさえ、努力が無駄になって落ち込んでいるのに、こうして矢面に立たされたせいで同じクラスの人達の視線が痛い。

特に、緑谷くんの幼なじみらしい爆豪くん。彼、絶対敵（ヴィラン）の1人や2人は殺している。あれは素人ができる目ではない。

「魔乙女さん、頑張って……！」

まるで自分のことのように力みながら応援してくれる緑谷くん。普段なら嬉しく思うのだが、今は苦笑いしか浮かべられない。

思えば、私は彼の前で『個性』を使用したことがなかった。特訓中も、私は彼を眺めているのが殆どだったし。実技試験も別会場だったから、同じクラスの中で私の『個性』を見たことがあると確信できるのは尾白くんのみとなる。

その尾白くんは、真剣な眼差しでこちらを見つめていた。そんなに見られるとやりづらいことこの上ない。

しかも、尾白くんや爆豪くんだけでなく、殆どの生徒が私の事を観察、ないし見極めようとしている感じがしていた。一部、不躾な視線をお尻の方に感じるが、気のせいだと思いたい。

「……早くしろ」

イラついたように相澤先生が急かしてくる。

これは、流石に覚悟を決めるしかないようだった。

「それじゃあ、いきます」

軽くボールを上に放り投げ、背後に大きめの魔法陣を展開。続けてそこから、ボールを囲えるよう筒状に魔法陣を展開する。

その様子はさながら大砲。もちろん、威力はその比ではないのだけれど。

「――発射（Feuer）」

なんとなく、ドイツ語で気合を入れてボールを射出。

爆音と共に勢いよく飛んでいったボールは、すぐに見えなくなった。

「……まずは、自分の『最大限』を知る。これが、ヒーローを目指す合理的手段だ」

そう言って相澤先生が掲げた測定器には、３６３７メートルとあった。
もう少し行ったと思うのだが、多分途中でソフトボールが風圧に耐えきれなくなったのかもしれない。
まあ、驚きと喜色に顔を染める生徒たちを見るに、私のデモンストレーションは成功に終わったらしい。
そう思えば、先程までの鬱も達成感へと変わる。
「ちなみに、最下位は除籍な」
その達成感も、すぐさま消されたのだけれど。

☆

元が身体能力テストなだけに、測定項目は多岐に渡った。
その分、人よって結果がピンからキリになるのだから、なるほど面白いと思わずにはいられなかった。
今のところ、私は自分の個性をそれなりに使って、全ての項目で高得点を弾き出している。

これでも入試成績トップの面目があるのだ。そうそう負ける訳にはいかない。
単純な身体能力強化からテレポートなどの複雑なものまで、項目に応じた『個性』を発動して周囲を圧倒していく度、突き刺さる視線と先生の呆れが増していくのだが。
相澤先生は大人気ないとでも思っているのだろうか。だとしたら、それはお門違いな話である。
私はオールマイトの養子であり、彼の一番弟子（自称）でもあるのだ。たかだか最近個性をフルに使えだした子供に負ける訳にはいかないのだ。

「それはそうと、緑谷くん。そろそろ『個性』を使わないと、除籍になるよ」
「……分かってる」
測定項目が半分を過ぎた頃、緑谷くんの顔色はオールマイト並に青くなっていた。
彼はまだ『個性』の調整ができていない。一度使えば、腕だろうが足だろうが問答無用でボロボロのバッキバキだ。
「次、緑谷」
先生に促され、緑谷くんはハンドボールを持って円の中心に立つ。
葛藤で埋め尽くされた彼の脳内は、今頃一か八かの覚悟を決めようとしているところだろうか。

「……んっ」

心配しながら緑谷くんを見守っていると、ふと感じなれた彼の気配が近くに現れた。もしや緑谷くんを心配してのことだろうか、と思いながら、私は彼の元へ向かうことにした。

「あれ？　魔乙女さん、どこ行くの？」

「ごめん麗日さん、ちょっとお花摘みに行ってくるから、先生に言っといてくれない？」

「それはいいけど……見なくていいの？」

「うん、緑谷くんなら大丈夫だと思うから」

入試当日に緑谷くんを救けてくれた彼女、麗日さんに断りを入れて体育館の方へと向かうと、やはりというかそこにはマッスルフォームのオールマイトがいた。

新調したアメリカンなスーツに身を包んだ彼は、こう言っては失礼だが面白い格好になっている。

「オールマイト、どうしたんですか？」

「ああ、魔乙女少女！　いやね、入学式に君らのクラスが来てないようだったから、心配して探しに来たんだよ。……緑谷少年の様子はどうだい？」

「測定項目を半分程こなしましたけど、どれも個性を使っていないので平凡な結果に終わっています。今は多分、玉砕覚悟か温存するかで悩んでいるところでしょう」

そうか……、といつもの笑顔を絶やすことなく、オールマイトは建物の陰から緑谷くんを心配そうに見つめる。

そんな彼に、私は少し頬を膨らませながら、

「……私の記録は聞いてくれないんですね」

「えっ!?　あ、いや、ＨＡＨＡＨＡ！　聞く程でもないと思っていたんだけど、うん！　やっぱり気になって仕方ないなあ！　教えてくれないかい魔乙女少女!?」

あたふたする彼の姿に少し気が良くなった私は、今までこなしてきた項目の結果を伝える。

もちろん、全てが高成績、つまり現状1位だ。

「……なんというか、君は大人気ないな、魔乙女少女」

「何を言ってるんですか。私はオールマイトの養子みたいなものなんですから、そこら辺しっかり誇示しとかないと」

「んんん～～～……嬉しいような、複雑なような……」

もにょもにょと複雑に口元を歪めるオールマイトを尻目に、緑谷くんに視線を移す。

そこでは今まさに、第一投が行われようとしていた。

結論から言おう。

緑谷くんの『個性』を使った玉砕覚悟の第一投目は、相澤先生の『個性』によって阻止された。
その直後に相澤先生が首に巻いたマフラーのようなもので緑谷くんを引き寄せ、何事かを話しながらこちらをチラリと横目に睨んでから、緑谷くんに二投目を促していた。
「……緑谷少年」
オールマイトが、緑谷くんを見つめながら心配そうに小さく呟く。
その姿はなんというか、片思いしている男の子が悩んでいるのを心配そうに見ているヒロインのように見えた。
「オールマイト。私、そろそろ戻りますね」
「え？　あ、ああ」
「……心配しなくても、緑谷くんなら大丈夫ですよ」
かくいう私も少し心配なのだが、彼なら大丈夫な気がするのだ。明確な根拠の無い、半ば直感のようなものなのだけれど。
サムズアップをオールマイトに向けると、彼もいつもの笑顔を取り戻してサムズアップを返してくれた。
「ただいま、麗日さん」

「あっ、帰ってきた！　ねえねえ魔乙女さん！　魔乙女さんって、デクくんとどんな関係なの!?」
「デクくん？」
「デクはデクだろうが、大砲女！」
　戻ってくるなり、麗日さんと爆豪くんに怒鳴られた。麗日さんのは興奮抑えきれずという感じだけど、距離が近い。
　私が混乱していると、失礼、と眼鏡をかけた男子が機敏な動きで割り込んでくる。
「麗日くん、少し落ち着きたまえ。……失礼した、ぼ、いや、俺は飯田　天哉という。デクくんとは、今ソフトボール投げをしている彼のことだ」
「ああ、緑谷くんの」
　出久だから、デクか。分かるかそんなもん。
「関係って言ったって、受験前に知り合った同じ志を持つ友人ってだけだよ。でも、どうして急にそんなことを？」
「彼は、実技試験でゼロポイントヴィランを『個性』を使って殴り倒したんだ。だが幼なじみらしい爆豪くんの話では、彼は『無個性』ということらしいし、彼とよく話している君なら何か知っているのではと思ってな」
「なるほどなるほど」

入試の時にはピリピリしていた印象のあった飯田くんだが、こうして話してみると真面目が服を着て歩いているだけだと分かる。説明も丁寧だし、今後もわからないことがあったら彼に聞くことにしよう。

「その答えなら……」

「「答えなら……？」」

オウム返しをする麗日さんと飯田くんに、仲いいねと苦笑を返して、覚悟を決めた顔で腕を振りかぶった緑谷くんに指を向ける。

「アレを見ればわかると思うよ？」

「　ＳＭＡＳＨ　!!　」

緑谷くんを中心に、爆風が巻き起こる。

衝撃波を撒き散らしながら真っ直ぐに吹き飛んでいったソフトボールは、一投目の記録を軽々と超えて落下した。

「７０５．３メートル」

淡々と記録を読み上げる相澤先生の言葉に、爆豪くんがあんぐりと間抜けな顔を晒した。

☆

その後も、個性把握テストはつつがなく行われた。

緑谷くんの『個性』を把握した直後に爆豪くんが噛み付くという場面もあったけれど、相澤先生が首のロープみたいなもので拘束して止めていた。さすが、腐った目をしていてもヒーローだ。

緑谷くんは指の痛みと戦いながらだったから散々な結果になってしまったようで、暗い表情のまま結果発表を待っている。

対して私は全ての項目において1位だったので、それほど心配している訳では無い。むしろ自分より緑谷くんの方が心配だった。

そんな私たちに構うことなく、相澤先生は結果発表を開始する。口頭で伝えるのは合理的じゃないから一括で表示する、と言いながら、手元の端末を操作する。

結果は、想像通り。

私は1位で、緑谷くんは最下位。

……残念だけど、緑谷くんは除籍確定となった。

「ちなみに、除籍は嘘な」

なんてことはなく。

ニンマリ笑う相澤先生が告げると、緑谷くんたちの驚愕の叫びがグラウンドに響いた。

☆

魔法少女と戦闘訓練

☆

「白米に落ち着くよね、最終的に！」

翌日。

プレゼント・マイクによるダダ滑りな英語の授業を終えた私達は、お昼を食べに雄英高校の食堂へとやって来ていた。

クックヒーロー『ランチラッシュ』の運営する食堂は、彼の知名度もあって連日賑わいを見せている。現に、私たちが訪れた今日も、たくさんの人がお腹を空かせてやってきているし。

そんな中、ランチラッシュはわざわざ私たちのところへやって来て、サムズアップを決めていた。

「うん……落ち着く……」

よほどお米が美味しいのか、麗日さんはほんわりとした表情でゆっくり頷いている。なんなら悟りを開けそうな感じだ。

その対面の緑谷くんは感動のあまり口元を抑えて震えている。まるでアイドルを間近にした女の子のようだった。
「こんにちは、ランチラッシュ。相変わらずの賑わいですね」
「やあ、魔乙女くん！　料理人冥利に尽きるが、忙しくて目が回りそうだよ！　良ければ今度、仕込みだけでもいいから手伝いに来てくれないかい？　大層なものは出せないが、賄い程度なら振る舞わせてもらうよ」
「考えておきます。ところでランチラッシュ、厨房にいる方々がすごい形相でこちらを見ていますが、戻らなくていいんですか？」
「おっとソイツはマズイ！　それじゃあ、味わっていってくれよ！」
大慌てで厨房に戻っていくランチラッシュを見送り、さて食べようとお箸をとると、緑谷くんたちが私を驚きの目で見ているのに気がついた。
「……何か無作法があった？」
「いや、そういうことは無いのだが！　その、魔乙女くんはランチラッシュと知り合いなのか？」
向かいに座った飯田くんが訊ねてくると、隣の麗日さんと斜め左の緑谷くんもブンブンと首を縦に振った。
私は、大した関係でもないんだけど、と前置きして、

「昔、ランチラッシュが炊き出しをしている所に居合わせたことがあってね。その時にお手伝いしたら、腕が良いって言われて色々教えてもらったんだ。最近も、月に1、2回は料理を教えてもらってるよ」

お～、と3人が驚いたような声を出す。

ちなみに、居合わせた理由がオールマイトの手伝いをしていたからなのだが、まあこれは言わないでいいだろう。緑谷くん以外にはまだオールマイトとの関係を話していないので、質問攻めになる可能性もある。

「あ、もしかしてあの時の差し入れも？」

「うん、そう。私のお手製。美味しかったでしょ？」

「凄く美味しかったよ！　市販品じゃないと思ってたけど、なるほど、それなら納得だね」

緑谷くんが腕を組みながらうんうんと頷く。……ところで、君は今墓穴をほったことに気がついているのかな。

「ねえねえデクくん、差し入れって何のこと？」

「へぇあっ!?　あっ、いや、それは！」

「まさか……緑谷くんと魔乙女くんはそういう関係なのか!?」

「それはない。断じてない」

「「お、おう……」」
即座に私が否定すると、麗日さんと飯田くんは引き気味に頷いた。

☆

午後の教科は『ヒーロー基礎学』。担当は、

「わ～た～し～が～

普　通　に　ド　ア　か　ら　来　た　！」

そう。我らがＮｏ．１ヒーロー『オールマイト』である。

「オールマイトだ……！」
「すげぇ本物だ！」
「なんというか、生はやっぱり画風が違うな……！」
そうだろうそうだろう。なんて言ったってオールマイトなのだから。

「魔乙女、なんでそんなに得意げなんだ……？」

隣の瀬呂　範太くんに言われて我に返る。

しまった。オールマイトがみんなから憧れと尊敬の視線を向けられているのを見て、つい我が事のように喜んでしまった。

瀬呂くんに何でもないよ、と言って前を向くと、オールマイトと目が合う。

その視線はすぐに後ろの緑谷くんに向かい、さらにその後ろへと移動していく。どうやら、オールマイトは一人一人の顔を確かめているようだった。

一通り眺めて満足したのだろう、オールマイトは教壇に立ち胸を張るようにポーズをとった。

「さあて諸君！　そんな訳で、ヒーロー基礎学の時間だ！　ヒーローとしての下地を作る為に、様々な訓練を行っていく教科だぜ！　ちなみに単位数も一番多いぞ！」

そこまで言って、オールマイトは「さっそくだが！」と何処からか手のひら大のプレートを取り出し掲げた。

そこには、大きな赤い文字で「ＢＡＴＴＬＥ!!」の文字。

つまり、

「今回の内容は『戦闘訓練』だ！」

☆

戦闘服（コスチューム）。

それはヒーローにとって、一種のシンボルのようなものだ。

ヒーローというのは良くも悪くも知名度が関係してくる職業である。

そしてその知名度を上げるために、自分の『個性』に合い、なおかつ印象に残りやすい衣装を装備しているわけだ。

雄英はそんなヒーローたちの養成学校であり、早期からヒーローとしての自覚をもたせるために、無償でコスチュームを提供してくれるのだ。

ちなみに、このコスチュームは入学前に『被服届け』として希望を提出可能であり、ほとんどの生徒がこれを提出している。

まあ、私は提出してないんだけどね。

「あれ？　魔乙女さん、コスチュームは？」

昨日と同じジャージ姿で実習場に現れた私に、麗日さんが不思議そうに声をかけてくる。

そんな麗日さんは、体にフィットした桃色と黒を貴重としたスーツに身を包み、少し

恥ずかしそうにしていた。
「うん、それなんだけどね、どうせならみんなの前でやろうと思って」
「――生着替えだとぉう!?」

今のはなんだろうか。
昨日感じた不躾な視線が飛んでくる方向に目を向けると、血走った目をした背の低い男子がこちらを睨むように見ていた。
その目には隠す気のない劣情が満ち、私を持ってしてドン引きさせるレベルであった。
「な、生着替え!?　ま、魔乙女さん大胆だね……！」
「違うよ麗日さん。そういうのじゃないよ」
真っ赤な顔で驚く麗日さんに否定を返し、こちらを向く視線が増えたので周囲に目を向ける。
クラスメイトの殆どが、こちらを驚いたように見ていた。一部、期待するような視線もある。
「生着替えとかそういうのじゃなくてね……こうするの」

私の頭から少し上の所に、私の通れる程度の大きさの魔法陣を出し、それをゆっくり下ろしていく。

幻想的な光が舞い散る中、私の足先まで魔法陣が通り抜けると、

「はい。こんな感じ」

魔法使いっぽい格好に身を包んだ私の出来上がり、という訳だ。

「すっ、すっごいね魔乙女さん！　どうやったの!?」

「愛でいいよ、お茶子ちゃん。私の『個性』でちょちょいっとね」

お茶子ちゃん、と呼ばれて照れながら、凄いね愛ちゃん！　と興奮気味にお茶子さんがローブやとんがり帽子を触ってくる。もちろん、しっかり触れるし、この下にも制服風味のブラウスとスカートを着ている。

なので、さっきの男子生徒は親を殺されたような目でこちらを見ないで欲しい。生憎私に露出狂のケはないのだ。

「あー……そろそろ良いかな?」

私たちが出てくると同時に、渾身の名台詞を言っていたオールマイトは、緩みきった空気の中で手を挙げながら苦笑した。

☆

今回の実習は、ヒーローチームとヴィランチームに別れて行なう、二対二の屋内演習らしい。

ヴィランが核兵器を持ってビル内に立てこもったというシュチュエーションで、ヒーローチームは核兵器を回収するかヴィランチームを拘束するのが目的だ。逆に、ヴィランチームは時間いっぱいヒーローチームに核兵器を触れさせないか、ヒーローチームを拘束するかすれば勝利。

なんともアメリカンな設定である。

「先生！　一つ質問があります！」

「何だい飯田少年！　遠慮なく聞いてくれ！」

「では失礼します！　このクラスは全員で２１人なのですが、チーム分けはどうするのでしょうか！」

「あ、私もいいですか？　相澤先生の時みたいに、除籍処分とかあるんですか……？」

「……ぶっ飛ばしてもいいんですか？」

「このマントヤバくない？」

「んんん～～～、聖徳太子ィ!!」

不覚にも、プルプルと震えるオールマイトを可愛いと思ってしまった。まああんなナリでも新米教師な訳だから、いくつもの質問が一気に飛んでくると処理が追いつかないのだろう。

「ええっと、まずはチーム分けだな！　これは済まないが、一つ3人のチームを作り、2人のチームと戦ってもらうことになる！　現場じゃあ人数が対等なんてことは滅多にないし、これも勉強だと思って頑張ってくれ！

除籍処分はもちろん無い！　相澤くんは、まあ、ああいう性格ではあるがそこまで怖いやつではないぞ！　避けることなく、むしろ積極的に接してあげてくれ！

戦闘訓練という題目だから、もちろん対戦相手への直接攻撃はＯＫだ！　だが、私がこれ以上は危険だと判断したら、容赦なく中止するからな！

あと、うん！　そのマント、恰好いいぞ！」

おお、すべての質問に答えきった。さすがオールマイト、何事にも全力である。

全力すぎて、結構な頻度で無茶をするのは頂けないけれど。

☆

「よろしくお願いします、尾白くん、葉隠さん」

「ああ、よろしく」
「よろしくね、魔乙女さん！」
厳正なくじ引きの結果、私は尾白くんと葉隠　透さんとチームを組むこととなった。
対戦表も既に決まっており、私たちのチームは轟　焦凍くんと障子　目蔵くんチームと対戦する手はずになっている。彼らがヒーローチームで、私たちがヴィランチームだ。
「私たちの対戦は2戦目ですけど、2人の『個性』を軽くでいいので教えてくれますか？……と言っても、2人とも見たまんまという感じですけど」
「あはは……」
「見えていないのに見たまんま、って矛盾してるよね！」
「葉隠さんは自分からネタにしていくスタイルなんですね」
自己紹介ついでにお互いの『個性』を説明する。私の『個性』のことを話すと驚いていたけれど、理解はしてくれたようだ。
「そういえば魔乙女さん、麗日さんのことは名前で呼んだり親しい感じの話し方なのに、私たちとは敬語なんだね？」
「ああ、別に葉隠さんたちが嫌いだとか苦手だとか、そういう訳じゃないですよ。初対面かそれに近い人、あと尊敬してる人なんかとは、必ず敬語で話すようにしてるんです」

「なるほどなあ。やっぱり魔乙女さんって、すごく良い人だよね。でも、俺は親しみを持って話してくれる方が嬉しいかな」
「私も私も！」
「うん、じゃあ改めてよろしくね、尾白くん、葉隠さん」

そんな感じで顔合わせを終え、場所はモニタールームへと移る。
対戦者以外は、ここでオールマイトと共に観戦することになっているのだ。
1戦目の組み合わせは、緑谷くん&お茶子ちゃん　VS　爆豪くん&飯田くんだ。ちなみに前者がヒーロー、後者がヴィランチームである。
爆豪くんには悪いが、彼の目つきの悪さはヴィラン役がとっても似合うと思うので、なかなか良い配役だと思う。飯田くんはなんだかんだ真面目だから、ヴィラン役を全力でこなしそうな感じだ。
「この試合、どっちが勝つと思う？」
と、私が飯田くんの演技を想像してぷっくり頬をふくらませていると、隣から声がかかった。
カエル顔が印象的な彼女は、確か、
「蛙吹　梅雨さん、であってますよね？」

「そうよ。梅雨ちゃんと呼んで？　ついでに敬語もいらないわ」
「うん、分かった、梅雨ちゃん」
　軽く頷いて返すと、梅雨ちゃんは機嫌良さそうにケロケロ♪と鳴いた。女の子に鳴いたって表現はあれだけど、梅雨ちゃんはそれが愛嬌になって可愛らしいと思う。
「ところで話を戻すけど、この試合の結果、だよね」
「ええ。見たところあの中の3人とも仲が良いみたいだし、魔乙女ちゃん、頭良さそうだもの」
　緑谷くん、麗日さん、飯田くんの3人とも仲が良いのは確かだし、そう褒められると悪い気はしない。けれど、私は緑谷くんの『個性』以外まともな情報を持っていなかった。
　それを伝えると、梅雨ちゃんは「意外ね」と驚く。まあ『個性』なんて友達になる理由にはならない。私は彼らと打算的な意味で仲良くなった訳では無いから、彼らの性格をぼんやりと知っているくらいだ。
「まあでも、勝敗とまでは行かないけど、鍵になる要素は分かるよ？」
「鍵？」
「うん。この試合、鍵になるのは――」

爆豪くんと緑谷くんの対決だ。

☆

「うおっ、いきなり奇襲かよ！」

モニターの中では、潜入した緑谷くんたちが爆豪くんの奇襲を辛うじて避けたところが映し出されていた。

完全な視覚外からの奇襲は見事だったが、それをギリギリとはいえ察知した緑谷くんは、爆豪くんより一歩上手と言えるだろう。

モニター越しでは音声は流れないが、爆豪くんは緑谷くんを睨みつけながら苛立ちを顕にし、対する緑谷くんは冷静に麗日さんに指示を出している様子だった。

「ケロ、凄いわね魔乙女ちゃん。あなたの言った通りになったわ」

「まあ2人の関係性を知ってれば、ある程度こうなるのは分かったからね」

爆豪くんは緑谷くんに対し、尋常ではない敵意を持っていた。緑谷くんはそれに気づいているようだったし、それに向き合う覚悟を決めている。

例え爆豪くんが奇襲という形を取らずとも、2人の対決は行われるだろうと予想がついた。

とはいえ、この勝負の勝敗までは分からない。
緑谷くんはオールマイトの『個性』を受け継いでいるが、現状制御できていない。
その上核兵器がどのフロアのどの場所にあるかも分からないこの状況では下手に発動することも出来ないので、緑谷くんは『個性』無しの戦いを強いられているわけだ。だが、彼は持ち前の観察力で爆豪くんの動きを完全に見切っている。現に、彼は奇襲後の二撃目に完璧なカウンターを決めて見せた。
対して爆豪くんは『個性』のコントロールが完璧と言っていいレベルで出来ている。感情に流されやすい節はあるが、彼はまだ理性で爆破の威力を建物に影響が出ないレベルに抑えているようだ。彼が激情のままに『個性』を使えば、多分あのビルが崩壊しかねないから。
そして戦況が大きく動く時は、彼が激情に身を任せた時になるだろう。『個性』無しで戦うことを決めた緑谷くんの覚悟より、彼の堪忍袋は緩そうだから。
「だから多分、緑谷くんたちの決着がつくには暫く時間がかかるんじゃないかな?」
と、そこまで言い切って、梅雨ちゃんがポカンとしている事と、周りの視線がこちらに向いてくるのに気がついた。
「え、えーっと……?」
「すげえな魔乙女……そこまで戦況が分かってるのかよ」

「流石入試主席……。私も負けていられませんわ」
「なんか教師の私より解説慣れしてないかな、魔乙女少女……！」
そりゃあ、オールマイトの戦いを眺めながら、仕事取られて暇そうにしてるヒーロー達と解説ごっこすることが多かったですから。

☆

果たして、緑谷くんと爆豪くんの対決は、試合としては緑谷くんの勝ちであり、対決としては爆豪くんの勝ちであった。
最後の最後で、緑谷くんは『個性』を爆豪くんに向けるのではなく、試合に勝つために使用した。
その結果、緑谷くんは右腕を反動によってバキバキにし、左手を爆豪くんの一撃を防ぐ為に盾にしたことによって酷い有様になっていた。もちろん、彼がそんな怪我の痛みと疲労に耐えきれるわけもなく、気を失って医務室へと運ばれて行った。
緑谷くんを除いた3人が戻ってくると、オールマイトにより講評が行われた。
と言っても、オールマイトが今回のＭＶＰを発表し、それに対して理由を聞かれて手

を挙げた八百万　百さんが殆どの理由を言ってしまったのだけれど。
「あー……他に、誰か感想や言っておきたいこととかあるかな？」
「あ、じゃあ私から」
　言いたかったことを言われて落ち込んでいるオールマイトの言葉に、これ幸いと私は手を挙げた。
　視線が集まってくるのに、やっぱり慣れないなあと思いつつ、飯田くんにサムズアップを向けて、
「飯田くん、ヴィランの演技めちゃくちゃ面白かったよブフォウ！」
「君実は笑いのツボ浅いだろう!?」
　失敬な。飯田くんの普段を知っていれば誰だって吹き出すに決まっている。
　現に、気を抜いていたとはいえお茶子ちゃんだって吹き出してしまったのだから。
「ＨＡＨＡＨＡ！　まあまあ飯田少年、私も君の演技は良かったと思うぞ！　ヴィランの行動原理を良く理解した、良い演技だった！」
「オールマイト……！　はい！　ありがとうございます！」
　飯田くんは感動して気づいていなかっただろうが、オールマイトの肩がプルプルと震えていたのを、私達は見逃さなかった。

魔法少女と恋の味

☆

「それじゃあ、改めて作戦を確認するよ？」

緑谷くんたちの試合も講評も終わり、次は私達の番だ。

核兵器という体で設置されているハリボテを前に、私は人差し指をたてて魔法陣を展開する。

その魔法陣の模様はこのビルの見取り図になっていて、1階、3階、4階に一つずつ点があった。

「尾白くんは『個性』を最大限活かせるように、核のある広いフロアで待機と警戒。葉隠さんは道中に待機されているのを警戒されるだろうから、敢えて1階で開始直後の奇襲を。失敗したら尾白くんのところまで戻ってね？」

「了解」

「分かった！」

少ない時間で考えた穴だらけの作戦だが、ヒーローチームの『個性』が分からない以

上、初見殺しの奇襲か待ち構えての防衛戦ぐらいしか方法がない。
それは向こうだって同じだ。『個性』を把握されると対策を立てられる可能性があるから、なるべく短期決戦に持ち込もうとしてくるはずだ。まあ、時間が経つほど有利になるような『個性』なら別だけど。
「それじゃあ、私は遊撃として3階に行くから、何かあったら連絡してね」
最後に尾白くんと葉隠さんに伝えると、私はさっそく自分の配置場所へと向かうのだった。

☆

「こりゃないよ……」
息が真っ白になるほどの寒さの中、私は手のひらを擦り合わせながら呆れ混じりに呟いた。
オールマイトの合図によって試合が開始した直後、ビルが丸々凍らせられた。
恐らく、障子くんではなく轟くんの『個性』だと思うのだが、これは流石に理不尽ではないだろうか。応用能力に長けた私が言うのもなんだけれど。
「とりあえず、葉隠さんは捕まっちゃうだろうから尾白くんの所に行かなきゃ」

私は直前で空中に魔法陣を出してその上に乗ることで回避したが、尾白くんも葉隠さんも空中に浮く手段がない。そして葉隠さんは不自然に浮き出た足跡何かで気づかれている可能性が高い。

そうなると、申し訳ないが葉隠さんの事は諦めて、尾白くんを動けるようにした方が効率的だ。

「ごめんね葉隠さん……」

透明なのに身振り手振りが幻視できるほど元気な彼女に謝りながら、私は移動を開始した。

☆

「大丈夫……じゃ無さそうだね、尾白くん」

案の定と言っては失礼だが、尾白くんは足を縫い付けられるように凍らされていた。

無理に動いては皮膚が剥がれると判断したのだろう、尾白くんは悔しそうに顔を歪めながらも大人しくいている。

「今溶かすね、少し待ってて」

「あ、ああ、ごめん。……また救けられちゃったな」

「気にしなくていいよ。困った時はお互い様、私が困った時に尾白くんが手を貸してくれればそれでいいよ」

尾白くんの足元の氷を溶かしながら、私は「あ、そうだ」と顔を上げて、

「お礼代わりと言ってはなんだけど、甘味の美味しい所を紹介してくれないかな？　私、甘い物好きなんだ」

「……ハハッ！　ああ、とっておきのお店を用意しとくよ」

可笑しそうに尾白くんが笑い、氷を溶かし終わった私も立ち上がって微笑む。

「さて、尾白くん。動けるよね？　――どうやらお出ましのようだよ」

そして、このフロア唯一の入口から、驚いた表情の轟君が姿を現した。

☆

4階に到達した焦凍は、その表情を驚愕に染めた。

建物全体を凍らせたというのに、魔乙女はともかく尾白が動けていることに驚いたのだ。

「……てめえら、どうやって」

「質問されて素直に答えるほど、ヴィランは甘くないですよ」

焦凍の言葉を遮るように、魔乙女がとんがり帽子のツバを上げた。
小さく舌打ちして、足元から再び氷を伸ばす。
「尾白くん、こっちに！」
「ああ！」
即座に反応した魔乙女が魔法陣を展開し、尾白と一緒に足場にして氷を避ける。そして魔乙女が尾白に何事かを伝え、それに尾白が頷いた瞬間、尾白はその場から姿を消した。
「……テレポートか」
「はい。尾白くんでは轟くんの相手は難しいと判断したので、障子くんの所へ送らせてもらいました。……どちらも手数の増える『個性』持ちです、相手にとって不足はないでしょう」
「こっちの『個性』も把握済みかよ……ッ！」
次は氷塊を生み出して放つ。しかし、魔乙女の目前に現れた大きな魔法陣で全て防がれた。
「いえ、鎌を掛けただけです。まあ見た目である程度の判断はできていたので、ほぼ確定事項でしたが。逆に、轟くんの『個性』は把握出来ていませんでしたから、こうして面と向かって確認できたのは重畳でした」

淡々と、特に誇るわけでもなく、魔乙女が言い切る。
先程は正直に答えないと言っていたのに、一転して長々と話しているその表情は、まるで当たり前のことだと言わんばかりだった。
「……少し喋りすぎましたね。それでは轟くん、
――お覚悟を」
直後、部屋を埋め尽くさんばかりに展開された魔法陣から、無数の光弾が発射された。
☆
「私、こういう屋内戦って結構得意なんですよね。相手の回避範囲が限定されている状況での範囲攻撃とか、楽でいいじゃないですか」
「……」
ね？　と肩を貸している轟くんに同意を求めるが、憮然とした表情で視線を逸らされるだけだった。
ちょっとやり過ぎたかな、と反省する。

『個性』で生み出した生物にだけ当たり判定がある光弾の一斉掃射は、私の得意とする戦術の一つだ。オールマイトに言わせれば「反則に過ぎる」この攻撃を、轟くんは生物ではない氷の壁で防ごうとし、壁をすり抜けてきた光弾を全身に食らっていた。

「すいませんって、さっきから謝ってるじゃないですか。そろそろ機嫌を直してくださいよ、次からは手加減しますから」

「……そうじゃねえよ」

「そうじゃないって、何がですか？」

「……負けた自分が情けなくて、機嫌が悪いんだよ」

青臭ッ！　と、私の脳内で１８禁ヒーロー『ミッドナイト』が興奮気味に叫んだ。青春大好きな彼女は、今のような青臭いことが大好きな人なのだ。

鼻息荒く鞭を振るう彼女を脳内から追い出し、轟くんの顔を見る。

憮然とした表情は変わらないが、その横顔からは何処か拗ねている子供のような印象を受けた。

☆

対戦結果は、私たちの大勝利に終わった。

轟くんはもちろん私の光弾でダウン、からの捕縛。そして障子くんはといえば、なんと葉隠さんに捕縛されていた。

私が轟くんを倒した少し後、奇跡的に気づかれていなかった上に凍るのを回避していた葉隠さんが、尾白くんと戦う障子くんの背後から近づき、拘束条件であるテープを巻き付けたのである。

運が良かったといえばそうだが、葉隠さんが動ける状況でなくとも私が援護に行って捕縛していただろうから、結果は変わらなかっただろう。

「さて、今回のＭＶＰは誰だと思う!?」

そして、今は対戦後の講評タイム。

オールマイトがクラスのみんなに訊ねると、自然と視線が八百万さんへと集まった。先ほどの講評がみんなの中で評価され、再び講評を求められているのだ。

そんなクラスメイトたちの視線を受ける中、八百万さんは少し悩むようにして、

「正直難しいところだと思います。

轟さんの『個性』による制圧は迅速で回避するスキがありませんでしたが、１人で全て終わらせようとしていた故の詰めの甘さがありました。

凍らせた後、障子さんに動ける人物がいるか確認していれば、魔乙女さんが尾白さんの救助に向かったことも、葉隠さんが動ける状態でいた事が確認できたはずです。

障子さんは、轟さんの『個性』に圧倒されたのでしょうが、事態の解決を轟さん1人に任せてしまっていました。そして、テレポートで現れた尾白さんの対応に集中するあまり、背後の葉隠さんに気づけなかった。最初から索敵に集中し、轟さんと一緒に行動すれば両者ともに不意をつかれることは無かったはずです。

ヴィランチームの方々は、各々役割を理解して最適な行動を取っていましたが、尾白さんは1度動きを封じられたこと。魔乙女さんは葉隠さんの安否を確認しなかったこと。逆に葉隠さんは、安否を伝えなかったことが、それぞれの失敗だと思います。

もっとも、葉隠さんに限っては、それが敵味方両方への奇襲にもなったので一概に失敗とはいえないかもしれませんが――」

「も、もういいぞ八百万少女！　くぅ――！　また殆ど言ってくれちゃって……！」

悔しそうな嬉しそうな、微妙な表情のオールマイトが止めたことによって、八百万さんの講評は終わった。

自然とクラスメイトたちから拍手が巻き起こる。八百万さんは、照れたようにはにかんでいた。

八百万さんの言う通り、私は葉隠さんの安否を確認しようとしていなかった。事前に用意されていたイヤホンマイクがあったというのに、だ。

私の場合、いざとなったら自分1人でどうとでも出来るという事実からくる慢心だが、チームの一員としては失格な行動だろう。

素直に反省点として受け止めた私は、今回の失敗を次に生かそうと心にとどめたのだった。

☆

その後、緑谷くん以外には大きな怪我もなく、クラス全員の対戦は行われた。

みんなそれぞれの『個性』を活かした活躍ができていたように思う。特に八百万さん。彼女が講評で見せていた頭の回転と知識の幅は、戦闘でもしっかりと活かされていたように見える。

それに、彼女が恥ずかしながらも演じたヴィランの役は、1部八百万さんに近寄りづらい雰囲気を感じていたクラスメイト達に、良い印象を残したことだろう。逆に、私に露出狂疑惑をかけてくれた彼は、あまりに迫真の演技すぎて引かれていたが。

「なんだか、相澤先生の自由な授業の後だから普通すぎて拍子抜けという感じね」

「普通な授業もまた！　私たちの自由さ！」

まあ、相澤先生のアレは自由というか『千尋の谷に突き落として上から嫌味を言って

きている』的なタチの悪さを感じるけれど。
それも彼なりの合理主義の元行われているのだから、ただ理不尽なだけではない、というのが不器用さを感じさせるところだ。
「それじゃあ！　私は緑谷少年の様子を見てくるから、みんなは教室に戻っとくように！」
バビュン！　と、土煙を残しながら走り去っていくオールマイト。突然のことにみんなは少し唖然としたが、疑問を浮かべつつも教室に戻り始めた。
「オールマイト……」
私は彼の授業を受けられるということに浮かれていて、少し前まで彼の『個性』の制限時間のことを忘れていた。恐らく限界近かったのだろう、彼は去り際口元に手をやっていたから。
緑谷くんのことも合わせて気になるが、午後の授業をすっぽかす訳にもいかない。
「愛ちゃん？　早く行こっ！」
「えっ？　あ、うん。お茶子ちゃん」
私の手を引っ張りながら歩き出したお茶子ちゃんに、私は素直に着いて行った。

☆

「オールマイト！　体は大丈夫ですか？」
「しーっ！　魔乙女少女、しーっ！」
「え、あっ。……すいません」
放課後。私はどうしても緑谷くんとオールマイトのことが心配になり、保健室を訪れていた。
扉を開けるなりオールマイトの姿が見えたので、思わず少し大きな声で聞いてしまったのだが、慌てた彼に注意されて扉を閉める。忘れそうになるが、今の姿（トゥルーフォーム）のことは一部のヒーローたち以外には秘密なのだ。
「それで、体の方は？　それと緑谷くんも」
「ああ、私は大丈夫だよ。心配をかけたね。……それから、緑谷くんの容態だが、かなり酷いものだった。右腕の複雑骨折と左腕のやけどはほぼ完治したが、体力の関係でリカバリーガールの治療は後日となった」
オールマイトの視線の先では、点滴を受けながらベッドで緑谷くんが眠っている。
大きな怪我は無さそうだが、オールマイトの言う通り細かい擦り傷などが残っていた。腕にも包帯が巻かれていて、しばらく安静にする必要がありそうだ。
後遺症などが無さそうで安心したところで、雄英の保険医であるリカバリーガールが

居ないことに気づいた。
　オールマイトの話では在庫の切れた包帯を補充しに行ったとのことで、代わりにオールマイトが緑谷くんの様子を見ていたらしい。
「済まないが魔乙女少女、私も少し所用があるので私の代わりに彼を見ていてくれないか？」
「ええ、もちろん構いませんよ、オールマイト。リカバリーガールにも言っておきます」
　オールマイトは、助かる、と私の頭を軽く撫でて、
「それはそうと魔乙女少女、『個性』の制御が前に見た時よりも更に上達していたじゃないか。A組のみんなの手前贔屓することは言えなかったが、私は君の成長が見れて嬉しかったぞ！」
「――――――――」
　それじゃあ、とオールマイトは周囲を確認してから保健室を出ていった。
　私は頭に残った熱に浮かされたような足取りで、何とかパイプ椅子に座る。
　ぽーっと焦点の合わない視線が宙を泳ぐ。いつもは引き締めている頬が、意に沿わず緩むのを止められない。
　撫でられた感触を思い出すように両手を頭に置いた私は、
「……えへへ」

恋に浮かれた生娘のように、にへらと笑った。

「あれ、ここは……？　確か、僕はかっちゃんの爆撃で……」
「あ、起きた？　緑谷くん」
「えっ？　魔乙女さ――すっごく顔緩んでるけど何があったの!?」
「えー？　んー、ひみつかなー」
「本当に何があったの!?　何時もクールな魔乙女さんのそんなに緩んだ顔、僕初めて見たんだけど！」
「ひみつだよー、えへへ」

☆

雄英高校：ＵＳＪ編
魔法少女と委員長

☆

「うわっ」

翌日。

いつも通り早めに家を出たオールマイトを見送って暫くしてから登校した私の目に飛び込んだのは、校門先で待ち構えている報道陣の大群だった。

思わずドン引きして声を出してしまったが、幸い向こうはこちらに気づいていない様子だったので、近くの木陰に身を隠す。

「ヒーフーミー……えー、近くにある局の殆どが来てる……」

彼らの目的は十中八九オールマイト、ないし彼の授業を受けている私たちに取材をする為だろう。

学校に入らず校門前で屯しているのは、雄英の警備を警戒してるからだ。多数のヒーローとその卵が在籍している雄英のセキュリティは、そんじょそこらのヴィランには侵

入できないようになっているから。
「あれ？　魔乙女じゃん」
「おっ、ホントだ」
「そんな所で何してるん？」
　と、私がどうやってあの集団を避けようか考えていると、見慣れた３人が声をかけてきた。
　確か、切島くん、耳郎さん、上鳴くん、だったはず。昨日の授業終わりに自己紹介したので覚えている。
「おはよう３人とも。私がここで何をしてるかは、あれを見れば分かるよ」
　そう言って私が報道陣を指差すと、３人は「うげっ」とでも言いそうな表情を浮かべた。
「おい上鳴、お前電気系の『個性』だろ？　こう、チョチョイっとマイクとか壊してくれよ。そしたら自然と解散すんだろ」
「おお！　その手があったか！　よーしそうと決まれば、」
「馬鹿。学校の中ならまだしも、外での『個性』使用は法律違反でしょ」
「下手すれば上鳴くんがやったってバレて、損害賠償請求されるかもね。うん百万単位で」

「いやーやっぱ平和的解決方法が一番だと思うんだ！」
　手の平くるっくるだな、と切島くんが呆れたように言う。
「あ、そうだ。裏口とかはどう？　流石にアイツらもいないでしょ？　通るのに許可必要だけど、そこ何とかすれば行けそうじゃない？」
「ああ、それいいね。じゃあ私が相澤先生に電話して許可もらっとくよ」
　制服のポケットから携帯を取り出して、電話帳を開く。あいうえお順に並んでいるので、相澤先生はすぐ見つかった。
「――あ、おはようございます、相澤先生。実は……ええ、はい。その通りです。それで許可を頂きたくて。……はい、ありがとうございました」
　流石相澤先生。私たちがこうして裏門を通ろうとするのは予想の範囲内だったらしく、事前に許可をとってくれていたようだ。
　私がそれを伝えようと顔を上げると、３人の驚いたような顔があった。
「どうしたの？」
「いや、何で相澤先生のケー番知ってるのかと思ってさ……」
「え？　普通知ってるものじゃないの？」
「いや入学一週間でそれはねぇよ！」
　まあ、私はオールマイトと連絡が取れない時の緊急連絡先として、相澤先生と電話番

号を交換していたのだけれど。
それを説明するとなるとオールマイトとの関係も話さなければいけないわけで、必然、時間のない今、私たちは適当に誤魔化して教室へと向かったのだった。

暗闇に佇む、人影に気づくことなく。

☆

さて、今朝は朝から遠回りをすることになった訳だけど、私達はしっかりと始業時間までに教室へと着いていた。
その道中で3人と打ち解け、尾白くんや葉隠さん同様、敬語はなしということになった。特に耳郎さんとは好きな音楽バンドの話で盛り上がり、お互いに名前で呼び合う仲になっている。
私と響香ちゃんの仲を見て、上鳴くんが「女子同士の友情って、こう……良いよな！」と切島くんに同意を求め「おう！　友情は良いもんだ！」と返され「違う、そうじゃない」とコントをしていたのには、思わず吹き出してしまった。
「さて、ホームルームの本題だ。今日は君らに――」

相澤先生の戦闘訓練の結果についての講評が終わり、いつもの調子で続いた言葉に、みんなが「また臨時テスト……!?」と息を呑む。

「『委員長』を決めてもらう」

が、普通の学校のような議題にみんなはホッと息を吐いた。……のもつかの間、

「はいはい！　俺がやる！」

「俺もやりたい！」

「うちもやりたいっす」

「俺にやらせろォ！」

「オイラのマニュフェストは女子全員膝上３０センチごぼぁ!?」

あ、つい『個性』が滑った。いやだって、膝上３０センチは流石に許容できない。そんなのほぼスカートの意味をなしていない。ベルト代わりの布だ。

『個性』で黙らせても逆に興奮している変態は置いておくとして、雄英では『委員長』という在り来りな役職でさえ、特別な意味を持っている。

ヒーローという職業は、何も全てを一人で全てを行なっているのではない。一部の例外（オールマイト）なんかを除き、ヒーローズたちは相棒（サイドキック）という補佐的存在を雇っている。そしてサイドキックを統率するのに必要な経験を『委員長』という形で得ようと、みんなこんなにやる気満々な訳だ。

「いい加減にしないか、みんな！」
そんな中、飯田くんの一括で喧騒が静まりかえる。
「他を牽引するという重大な責務だぞ！　やりたいものがやれるものでは無い！　周囲からの信頼あってこそ務まる聖務……！　民主主義に則り、真のリーダーを決めるのならば――これは、投票で決める議案ではないだろうか！」
真面目な顔で言い切った飯田くんの右腕は、天を貫かんばかりに突き立っていた。
「時間内に決めりゃ何でもいいよ……」
それでいいのか、教師。

☆

「あ、投票の前に少しいいかな？」
「む？　何だ、魔乙女くん」
「私のこと、投票対象から外してもらっていい？」
「それは、まあ君がいいのなら構わないが……何故だ？」
投票の準備をしていた飯田くんは、私の提案に困惑気味に聞き返した。
まあ当然だ、私だって飯田くんたちと同じ仮にもヒーローを志す者だ。貴重な経験を

むざむざ逃す理由はない。
だけど、
「単に、私よりも適任だと思える人がいるからだよ。私としてはその人に委員長になって欲しいから、自分が邪魔になる可能性があるなら辞退しておきたいんだ」
「なるほど……魔乙女くんがそうまでして推薦したいと思える人物がクラスにいるのか。分かった！　君の気持ちを無下にするのは俺としても不本意だ。クラスのみんなには俺から説明しておこう」
「うん、ありがとう。飯田くん」
まあ、その人物ってのは君のことなんだけどね。

☆

そんな訳で、自分を対象から外してまで飯田くんを推薦した結果、獲得票3で緑谷くんが委員長に、獲得票2で八百万さんが副委員長になった。
飯田くんの得票は残念ながら1票。彼に入れたのは残念ながら私だけだったらしい。
「くっ……！　分かってはいた、分かってはいたが、せっかく票を貰ったというのに……！　すまない、俺に票をくれた誰か！　俺は、俺は……！」

「飯田ちゃん、少し熱くなりすぎよ」
「ハッ!?　す、すまない！」
梅雨ちゃんに言われ、飯田くんは慌てて席に座り直した。
私としても、こうなるのは予想の範囲内だったが、少なからず不満は残っていた。
残っていたが、それを解消する暇もなく授業は始まる。
私はひとまず気持ちを切り替えることにして、緑谷くんの号令で頭を下げた。

☆

緑谷くんと八百万さんに票が集まった理由は少し考えればわかる。十中八九、先日の戦闘訓練だ。
みんなの脳裏に強烈なインパクトを与えた緑谷くんの『個性』、それから八百万さんが講評で見せた知識と戦術眼。八百万さんはその後の対戦で口だけではないと示して見せたのもあり、彼女が相応しいと判断した人がいるのだろう。
だが、それらはイコールでリーダーに相応しいということにはなり得ない。
例えば緑谷くん。
確かに彼の『個性』は強力だ。単純な破壊力で比べるのならば、クラスメイトの中で

並べるのは私か、可能性として爆豪くん、轟くん、八百万さんといったところだろう。

そして咄嗟の機転、情報整理とそれを応用する力にも長けている。それは幼なじみ故に『個性』や性格についての情報が多かった、対爆豪くん戦で示されている。ピンチに陥ると視野が狭まるのが玉に瑕だが、そこは今後意識していけば改善できる点だ。

しかし、それら全ては『戦闘において示された』ということに注意しなければならない。

いわば彼が評価された点は『バトルセンス』。『委員長』に必要な『他を牽引する力』とは違う。

というか個人的な意見を含めて言わせてもらえば、緑谷くんは『他を牽引する』のではなく『自然と他を惹き付ける』のだと思う。

『個性』が制御できず、恐らく現時点では殆どのクラスメイトに負ける実力の緑谷くんが必死に頑張るからこそ、周囲はそれに惹かれ、彼を支えようと付いて行く――そういうタイプだ。

そこら辺は、少しオールマイトに通じるところがある。

続いて八百万さん。

彼女は『個性』の制御と応用、それから戦術眼と知識、状況判断能力に長けているのが、先日の戦闘訓練において示された。

とはいえ、こちらも全て戦闘面の話だ。頭脳に関しては入試上位という事だから心配いらないだろうが、多分彼女、1度大きな失敗をするか、小さなミスでも積み重ねすぎるとなかなか立ち直れない質だと思う。

現に、訓練では峰田くんのミスで戦況が崩れかけた時、目に見えて狼狽えていたし。いわば、彼女はまだ誰かにとっての支柱となれるほど精神的に強くはないのだ。

だが副委員長という役職では、彼女は適任だと思う。

彼女の精神面を鍛えるためにも、程よく責任が伴う役職というのはピッタリだ。

八百万さんが精神面において成長した時、彼女は文字通り文武両道の立派なヒーローになれるだろう。

そして、私が推薦する飯田くん。

彼は普段の真面目すぎる印象のせいで薄れがちだが、『委員長』に必要な『他を牽引する力』というものを持っている。

それはつい先程、あれだけ騒がしくなっていたクラスメイトたちを、一喝しただけで静めたことで証明されている。

さらにさらに、私が彼を推薦する点はもう一つある。

ヴィランという彼の目指すものと真反対の役を与えられた、戦闘訓練の時しかり。敢えて自分が不利になる可能性のある投票という方法を提案した、先ほどの議案しかり。

飯田くんは例え自分にとって恥ずべきものであろうが、不利になるものであろうが、それが誰かのためになるのならば、迷いなくそれを実行に移せる人物だというところだ。

それは『個性』に溢れたクラスメイトたちを牽引していく上で、とても大切なものだ、と私は思う。だからこそ、私は自分の可能性を潰してでも、彼に『委員長』という役職を任せたかったのだ。

という話を、お昼ご飯で賑わう食堂にて、私は緑谷くん、お茶子ちゃん、飯田くんといういつものメンバーに力説していた。

緑谷くんは終始真面目に話を聞いてくれて、逐一相づちや頷きを返してくれていた。

お茶子ちゃんは、開いた口が塞がらないという感じで惚けている。

そして、私が褒め倒した飯田くんは、嬉しそうな恥ずかしそうな複雑な表情で悶えていた。

「やっぱり魔乙女さんは凄いね……。そこまで言葉に出来るほど考えていたなんて、僕は我欲を優先して自分に入れたのに」

「わ、私もデクくんに入れちゃった。戦闘訓練の時にチーム組んでたし、その印象が強すぎて……」

「緑谷くんもお茶子ちゃんも、間違った事はしてないよ。緑谷くんみたいに向上心を持って事に取り組むのは当たり前のことだし、お茶子ちゃんは緑谷を頼れる人だって思ったってことだよね？　これはあくまで私の持論。考え方の一つとして受け入れるのは良いけど、それを自分の考えだと思わないようにしないと」

緑谷くんは神妙に、お茶子ちゃんはこくこくと頷いてくれる。うん、素直なのはいい事だけど、素直すぎて自分の考えが塗りつぶされるようなことは避けないとね。

……ところで、だ。

「いつまで悶えてるの？　飯田くん。ご飯冷めちゃうよ？」

「君のせいだろう、魔乙女くん！　君が僕を褒めちぎるから、嬉しさと恥ずかしさが入り交じった気分で悶えてるんだ！」

「「僕？」」

真っ赤な顔を隠すように何時もの変な動きをしていた飯田くんは、私たちが返した疑問に動きを止めた。

その表情は「しまった」と言わんばかりであり、普段と違う一人称はそれが彼の素であることを証明している様なものだった。

「ちょっと思ってたんだけど、飯田くんって……坊ちゃん？」

「ぼっ……!?」

顔を青くして仰け反る様は、まさに図星といった感じだ。
「はぁ……、そう言われるのが嫌で一人称を変えていたんだが……」
飯田くんは緑谷くんとお茶子ちゃんの興味津々な視線に耐えきれなかったのか、諦めたように息を吐いて説明してくれた。
「俺の家は代々ヒーロー一家なんだ。俺はその次男だよ。聞いたことはないか？　ターボヒーロー『インゲニウム』って」
「知ってる！　知ってるよ！　東京に65人ものサイドキックを雇っている大人気ヒーローじゃないか！　ハッ!?　も、もしかして……！」
「そうさ！　それが俺の兄さ！」
「あからさまっ……！」
「うわあ凄いやっ！」
誇らしげな飯田くんにお茶子ちゃんは苦笑いし、緑谷くんは興奮のあまり鼻息が荒くなっている。
まあ、私は知っていたけれど。自宅にあるオールマイトのデスクを片付けている時、クラスメイトの関係者ヒーロー一覧があったから。
言い訳をさせてもらうと、私は1度目にした情報は何であろうと記憶しようとしてしまう癖があるから故意的に覚えたのではなく、あくまで事故のようなもので、責任は管

理不足だったオールマイトにある。私は悪くない。
「規律を重んじ、人を導く愛すべきヒーロー。俺はそんな兄に憧れてヒーローを志した。魔乙女くんは俺を評価してくれたが、俺自身はまだ人を導く立場には早いのだと思っている。それに、俺よりも実技入試の仕組みに気づいていた緑谷くんの方が適任だと思う」
飯田くんはそう言って、私の記憶する限り初めての笑顔を見せる。
私も緑谷くんもお茶子ちゃんも、初めて見る飯田くんの素直な笑顔に驚いていた。
「……？　何かおかしかったか？」
「飯田くんの笑うとこ、初めて見たなって……」
「うんうん。いつも眉間にしわ寄せてるか、しわ寄せてるかだもんね」
「それしわ寄せてしかないよ、お茶子ちゃん」
「なっ!?　お、俺は笑うぞ？　それにしわを寄せてなんていないはずだ！」
「寄ってるよ？」
「寄ってるね」
「寄ってたね」
「そんなバカな！」
それはそうと、緑谷くんが実技試験の構造に気づいていた、と飯田くんは言っていた

が、それは違う。
緑谷くんはお茶子ちゃんが瓦礫に足を取られているのを見て、思わず体が動いたと言っていた。彼はヒーローとして当たり前のことをやっただけで、きっとそれは飯田くんにだって出来るはずの事なのだ。
緑谷くんを見ると、彼はこちらを見て何かを決めたように頷いた。私も彼が話そうとしていることを察して、頷きを返す。
「飯田くん、実は――」
直後、緑谷くんの言葉を遮るように、けたたましいサイレンが鳴り響いた。

☆

侵入者警報。
その言葉を聞いた瞬間、私は緑谷くんたちに避難するようにと一言告げてから、魔法陣を展開して校舎の正面入口近くへと転移した。
去り際、戸惑った表情の3人が見えたが、彼らなら上手く避難できるだろう。食堂にはかなりの人数の生徒がいたが――うん、こういう時こそ飯田くんの出番だ。是非頑

張って欲しい。

「さて、侵入者は……なんだ、マスコミか」

正面入口の真正面で報道陣に囲まれている相澤先生とプレゼントマイクを見て、なんだか拍子抜けする。

侵入者って言うからヴィランでも来たのかと思ったが、ただの一般人だった。

ただの一般人？

冗談じゃない、ただの一般人に雄英のセキュリティが破れてたまるか。仮にもヒーローが多数在籍した国立施設なのだ。

報道陣は正面入口の真正面に列状になって押し寄せている。つまり、堂々と正門から来たということだ。

正門は一見ガラ空きだが、専用のＩＤを持っていない人物が侵入しようとすると防壁が作動するようになっている。

可能性として考えられるのは、防壁が作動しなかったか、もしくは、

「……やっぱり壊されてる」

正門付近へと移動すると、作動した形跡の残った防壁が、まるで崩れるようにして壊されていたのが確認できた。

壊れ方からして物理的な破壊が行われた様子はない。どちらかと言うと、まるで剥がれるように崩されている。
やはり一番可能性が高いのは、
「『個性』による破壊」
「ビンゴ。大当たりだよ魔乙女　愛」
言葉とともに、突然現れた黒い霧のような所から病的に細い手が伸びてくる。
完全な視覚外からの不意打ち。
その手は、私の首元を掴むように伸びてきて――
「それはどうも。それじゃあ大人しくしてくれますか？」
「は？」
私はその手首を掴み返し、背負い投げの要領で投げ飛ばした。
「死柄木　弔！」
が、地面にも現れた黒い霧が手の主を飲み込んでしまう。よほど焦ったのか、名前を呼んでしまいながら。

下手人を確保出来なかったのは痛手だが、思わぬ収穫だ。
「おいおい……。仮にも死角から狙ったんだぞ？　それを何も見ないで掴んで背負い投げとか……オールマイトの義娘ってのは伊達じゃあないな……」
声に振り向いた先には、異様な男と黒い霧が存在していた。
男は全身に手型のような物をくっつけており、顔すら確認出来ない。だがその隙間から伺える目は、幾度となく見たチンピラなんかじゃないホンモノ（ウィラン）の目だ。
黒い霧はそもそも人なのかさえ分からない。たぶん先ほどの声からして成人男性、あの姿は『個性』によるもの。手型の男が転移したことからワープ系の『個性』。
「話は捕まえてから聞く主義ですが、今は一つだけ。あなた達の目的は何ですか？」
「……オールマイトの殺害」
ああ、どうやら死にたいらしい。
「『ぶち殺せ（SHOT）』」
速度、威力ともに最大。空気を固めた不可視の弾丸。対象は手型の男。

私の肩口から放たれるそれは、オールマイトを持ってして避けることを優先する必殺の弾丸だ。

「脳無」

だがそれは、手型の男ではなくその前方に出現した黒い腕に直撃した。

肉と骨の弾けて混ざる音が響くが、黒い霧の向こう側に見える黒い腕の主は気配一つ変える様子がない。

「……驚いた。脳無にダメージを与えられるなんてな……やっぱり先生の言う通り、偵察に来てよかったよ……。それじゃあな魔乙女（オールマイトの義娘）愛」

待て、と叫ぶ暇もなく、手型の男たちは黒い霧に包まれ消えていく。

後に残ったのは逃した悔しさで奥歯を強く噛む私と、脳無と呼ばれた化物の飛び散った血肉だけだった。

「……あれ、もしかしなくてもこれ、ビジュアル的に私が人殺したみたいな感じになってない？」

遠くから聞こえたサイレンの音に我に返った私は、まるで殺人現場のような悲惨な状

況に顔を青ざめた。

☆

やりすぎた。

今回の反省点は、ただその一言に尽きる。

飛び散った肉片と骨。コンクリートの地面に染み付いた血痕と、鼻を突く錆びた鉄の臭い。

おまけに『個性』の反動で、周囲の木々が数本台風に晒されたように荒れていた。

そして、少なくない返り血で制服を汚した私。

もう誰がどう見ても通報ものである。

もちろん警察が到着する前に『個性』でどうにかこうにか誤魔化し、相澤先生たちが来る前に撤収したので、生徒指導室に連れていかれるなんて事にはならなかったが。

ただ相澤先生やプレゼントマイクを誤魔化せたかは怪しい。あんな形(なり)だが、あの2人はプロのヒーローだ。それも、今のヒーロー社会では少なくなった本物の。

そう考えると、『個性』で戦闘の跡を無かった事にしたのは戯作だったのではないかと思い始める。いっそ半径5メートル程でもいいので、跡形も無く吹き飛ばしておいた方

が良かったかもしれない。
　失敗したかなあ、と思いつつ教室のドアを開ける。もちろん今の私は食堂を出た時のままの学校で、血の跡も臭いもない、はずだ。
「あっ、愛ちゃん！　どこ行ってたのもう、心配したんだよ!?」
　と、私が帰ってきたことに気づいたお茶子ちゃんが、肩をぷりぷりと怒らせながら詰め寄ってきた。
　見た目の印象とは裏腹に、その背後には逆らいがたいオーラのようなものが垣間見得る。どうやら一番怒らせてはいけない人を怒らせてしまったようだ。
「ご、ごめんねお茶子ちゃん。今日はオールマイトが非番だったし、先生たちも人手が足りなくて困ってるだろうから、そのお手伝いを……」
「なら私達も連れていった方が良かったんじゃないかな?」
「……いや、ほら、私の『個性』の転移は人数制限があるから」
　もちろん真っ赤な嘘である。基本的に私の『個性』には制限なんてありはしない。明確なデメリットがあるのは、せいぜい加減を間違えれば威力が高すぎて敵味方関係なく吹き飛ばすような技だけだ。
　流石に私の『個性』を把握していないお茶子ちゃんでは反論ができなかったようで、追求の勢いが弱まる。

そして同時に、始業のチャイムがなった。
これ幸いと自分の席に戻る。
その間も、私の体には非難するような視線が突き刺さっていた。

☆

「おい魔乙女。お前何やらかした」
放課後。
緑谷くんの提案で委員長の座が飯田くんに譲られたり、お茶子ちゃんや飯田くんから私の評価を聞いたらしい八百万さんが、私に対して宣戦布告まがいな意気込みを語ったりと色々あったが、当の私は放課後になると同時に相澤先生に職員室へと連行された。
「ナンニモシテナイデスヨ」
相澤先生からの阿呆を見るような視線が痛い。だが、私とて素直に白状するにはいかない。
仮にも私はオールマイトの養子（のようなもの）。ヒーロー育成の最高峰である雄英で事を起こしたとなれば、それはオールマイトの名に傷をつけることになる。
何より、私は説教が嫌いなのだ。

「嘘つけ、監視カメラに全部映ってんだよ」
監視カメラの存在を確認し忘れた数時間前の私、ファッ○。
「……安心しろ。今から説教しようとかそういうのじゃない、そんな事に時間を割くのは合理的じゃないからな。俺が聞きたいのは、監視カメラに映ってたアイツらの事だよ」
「ああ、なるほど」
流石合理主義者の相澤先生。それなら安心して全てを話せるというものだ。
「……死柄木　弔に、ワープ系の『個性』持ち。それから脳無とかいう化物か」
やっかいだな、と相澤先生が目を細める。それについては私も同意である。
ワープ系の『個性』というのは、それだけで敵（ヴィラン）に回すと厄介だ。
十中八九、黒い霧の男は移動手段だろう。そして死柄木と呼ばれた男が恐らく主犯。脳無は脳筋対策要員といったところか。
「この件は俺が預かる。お前は気兼ねなく説教されて来い」
「はい、それでは失礼しま――今、何と？」
あっさり解放されたなあ、なんて思いながら立ち上がろうとして動きが止まる。
驚きで止まったのではない。いやそれもあるが、両肩に乗った手で抑えられて腰が上

がらないのだ。

恐る恐る、背後を振り向く。

「やあ、魔乙女少女。

――また無茶したんだって？」

「お、オールマイト……」

私は、全身から血の気の引く感覚というものを久々に味わった。

☆

魔法少女とＵＳＪ

☆

私がこってりとオールマイトに絞られた、その翌日。
今日の午後一発目の授業はヒーロー基礎学。内容は『救助訓練』。
授業前に告げられた相澤先生の説明では、オールマイトと相澤先生、それからもう一人の３人で担当することになったらしい。
ヒーロースーツの着用は各自の判断に任せる、ということなのだが、そもそもヒーロースーツとか関係ない私は、皆より一足先に移動用のバスに乗るために、校舎の外へ出てきていた。
「あ、相澤先生。ちょっといいですか？」
「……なんだ？」
バスの手前まで行くとちょうど相澤先生一人だったので、これ幸いと声をかけるととても嫌な顔で対応された。
そんな嫌な顔されるようなことしてないと思うんだけど、なんて思いつつ、

「今日は予定と違って3人体制で授業を見るとのことですけど、もしかしなくてもあの件と関係ありますよね？」
「……他の奴には黙ってろよ」
「なるほど、はい。分かりました」
苦虫を噛み潰したような顔に進化した相澤先生に軽く頭を下げて、私はみんなを待つことにした。

☆

「あれ？　緑谷くん、戦闘服（バトルスーツ）じゃないんだね」
「あっ、ホントだ、デクくん普通のジャージだね！」
「へっ!?　あ、いや、この前の戦闘訓練でダメになっちゃったから」
ああ、そういえば爆豪くんの攻撃をもろにくらいまくっていたっけ。そりゃボロボロにもなるってものだ。
とはいえ流石に、関節を防護するプロテクターやマスクなんかは買い直したらしい。
「なるほど、爆豪くんのせいだったんだね」
「え？　……いやあの、魔乙女さん？　どうしてそんなにいい笑顔に……？」

「いやあ、緑谷くんがせっかくお母さんに買ってもらった戦闘服だったって言うのに、爆豪くんのせいでダメになっちゃって、残念だったねえ」
「魔乙女さん!?」
　チラリと横目で爆豪くんを伺うと、後ろ姿ではあるが肩が小刻みに震えているのが確認できた。
　彼の性格ならすぐさまにでも噛み付いてきそうだったが、少なからず罪悪感はあるようだ。彼と緑谷くんは幼なじみという事だから、罪悪感を感じているのは緑谷くんのお母さんに対してだろうけど。
「……ねえ、かっちゃん？」
「さっきからンだよクソが殺すぞ!!」
　少し柔らかくなったのだろうけれど、止めにあだ名で呼んであげれば速攻で噴火したので、根っこの方はあんまり変わってなさそうだった。
「か、かっちゃんが弄られてる……さすが雄英……！」
「あれは愛ちゃんが面白がってるだけだと思うけどなあ……」

☆

「ねえ緑谷くん、爆豪くんと何かあったの？」
バスの中で隣になった緑谷くんに、周りに聞こえないようにひそひそ声で尋ねる。
緑谷くんは私の質問に対して少しの間口元をモゴモゴと動かしていたが、私の耳元に顔をやってひそひそ声で話してくれた。
なんでも、あの戦闘訓練の後、緑谷くんは自分の『個性』がオールマイトから授かったものだということを、爆豪くんに吐露したそうだ。もちろん、オールマイトからということは隠していたし、『個性』の詳細も伏せていたらしいが。
その時、爆豪くんも緑谷くん同様に心中を吐露した。曰く、「氷のやつに敵わないと思ってしまった」、「ポニーテールの言うことに納得してしまった」、「大砲女に入試で負けたのを認めてしまった」と。
それらは彼の膨れ上がった自尊心にダイレクトに響いたらしく、有り体に言ってしまえば彼は多少改心したようだった。
「ふーん、そんな事があったんだ」
そういえば、緑谷くんが保健室から出ていった後に、オールマイトが爆豪くんを探しに飛び出して行っていた。オールマイトも、爆豪くんの自尊心が傷ついていたのに気づいていたらしい。
緑谷くんの話では、緑谷くんとの会話で決意を決めた爆豪くんを呼び止めてしまい、

逆に爆豪くんの邪魔をしてしまったみたいだけど。
それにしても、大砲女って。
なんだか、私の印象が個性把握テストのデモンストレーションで固定されているようで、色々複雑な気分だ。
私としては後先考えず飛び出すような性格ではないので、そこら辺勘違いされないように呼称を改めて欲しいのだけれど。
「おっ、なんだよ魔乙女に緑谷、そんなに仲良さげにひそひそ話して？」
「私、思ったことを素直に言っちゃうのだけれど、もしかして愛ちゃんと緑谷ちゃんってそういう関係なの？」
「それはない。断じて」
「お、おう……」
「……ごめんなさい、気に触ること言っちゃったみたいで」
やだなあ、どうしたの２人ともそんなに引いて。私は事実を言っただけだよ？
「……前々から思ってたけど、もしかしなくても僕って男としての魅力とかないよね」
「き、気にすることないって緑谷！　魔乙女が特殊なだけだって！」
「そ、そうだぞ緑谷くん！　魔乙女くんが特殊なだけだ！」

「……そっ、そうだよね、うん。魔乙女さんってだいぶ特殊だもんね！」

おいそこの男子３人。聞こえてるんですけど。

まあ、特殊なのは否定しなくもないけど。私は生涯で誰かに侍ることになるのなら、オールマイトの傍って決めてるだけだから。

そんな事より、だ。

「爆豪くん、ちょっといいですか？」

「……あ〝あ〝？」

私が爆豪くんに話しかけると、彼は人を殺しそうな声と表情を返してくれた。うーん、やっぱり高校生の顔ではない。

「私のこと、大砲女じゃなくて愛って名前で呼んでくれませんか？」

「「「は――はあ!?」」」

「え？」

私が努めてにこやかに爆豪くんに提案すると、クラスメイトの殆どが叫び声をあげた。声を上げてない人もこっちを驚愕の表情で見ているし、相澤先生は呆れたような視線を向けてきている。

私、そんな変な事言った……？

「断る」

「「「即答!?」」」」
「まあまあそう言わず。大砲なら八百万さんだって使ってましたし、差別化的な意味でもぜひ名前で呼んでいただければな、と。なんなら私は勝己くんって呼びますから」
「呼ぶなゴラ殺すぞ！」
「あ、かっちゃんの方が良かったですか？」
「いっぺん死ぬかテメェ!!」
「そんなに怒っちゃ嫌ですよ、かっちゃん」
「爆轟落ち着け！　魔乙女も煽りすぎだって!?」
　ものすごい顔で私に襲いかかろうとする爆豪くんを、大慌てで切島くんが羽交い締めにする。
　たしかに少し弄りすぎたようだ。爆豪くんが今にも殺しにかかってきそうだし。
「すいませんかっちゃん、弄りすぎましたかっちゃん、それにしても煽り耐性低すぎじゃないですかかっちゃん？」
「殺す!!」
「やめろって魔乙女！　爆豪もこんな狭い場所で『個性』使おうとするなって！」
「お前らもう着くぞ、いい加減にしておけよ」
　はい、と返事を返して席に戻る。

緑谷くんの恐れを知らない人を見るような、怖い人を見るような目が印象的だった。

☆

「すっげぇー！　ＵＳＪかよ！」

到着するなり、切島くんが驚きの声をあげる。

実際彼の言葉はその通りで、様々な状況を想定して作られた施設は、まるで一種のテーマパークの様だった。

切島くんだけでなく、私を含めた殆どの生徒がそれぞれ驚いていると、私たちを出迎える人影があった。

『ようこそ、皆さん！　水難事故、土砂災害、火災、ｅｔｃ……あらゆる事故を想定して僕が作った演習場。その名も――

嘘(U)の　災害(S)や　事故ルーム(J)　へ！』

本当にＵＳＪだったらしい。

というか、誰かと思えば私のよく見知った人だった。

「お久しぶりです、１３号さん」
『お久しぶりですね、魔乙女さん。ですが、ここでは１３号先生ですよ。とはいえ、あなたに先生と呼ばれるのは少しむず痒い気もしますが』
「話は後にしろ、１３号、魔乙女。今は授業中だぞ」
私と１３号先生が久しぶりの再会に和んでいると、相澤先生が呆れたように注意してくる。
そういえば授業中だった、と思い出した私は、１３号先生とハイタッチしてからみんなの元に戻った。気になると言わんばかりの視線が突き刺さってくるが、自業自得なので仕方あるまい。
久しぶりに再会したとはいえ、気の緩んでいた私が悪いのだ。
ちなみに、彼と知り合ったのは例の如くオールマイトの手伝いをしていた時だ。
災害救助を主に活動している１３号先生は、オールマイトが敵（ヴィラン）の対処をしている間に救助を行うことが多い。その間手持ち無沙汰な私は１３号先生の手伝いをするぐらいしかなく、自然と話す中になったのだ。
今みんなに語っている彼のヒーロー理論とも呼べるものは、私もよく知っている。
あの頃の私にとって、彼の言葉はいい刺激になったものだ。
人を簡単に殺せる『個性（ちから）』を、人を救うために使う。

なんてことは無いヒーローにとって当たり前の話ではあるが、彼の言葉は確かな重みがあった。

『――ご清聴、ありがとうございました』

話が終わり、13号先生が芝居がかった調子で頭を下げると、わっとクラスメイト達から拍手と歓声が上がる。

かくいう私も、改めて彼の話を聞いて思わず拍手してしまっているほどだ。クラスメイトたちの感動は押して然る可しだろう。

「それじゃあ、まずは……」

拍手が一段落したところで、相澤先生が何かを言いかけて動きを止める。

その視線の先にあるモノを見た私は、思わず相澤先生のすぐ隣まで駆け出していた。

相澤先生の振り向いた先。

USJの中央にある噴水付近で、小さな黒い渦が出現していた。その渦は徐々に大きくなっていき、そこから複数の人影が現れてくる。

その中には、つい昨日見たばかりの顔があった。

死柄木　弔。

黒い霧の男。

そして、私の『個性』を防いだ化物。

「……先生、オールマイトは？」

「……チッ、制限時間ギリギリで今は休んでる！」

一瞬答えるか迷う素振りを見せた相澤先生だったが、クラスメイトたちには聞こえないように注意しながら、私に教えてくれる。

そうか。……それなら。

「それなら――行きますね」

「待て、魔乙女!!」

悪いが、今ばっかりは止まれない。

昨日の襲撃とも呼べない邂逅。そして狙ったような今の襲撃を見れば、彼らがオールマイトを狙ってきたのは明らかだ。

なら、殺すしかない。

普段の私では考えられない飛躍した発想に従い、私は相澤先生の制止を振り切って飛び出した。

☆

魔法少女と襲撃事件

☆

私の『個性』は実に万能だ。

こうして、足元に展開した魔法陣を足場にして空中を跳ねるように移動することが出来るし、『個性』らしき銃弾の類も魔法陣で防げる。

一見幾何学的な模様が描かれたガバガバな魔法陣ではあるが、まるで空気で出来た壁のように堅牢かつ巨大だ。少し構造を弄れば、銃弾を跳ね返すことも出来る。

「一塊になって動くな！」

背後から相澤先生の注意喚起が聞こえる。同時に、緑谷くんたちの戸惑うような私を呼ぶ声も。

けれど私はそれを無視して、空中を駆けた。

距離を詰めていく度に、『個性』による攻撃は増えていく。その全てを大きめに展開した魔法陣で防ぎながら、その手前に私が通り抜けられるサイズの魔法陣を展開した。

強めに宙を蹴り、魔法陣を通り抜ける。淡い桜色の光を纏って宙に飛び出した私の服

装は、戦闘モードの魔法使い的衣装に変わっていた。

さらに、右手のひらに小さな魔法陣を展開し、そこに左手を突っ込んで、掴んだ物を引っ張り出す。魔法使いの必須アイテム、魔法の杖だ。デザインは少し近代的だけど。

「いい加減弾幕が鬱陶しいので――少し散ってもらいます」

宙で逆さになった私は、広場の中央で固まっている一団に杖を向けた。

「『砲門展開(SET)』。『魔力充填(CHARGE)』」

個性把握テストでも見せた大砲型魔法陣を展開。数は４つ。

私の『個性』の源、『魔力』を弾丸として充填。同じく４つ。

「目標、小悪党(ヴィラン)、

――『一斉掃射(FULL BURST)』」

コツン、と軽く魔法陣を叩きながら唱えてやると、それぞれの砲門から極太のレーザーが飛び出した。

☆

それはまさしく、蹂躙の号砲だった。
宙に浮かぶ一人の少女が放った砲弾、いやレーザーは、進行方向に現れた黒い霧を易々と貫いて、広場の手前で『個性』による射撃を行っていた敵（ヴィラン）たちを飲み込み、爆炎をあげた。
「なんっ……だ、あれ……」
誰かが驚愕の声をもらす。
個性把握テストで見せた大砲と、戦闘訓練で見せた光弾の合わせ技のようにも見えるが、威力が桁違いだ。
煙の晴れつつある着弾地点の地面には大きなクレーターが出来ており、既に死に体な敵達が転がっていた。
「せ、先生！　どういう事っすか!?　一体何が起きて……！」
「アレは敵（ヴィラン）だ！　魔乙女のやつは先走って突っ込んでいったが、お前らはさっさと避難しろ！　13号、生徒を頼む！　それから上鳴、『個性』で外への連絡試せ！」
「う、うっす！」
戸惑う生徒達に相澤が指示を飛ばし、各々がそれぞれが自分なりに状況を把握していく。
敵の襲撃。生徒の独断先行と、外部との通信遮断。

有り体に言って、状況は最悪の一言に尽きた。
「先生はっ!?　先生はどうするんですか!?」
「俺は魔乙女を止めに行く！　いいからさっさと避難してろ！」
「でもっ！　イレイザーヘッドの戦闘スタイルは『個性』を消してからの捕縛じゃ――」
「一芸だけじゃヒーローは務まらん！」
困惑の抜けきらない様子の出久に、相澤は一言で言い切ると、魔乙女を止めるために飛び出して行っていた。
『皆さん、早くこっちへ――』
「させませんよ」
13号の指示に従い避難を始めた生徒達の進行を阻むように、黒い霧が生徒達の前に立ちふさがる。
目らしき部分を憎々しげに細めたまま、その黒い霧は成人済みらしい男の声で、目的を告げた。
「初めまして、我々は敵（ヴィラン）連合。僭越ながら、この度ヒーローの巣窟雄英高校に入らせて頂いたのは、
平和の象徴『オールマイト』に、息絶えていただきたいと思ってのことでして」

☆

「……随分と派手にやってくれたもんだな」
「先に仕掛けたのはそっちですよ。正当防衛、というやつです」
広場に着地した私を迎えたのは、昨日の襲撃時と全く変わらない様子の死柄木だった。
傍には例の化け物がいるが、黒い霧の男の姿は見えない。砲撃の邪魔をしようとした様だったけれど、失敗して別の作戦に移行でもしたのだろうか。
まあ今はどうでもいいか。『個性』の効果対象を選べる私にとって、彼は邪魔でもなんでもない。
「それにしても、よくもまあこんなに小悪党（チンピラ）ばかり集めたものですね。人員確保にしてはずいぶんレベルが低すぎじゃありませんか？」
「んだとテメェー！」
挨拶がわりに煽ってやると、簡単に釣れた小悪党が殴りかかってくる。
「よっ、と」
「ご、ガッ!?」

拳を逸らして腹部に膝蹴りをお見舞いし、体制が崩れた所を回し蹴りで蹴り飛ばす。
ちなみに、スカートの下にはスパッツを履いているので見えても問題は無いので、遠慮なしに蹴り飛ばせる。
「クソッ、囲め囲め！」
数の有利があるからだろうか、派手に蹴り飛ばされた仲間がいるというのに怯む様子がない。
これは、少しまずい。派手な立ち回りをすれば、多少なりとも怯んでくれるかと思っていたのだけれど。
緑谷くんに対して『個性』の制御ができていないと評した私ではあるが、こんな数に囲まれては手加減している余裕もなくなってしまうかもしれない。
手加減の仕方を間違って、自分がやられれば世話はないのだから。
――そう、だから。
「死ねクソガキ！」
刀のようなものを振りかざし、左手から男が飛びかかってくる。
その構えも、振り方も点で素人。私にとって脅威ではない。だが、相手がどんな『個性』を持っているかは分からない。
故に私は、男の少し手前に魔法陣を展開する。

男が魔法陣にぶつかり、情けない声を上げる。男がぶつかった途端、魔法陣は淡く発光し始める。

今展開したのは、衝撃に反応して爆発する簡単で威力の高いものだ。制御を一歩間違えれば即死並みの威力が出るけれど、今は戦闘中だから間違えても仕方ないよね。

「さようなら、残念ながら死ぬのはアナタですよ」

ぶつかった衝撃でたたらを踏む男に笑いかけ、私は『個性』を発動した。

☆

「……何のつもりですか？　相澤先生」

相澤が魔乙女の『個性』を止めることが出来たのは、本当にギリギリのことだった。

事前に敵の存在を確認できていたこと。主犯格と思われる3人が分かっていたこと。そして、敵の目的が明確だったこと。

それらがあってこそ、迅速な指示を飛ばし、寸でのところではあるが広場まで駆けつけ、魔乙女の『個性』を相澤の『個性』で無効化できたのだ。

とはいえ、オールマイトが『個性』の制限時間を越えてしまったのは完全に予定外のことだった。本来なら、彼に魔乙女を止めてもらうつもりだったからだ。

オールマイトと魔乙女の過去を考えれば、彼女がオールマイトを殺害するなどと言われて暴走しないわけがない、というのは簡単に予想できた。実際、昨日の襲撃時に本気で敵を殺そうとしていたのが確認出来ている。

だが、当のオールマイトは現在活動限界を迎えたこと、そして敵の狙いが彼であることから、現在教師と校長たち以外誰もいない本校舎にいる。

オールマイトが活動時間を超えたのが敵の戦略のうちと判断し、だからこそオールマイトから離れた場所に生徒達を授業という名目で誘導した。だが、今回はそれが裏目に出たらしい。

恐らく、今朝の事件の連続は全くの偶然で、敵はオールマイトが活動限界を迎えていることを知らない、もしくは彼に活動限界があることすらも知らない可能性がある。

不幸中の幸いな事に、オールマイトは授業の終わりにこちらに顔を出すことになっている。なにより、十分な警戒態勢をとるために定時連絡も設けている。定時になっても連絡がなければ、不審に思った教師陣がこちらに来るだろう。

であれば、現状相澤がしなければならないのは、魔乙女の制御と、敵の確保。それから他の生徒達の安全確保だ。

「何のつもりも何も、お前、今殺そうとしただろ」

「いえ？　ただ戦闘で緊張していたので、少し加減を間違ったのかもしれませんね」

「ほざけバカ」
「バっ……バカとは何ですか、バカとは。私はオールマイトを殺すとか宣う小悪党共に、彼の養子としてそれ相応のご挨拶をですね」
と、不満と憤りを隠すことなく抗議する魔乙女の後ろに迫っていた敵を拘束し、後ろのクレーターに叩きつける。
どこかの誰かのせいで、ずいぶんと変則的な戦場になったものだ。
「……」
「油断して話し込む暇があったら、お前もさっさと避難してろ」
「……お断りします」
素で気づいていなかったらしい魔乙女は曖昧な表情で沈黙していたが、拗ねたようにプイっとそっぽを向き、ついでにそちらの方向に光弾を一斉掃射。
一気に十数人が吹き飛ばされたが、その隙間を埋めるようにさらに敵が湧いて出てきた。
「調整間違って殺しでもしてみろ、オールマイトさんに言いつけるぞ」
「それは本当にご勘弁を。昨日のでゴリましたので、ええ」
そう言って、次々に襲いかかってくる敵を迎撃していく魔乙女に、相澤はとりあえずは大丈夫そうだ、と判断した。

魔乙女はオールマイトの事になると沸点が低くなるが、同時にオールマイトの事を出されると冷めやすくもある。つまるところ、『オール(せ)マイト(んせー)に言ってやろー』でカノジョは我に返るのだ。

そこが扱いやすくもあり、敵に付け込まれやすい点でもあるんだがな。

小さく独りごち、相澤は敵の迎撃を再開した。

☆

正直、頭に血が上りきっていたのは否めない。

昨日の今日で、オールマイトから注意されたことを繰り返しているのだから世話がなかった。

恐らく、相澤先生が私を止めなかったら、あの小悪党は四散して血の雨を降らしていたはずだ。下らない小悪党の血で手を汚さなくて済んだのだから、相澤先生には感謝しなければならない。

「というか、流石に数が多すぎませんかね……！」

冷静になって周囲に目を向けてみると、小悪党の数が異様に多いのに気がついた。

一人一人の技量も『個性』も大したことは無いが、如何せん数が多い。私だけでも3

０人は倒しているというのに、襲撃の勢いが止む気配がないのだから相当だ。
「入試の時の仮想ヴィランじゃないんですから、次から次に湧かなくても――先生後ろです！」
愚痴りながら３１人目を吹き飛ばした時、視界の端に死柄木の姿が見えた。姿勢を低くして走る彼の視線の先には、背中を見せている相澤先生の姿があった。
「――２３秒」
「本命か」
私の声に反応した相澤先生が、振り向きざまに首元の布を投擲。死柄木は軽々とそれを掴むと、逆に布を引き寄せた。
「２０秒」
「先生！　その人は――！」
「分かってる」
相澤先生はその勢いに逆らうことなく、しかし死柄木のリーチに入らないように円を描きながら移動し、ついでに進路上の小悪党どもに蹴りを叩き込んだ。
先日の襲撃で『個性』がある程度把握出来ているため、相澤先生は彼の手に触れないようにしているのだ。
「１７秒」

ボロボロになった布から手を離し、死柄木が呟く。
最初は何のことかと思ったが、彼が呟くタイミングは相澤先生の髪が下がるタイミングとほぼ同時だった。
彼は恐らく、相澤先生が敵の『個性』を見るだけで消すことが出来るのを知っている。そして、髪が下がる事によってそれが出来なくなるタイミングを測っていたらしい。
「ワンアクション終える毎に髪が下がる瞬間がある。そしてその間隔はだんだん短くなっている。……無理をするなよ、イレイザーヘッド？　その『個性』じゃあ長期決戦は辛いだろ？」
「こいつ……」
頭が回る、とまでは言わないが、手下をけしかけて仰け反っているだけの小悪党どもとは違うようだ。敵を観察するのは基本中の基本だけれど、あの乱戦の中でそれだけ見極められるとか、あの手型の向こう側の目は割といい方みたいだ。
「相澤先生、その人の相手は私に任せてください。相澤先生より私の方が上手く立ち回れます」
「ダメだ。任せたら殺しに行くだろ」
「……我慢します」
「我慢するとか言うような奴には任せられん」

「ところでヒーロー」
ぐぬぬ、と取り付く島もない相澤先生に私が唸っていると、死柄木が緩慢な動きで相澤先生に振り向いた。
相変わらず手型のせいで顔が伺えないが、何となく手型の向こう側の顔はニンマリと笑っているように思える。
「『本命』は――俺じゃない」
「――ッ！　魔乙女！」
慌てたような相澤先生の叫びが聞こえると同時に、私の体を覆い尽くすように影が伸びた。
「なっ――」
「じゃあな、オールマイトの義娘」
直後、私の体を大きな衝撃が襲った。

魔法少女の全力全開

☆

意識を取り戻した時、私は広場から少し離れた場所で膝立ちになり瓦礫に埋もれていた。

どれぐらいの間かはわからないが、意識が飛んでいたらしい。

意識がなくともこうして膝立ちとはいえ安定した体勢になっているのは、また無意識の内に体が動いたからだろう。

本当に、便利で憎々しい体だ。

体中が激痛を訴えるのを無視して、瓦礫を押しのけ立ち上がる。

左側が真っ赤に染まり霞んだ視界の先、広場には化物に馬乗りされて右腕をへし折られている相澤先生がいた。

「せん、せい……ッ！」

左足を踏み出す。たったそれだけの動作で激痛が走り、力が入らず膝から崩れ落ちた。

「――ッ、ゲホッゴホッ」

胃からこみ上げてきた熱いものを、咳き込みながら吐き出す。内蔵が傷つきでもしたのか、胃の中に入っていた食べ物と真っ赤な血が零れた。

なんとか動かせる首を動かして、視線の少し先に小さな魔法陣を展開する。

治癒系の能力は不得手だが、それでもなんとか体を動かせるぐらいにはなるはずだ。

「いっ、づ……！」

案の定、骨と筋繊維が繋がった程度の応急処置に終わったが、痛みは先ほどよりも酷くない。脚が動くなら歩けるし、腕が動くなら『個性』だって使える。何も問題は無い。

広場では何故か苛立たしげに首の辺りを掻き毟っている死柄木と、その隣に黒い霧の男がいた。相澤先生は先ほどと変わらず化け物に拘束されている。

まずは相澤先生を救ける。それから、化物をどうにかして、死柄木と男を纏めて蒸発させる。それで万事解決だ。

「すう……はぁ……」

血なまぐさい肺の空気を入れ替えるように、1度大きく深呼吸をする。

多分あの化物には物理攻撃が効かない。昨日の襲撃の時、私の手加減なしの『個性』で腕が吹き飛ぶ程度だった。常人なら塵さえ残さない威力だったし、破壊力だけなら全盛期のオールマイトに負けないパワーを持っているというのにだ。

あの時のような威力の高い攻撃はできない。この距離じゃ避けられるだろうし、相澤先生を盾にされでもしたら目も当てられない。

それから、生半可な攻撃じゃ再生される可能性がある。昨日の今日で腕が完全に治っているし、昨日の去り際に腕の肉が蠢いているのが見えた。あいつの再生能力は相当なものと見ていいだろう。

「……あはは、困ったなあ」

難易度が高すぎる。

いや、普段の私なら片手間に解決できるのだけれど、如何せん今は体の痛みで思考もうまくまとまらない状態だ。テレポートは場所指定を間違えれば地面に埋まる可能性だってあるし、速度と威力を調整するのも一苦労だろう。

出来るのは単純な身体強化と、威力とかの調整を考えない全力全開（フルバースト）の砲撃だけ。それも、身体強化は何かしら動く度に体の方が壊れるだろうし、砲撃も撃てて1発きり。

はっきり言って、この状況は詰みに近かった。

どうする。どうすればこの状況を覆せる。

慎重に、かつ迅速に。いったい、どうすれば——

「けどその前に、平和の象徴としての矜持を少しでも、

へし折って帰ろう」

私がその言葉に顔を上げると同時に、死柄木が動いた。私と死柄木の対角線上、水難ゾーンにある小さな湖の淵へと。

死柄木が姿勢を低くして駆けるその先には――

緑谷くん達の姿を見た瞬間、文字通り考えるより先に体が動いた。

足元に魔法陣を展開してテレポート。視界がフィルムのコマが抜け落ちたように切り替わり、背後に緑谷くん達を庇うようにして死柄木の前に立ちふさがる。

高低の座標を間違えたらしい、足首辺りまでが地面に埋まったが構うことは無い。むしろ体が固定されたから、反動を気にすることなくぶちかませる。

「魔乙女さん――!?」

『展開(SET)』！」

緑谷くんの驚く声が聞こえる。なぜ彼がこんなとこにいるのか気になるが、今は構っている暇はない。

右腕を突き出し、前方に私の体を易々と覆えるような大きな魔法陣を展開。

『全魔力装填(FULL CHANGE)』！」

「死柄木弔！　――脳無！」

黒い霧の男が何かを察したのか、死柄木を霧で覆い、脳無に指示を出した。死柄木も察したらしくバックステップで下がり、指示に従った脳無が二人を庇うように前に出た。

だが、構うことは無い。どうせこのまま攻撃をやめても、『個性』発動に使った魔力（エネルギー）は戻ってはこないし、脳無が庇うように前に出てくれたおかげで、相澤先生も解放された。

私と彼らの直線上には人も施設もなく、つまりは全力を使ってしまっても問題ないということなのだから――！

「これが私の全力全開――

『臨界突破（LIMITED）・全壊（FULL）魔砲（BURST）』!!」

直後、眩く輝く魔法陣から放たれた桜色の閃光が、全てを埋め尽くした。

☆

「――ハッ――ハッ――ケホッ……」

文字通り、全力全開の一撃だった。
私の周りは余波で崩れてクレーターが出来ており、私はその中央でへたり込んでいた。
もう指の一本だって動かせない。こうしているのだって辛いぐらいで、なんなら今すぐリカバリーガールのお世話になって、ベッドで一週間ぐらい寝続けたいぐらいだ。
死柄木と黒い霧の男は逃しただろうけど、あの脳無とか呼ばれていた化物は――

「そんっ、な……」
生きていた。
あの砲撃を受け、ほぼ心臓の欠片だけみたいな状態になり、それでもなお再生を続け、四肢を使って立ち上がれるレベルにまで回復していた。
「ああ……やっぱり『先生』の言った通り、急造とはいえ改造してもらっといてよかった。死んだかと思ってヒヤヒヤしたぜ」
あの再生能力は昨日の比ではない。死柄木の言葉通り、あれは改造されたとしか思えないほどに、再生能力が向上している。
「でもやられ過ぎたかな、次は無理そうか。……もう1度撃たれても面倒だし、殺しとこう。黒霧」

黒霧と呼ばれた男の『個性』で、死柄木が私の近くまで転移してくる。
死柄木の『個性』は、触れただけでモノを壊す類のもののはずだ。彼に触られるわけにはいかない。
早く逃げなきゃ、いけないのに……！
「体が、動かない……！」
全霊をかけた砲撃を放った私の体は、著しい魔力（エネルギー）の消費と反動に巻き込まれて負った怪我で、いうことを聞かなくなっていた。
立ち上がることさえままならず、すぐ近くに死柄木がいるというのに『個性』を発動することさえ出来やしない。
「今度こそさよならだ、オールマイトの義娘」
死柄木の手が目前に迫る。
せめてもの抵抗として、私はその手をにらみ続け。
ひたり、と冷たい感触が私の顔に触れた。
「――ははは、本当にかっこいいぜ、イレイザーヘッド」
しかし、死柄木の『個性』は発動しなかった。

ボロボロになり倒れ伏した相澤先生が、それでも『個性』を発動して死柄木の『個性』を消していたからだ。

そして死柄木が肩を震わせて言ったのとほぼ同時に、ＵＳＪの正面ゲートが紙屑のように吹き飛ばされる。

そこから現れたのは――

「もう大丈夫――私が来た！」

「オール……マイ、ト……」

まったく笑っていないオールマイトだった。

☆

――情けない。

「嫌な予感がしてね。校長の長話を振り切って、他の教師たちを待たずにやって来たよ」

予定されていた相澤からの定時連絡が無かったことから、今雄英高校で動ける者がかき集められている。だがオールマイトは彼らの準備が出来るのを待つことなく、１人駆

けてきたのだ。
とっくに『個性』の制限時間は過ぎている。それでも、嫌な予感がした。だからオールマイトを窘める校長を振り切りって来た。
――情けない！
「来る途中で飯田少年とすれ違ってね、事の仔細はあらまし聞いたよ」
彼の表情は焦燥と疲労によって、酷いものだった。息切れしながらも必死に状況を説明してくれた彼は、オールマイトに事の仔細を伝えると、疲労をおして雄英の校舎に駆けていった。
飯田は最後、泣きそうな顔で、皆を救けて下さいと懇願していた。重圧と恐怖に押しつぶされそうになっていた彼は、それでも己の役目を果たそうとしていたのだ。
――本っ当に、情けない！
正面ゲートのすぐ正面。戦闘服（コスチューム）である宇宙服がボロボロになり、倒れ伏す１３号が居た。近くには安堵から涙を零す生徒達がいる。きっと彼は重症を負わされるまで、生徒達を庇おうと、必死に苦手な戦闘をこなしていたのだ。
広場付近には腕を壊された相澤も居る。彼も、苦手な長期決戦を、生徒を守るためにこなしてくれていたという事は、想像に難くなかった。
情けなくてたまらない。もっと早く来ていればと後悔が募る。だが、今は己を責める

よりもやることがあった。
故にオールマイトは、様々な感情を押し殺し、胸を張って言った。
「もう大丈夫だ。
――私が来た！」
「オールマイトォォ！」
誰かが、安堵と興奮のままに叫んだ。
「待ってたよ、ヒーロー。社会のゴミめ……」
憎々しげに死柄木が呟く。
オールマイトはその声に反応して死柄木の方を向き、そして――
「――魔乙女少女……ッ！」
ボロボロになって顔面を掴まれている魔乙女の姿を目にした。
同時に、正面ゲートから駆け出して階段手前で跳躍する。
「は、速っ――！」
広場で倒れ伏した相澤の場所まで瞬時に移動し、道中で屯していた敵（ヴィラン）たちを昏倒させる。

相澤の容態は酷いものだった。
肘は崩れたように皮膚が割れ、床に叩きつけられたのか顔面の骨が折れていた。
オールマイトが来る直前までは意識があったようだが、今は気を失ってしまっている。
「すまない、相澤くん。……無理をさせてしまったようだな」
相澤を肩に担ぎ、死柄木と脳無に振り返る。
その側には呆然としている魔乙女が座り込んでいて、さらにその背後に出久たちが居た。
そこまで確認したオールマイトは、気迫を込めて駆け出す。
すれ違いざまに死柄木の顔に軽いジャブを撃ち、魔乙女を抱える。そのままの勢いで出久たちのところまで駆け、同様に抱えて離脱した。
この一連の動作はすべて一瞬の間に行われた。死柄木はおろか、抱えられた当人である出久たちにも分からなかっただろう。
「君たちは早く出口へ！　相澤くんは気を失っている、３人で協力して運んで欲しい。それから、魔乙女も歩ける状態じゃないだろう、肩を貸してやってくれ！」
「えっ……あれ、いつの間に!?」
オールマイトは出久たちを背後に庇いつつ、簡潔に指示を飛ばす。出久と一緒に救出

された峰田は何が起こったのか分からなかったのか、キョロキョロと辺りを見回して驚いていた。
「オー、ル……マイト……！」
「喋るんじゃない、魔乙女少女。君、とても動ける状態じゃないだろう？　大人しく避難しておきなさい」
「違う、違うんです……！」
　梅雨に肩を貸してもらって立ち上がった魔乙女が、震える右腕を上げてオールマイトに手のひらを向けた。
「あの、黒いヤツの『個性』は――恐らく、物理攻撃に対する、耐性――と、再生能力、です。もう1人は、触れたものを崩す――『個性』で、煙のヤツは、ワープで、す」
「魔乙女少女！　それ以上喋っては――」
「それ、から！」
　血を口の端から零しながら、魔乙女は情報を伝える。オールマイトが彼女の体を心配して遮ろうとすると、魔乙女は一際大きな声を上げた。
　突き出した右の掌の先に小さな魔法陣が出現する。彼女の『個性』だ。だが今の魔乙女は、『個性』を使用出来るような状態ではないはず。だというのに彼女は、
「オール、マイト――少し、だけですが――ゴホッ、時間を、伸ばし――まし、た」

「……ッ！　魔乙女少女、君ってやつは……！」

既に大量の血を流し、身体中には激痛が走り。

『個性』を使えるような体力も残っていないような状態で、それでもなお。

彼女は、オールマイトの負担を少しでも減らそうと、『個性』を使用した。

「――ありがとう、魔乙女少女。後は私に任せて、君は休んでいなさい」

「……はい」

笑みを忘れていた顔にほほ笑みを浮かべ、安心させるように穏やかな声で告げる。

釣られたように笑顔を浮かべた魔乙女の目尻から、一筋の涙が零れた。

☆

幕間：救助訓練編
魔法少女と宣戦布告

☆

「ん……」
「おや、やっと起きたかね」
梅雨ちゃんに肩を貸してもらって、出入り口付近まで避難した直後、私は気を失った。
脳無の攻撃と、それを治すために行った継ぎ接ぎの応急処置。魔力（エネルギー）の限界を超えた『個性』の使用。そして、その反動をモロに受けた私の体と精神は、事態の結末を確かめる前に限界を迎えたのだ。
次に私が目を覚ましたのは、保健室のベッドの上だった。
呆れた様子のリカバリーガールに聞きたいことは山ほどあったが、一先ず、私がどれだけ寝ていたのか質問する。
窓の外は明るい。今は昼頃だろうから、半日ほどだろうか。
「3日だよ。正確には2日と半日だがね」

「みっ……!?」

病人服の襟口から胸元に鼻を突っ込み、数回鼻をひくつかせる。それほど酷くはないが、やはり年頃の少女としては気になるレベルだ。

言われてみれば頭や体なんかが少しピリつく感覚がある。誰かが体を拭いてくれてはいたのだろうが、これは私、というか年頃の少女としては死活問題であった。

「リカバリーガール、聞きたいこととか謝りたいこととか色々あるんですけど、」

「はいはい。シャワールームはその扉だよ」

「……失礼します」

ベッドの横の籠にあった制服をひっ掴み、私はそそくさとシャワールームへ向かった。

☆

シャワーを浴び、その後リカバリーガールからおおよその事件の顛末を聞いた私は、制服を身に纏い廊下を歩いていた。

オールマイトや相澤先生に目覚めた事を報告するためだ。

体調は至って快調。痛みなどはなく、気だるさもない。リカバリーガールの『個性』で

体の方は完全に治してもらったようだ。
まあ、リカバリーガールには、もう来るんじゃないよ、なんて説教をされたけれど。
明日にでも菓子折を持って訪ねるべきかもしれない。２日も付きっきりで診てもらっていた謝罪をしたいし、治癒系の『個性』を持つ先達として聞きたいことも色々ある。どちらにしろ近々訪ねることになるだろう。
「……というか、何だか見られてるような」
昼休みということもあり、さっきから何人もの生徒とすれ違っているのだが、その度にヒソヒソ声で会話されたり、私の顔を見るなり逃げ出したり、敵意のようなものを向けてくる人もいた。
おかしい。こんな風に見られるようなことをした覚えはないというのに。
「わっ」
「っと」
と、釈然としない気持ちで歩いていると、角を曲がろうとした時に誰かとぶつかりそうになった。
いつもの癖で『個性』を使いながら体勢を整えようとして、
「うぇっ!?」
ぐるん、と視界が横に１８０度回転した。訳も分からないまま、なす術なく体の制御

を失ってしまう。
傾いていく視界に、背中に伝わるであろう衝撃をこらえようと、私は目を閉じた。
「……おい、大丈夫か」
が、いつまで経っても衝撃は伝わらなかった。代わりに、背中と膝裏を支えてくれる腕の感触と、どこかで聞いたことのある声が聞こえてくる。
「えっ？　……あれ、轟くん？」
恐る恐る目を開けてみると、すぐそこに轟くんの顔があった。
どうやら彼とぶつかりそうになり、その上転びそうになったところを助けて貰ってしまったようだ。
しかし、少し体勢がまずい事になっている。
轟くんの腕が私の背中と膝裏を支え、反射的に何かを掴もうとした両手は彼の制服を掴んでいた。
俗に言う、お姫様抱っこというヤツである。
「……え、えーっと、その、ごめんね？」
「構わねえよ。それより、もう降ろすぞ」
「あ、うん」
いつものクールな表情を崩すことなく、轟くんはそっと私を下ろしてくれた。

仮にも女子をお姫様抱っこしたというのに、この冷静な対応。よほど女の子慣れしているのだろうか。それとも単に、私に魅力がないだけなのか。
「ん、んん。ありがとうございます、轟くん。ぶつかりそうになった上に、転びそうになったのを助けてくれて」
「別に。……これで2度目だな」
「2度目、ですか？」
後者だと少し傷つくなあ、なんて思いながら、咄嗟のことで崩れていた口調を戻すために一つ咳払いをして、轟くんに頭を下げる。
轟くんはそっぽを向いて何でもないように応え、少し笑みを浮かべて続けた。
「ぶつかりそうになったの。入学初日もそうだっただろ」
「ああ、そういえばそうですね。ごめんなさい、度々」
「構わねえよ。俺も少し考え事をしてたからな」
「そうなんですか。なら、お互い様ですね？」
「ああ、お互い様だ」
2人して顔を見合わせ、くすりと笑い合う。まだ1ヶ月程度しか経っていないというのに、ずいぶん前のことのように思えた。

☆

お昼休みということもあり、中庭には談笑する生徒達の姿が多く見られた。
私は中庭の一角にあるベンチに座り、プチ退院祝いにジュースを奢ってくれるという轟くんが戻ってくるのを待っていた。
「体は大丈夫なのか？」
戻ってきた轟くんが、パックのりんごジュースを差し出して尋ねてきた。
「ええ、リカバリーガールのお陰で、この通りです」
礼を言ってから受け取った私は、むん、と左腕で力こぶを作ってみせる。
それを見た轟くんは、そうか、とだけ短く言ってから、私の隣に腰を下ろした。
「あ、そうだ。轟くん、私、廊下を歩いていただけなのにやけに注目されたんですけど、何か知っていますか？」
「……お前、それマジで言ってるのか？」
「そりゃもう大真面目ですよ。心当たりなんて一つも……いやちょびっとしか……いやいや小爪の先程度しか……」
「ＵＳＪの一部を『個性』で吹き飛ばしただろ。あれがお前の仕業だって知れ渡ってるんだよ」

あれかー！　いや、あれは戦闘中のことゆえ大目に見てほしいというか、あの時必死でそんな余裕無かったし、手加減したらこっちがやられていたんだし、というか修繕費とか要求されるんだろうか……!?

「……一応言っとくが、俺たちが壊した分に関してはお咎めなしだそうだ。相澤先生が言ってたから、間違いない」

「ほ、ほんとうですか？」

「ああ」

「はあー……良かった……」

大きく安堵のため息を吐く私の隣で、轟くんが苦笑する。

何だか余計な心配をしてしまったらしい自分が恥ずかしくなって、りんごジュースを吸い込んでいると、それと、と轟くんが続けた。

「２週間後、雄英体育祭がある」

「ああ、そういえばもうそんな時期ですね」

入学してまもない状況で忙しく、さらに数日とはいえ寝込んでいた身としては、あっという間に時が過ぎているように感じる。

『個性』使用禁止を貫き、規模も人口も縮小し形骸化してきたオリンピックに代わり、昨今注目を集めているのが『雄英体育祭』だ。

多くのテレビ局が視聴率の為に訪れるのはもちろん、ヒーローの卵たちを見定めようと全国からヒーローもやってくる。私たちヒーローを目指す生徒にとっては、自分をアピールする為の重要な場なのだ。

「敵（ヴィラン）からの襲撃があった後だっていうのに、よく踏み切りましたね」

「だからこそ、だそうだ。例年より警備も厳重にするらしい」

なるほど。襲撃を許したからこそ、何事もなく終わらせることで警備体制の強化を示す、と。

まあ、生徒たちのチャンスの場を潰すよりは、まだマシな選択肢だと言えるだろう。

「あれ、そういえば轟くん、私に構っていていいんですか？　お昼まだなんじゃ……」

「俺は先に済ませてる。それに、元よりお前に用があったからな」

「用、ですか？」

オウム返しした私に、轟くんは無言で立ち上がる。そして私の前に立ちはだかるようにして、静かな闘志を見せながら言った。

「――魔乙女。俺は雄英体育祭で、お前に勝つ」

突然の宣戦布告。

正直言って少し驚いたが、私は彼から目を逸らすことなく応えた。

「名前、初めて呼んでくれましたね」

その時の轟くんの表情といったら、普段からは考えられないほど呆気に取られていて、思わずくすりと笑ってしまうほどだった。

「……お前、ふざけてるのか。それとも冗談だとか思ってんのか？」

「いえ、何もふざけてはいませんし、言葉の意味は理解していますよ。ただ、当たり前のことをキメ顔で言われたものですから、少しイタズラしてみたくなりまして」

「それをふざけてるって言うんだよ」

「それはすいません」

一転して苛立ちを顕にした轟くんが詰め寄ってくる。私はそれに対して否定を返し、彼と同じように立ち上がった。

轟くんよりも背の低い私の視界には、彼の胸元の校章が映っている。そこから少し視線をあげると、轟くんの顔がすぐそこにあった。

「もちろん、私だって負けるつもりはありません。ですがそれは、クラスのみんなも、他の生徒達も同じです。目先の事にばかり囚われていると、足元を掬われますよ？　例え

ば――」

緑谷くんとかに、ね。

そう付け足すと、轟くんの目が鋭いものになった。どうやら彼もターゲットに入っているらしい。

私と緑谷くんの共通点で、轟くんが執着するようなことと言えば、

「オールマイト、ですか？」

「――――」

轟くんは応えない。しかし、彼の『個性』が感情の昂りを示すように発動し、周囲の気温が少し下がっていた。

「秘密という訳では無いですが、緑谷くんはともかく、私とオールマイトの関係は話していなかったんですけどね」

「……手型の男が言っているのを聞いた。『オールマイトの義娘』だってな」

「あー、あのド畜生ですか。次会った時はぶちこ――失礼、今のは忘れてください」

ニッコリと笑顔で言うと、轟くんは少し引き気味に頷いてくれる。

だけど、彼の言葉は『嘘ではないが本当でもない』と感じられた。死柄木が言っているのを聞いたのは間違いないだろうけれど、それより前から知っていたような感じだ。

まあ、今はいいか。いずれ、その辺のことも話してくれるだろう。

「別に轟くんの姿勢を悪く言うつもりはありませんし、深く踏み込むつもりもありません。もちろん、私も全力で応えて見せますよ」
「……そうか」
静かに言った轟くんだが、その瞳に宿る闘志は消えていない。いや、これは闘志というよりも妄執だろうか。どちらにしろ、彼とは決着をつける必要がありそうだ。
ところで申し訳ないのだが、轟くんに一つ言わなければいけないことがある。
「ところで轟くん」
「何だ」
「その、私たち……凄く見られてます」
恥ずかしながら、私自身、今が昼休みだということを忘れていた。
中庭で急に男女2人が密着しそうな程近くで会話し、しかも男子の方は『個性』が漏れているのだ。
これで注目されないわけがなかった。
表情を変えることなく、無言で轟くんが一歩下がる。
気まずさで視線を逸らした私は、ついでにゴミ箱にカラになったジュースを投げ入れた。
「……とりあえず、教室に戻りましょうか」

「……おう」

さっきまでの気迫はどこへやら。

恥ずかしさのあまり目を合わせるとこなく、私たち2人はそそくさと中庭を離れた。

☆

魔法少女と後遺症

☆

午後の授業も近いということで、轟くんは教室へと戻っていった。
そして、私も一緒にこのまま教室に戻る、とはいかない。私としてはそれでも構わないのだが、やはりオールマイトか相澤先生に復帰の報告をしておく必要がある。
そんな訳で、当初の目的を果たすため、私は再び1人で廊下を歩いていた。
だが、よく考えれば私はオールマイトの居場所を知らない。いや職員室にいるか、どこかのクラスの授業を受け持っているかだろうけれど。
このまま適当に歩いているだけでは、ただただ時間を無駄にするだけだ。一先ずオールマイトの居場所を調べるため、廊下の端に移動した私は壁に背を預けて『個性』を使用した。
「……んん？」
展開した魔法陣は、緑谷くんを探し出した時や、尾白くんと葉隠さんに作戦を説明するために展開した時の魔法陣と同じものだ。

本当ならここにオールマイトのいる階の地図が映し出されるはずなのだが、実際に映し出されたのはよく分からない図面のようなものだった。

「何だろうこれ……どこかの、バー？」

何でそんな場所が映し出されているのか、と思いつつ、敵対者を示す赤い点が２つ点滅する魔法陣を閉じる。どこの誰とも知らない人を敵対者認定するとか、何か調整を致命的に間違えていたようだ。

今度こそ、と展開した魔法陣に映し出されたのは、

「地球だ……」

少し大雑把でもいいからこの周辺を地図にしようと思ったのだか、何故か地球が映し出されていた。しかもご丁寧なことにフルカラーである。

おかしい。雄英高校の全体図とか、日本地図とかならまだしも、いやそれらも充分おかしいのだが、それにしたってフルカラーの擬似地球儀はない。

規模とか以前に、何故色がついているのだろう。地球は青かった、とでも言えというのか。

「あら、魔乙女ちゃんじゃない。……何してるの、地球なんか眺めて」

ええ……、と私が引き気味に地球を眺めていると、たまたま通りがかったらしい女性が声をかけてきた。

高校に相応しくないボンテージスーツを模した衣装の彼女は、１８禁ヒーロー『ミッドナイト』だ。彼女とは少なくない交流があり、出逢えば話をする程度の関係なのだが、今は少し状況がまずかった。

「……悩みがあるなら聞くわよ？」

「いえ、違うんですミッドナイト。誤解です」

優しい目で私の肩に手を置いた彼女の勘違いは、始業のチャイムが鳴るまで続いた。

☆

始業のチャイムが鳴り、ミッドナイトは普通科の授業の補佐を任されていたことを思い出し、慌てて去っていった。去り際になんとか誤解は解けたが、何故か優しい目は直っていなかった気がする。

ちなみに、ちゃっかり誤解を解くついでにオールマイトの居場所を聞き出していた私は、現在定まった目的にへと移動中であった。

何だか今日は目覚めてからずっと、移動しっぱなしな気がする。いや、轟くんと話をしたからしっぱなしではないか。

そんなことを考えていると、目的地である『仮眠室』のプレートが掲げられた部屋の

前まで来ていた。ミッドナイトの話では、オールマイトが緑谷くんと一緒にここに入るのが見えたそうだ。多分、雄英体育祭の話でもしていたのだろう。

とりあえず扉を軽くノックしてみる。もし誰もいなさそうだったら職員室にでも訪ねようかと思ったが、扉越しに聞こえるドタバタという騒がしい音を聞く限り、その心配は杞憂だったようだ。

「オールマイト、私です。魔乙女です」

少し声を大きめにして言うと、騒がしかった音がパタリと止み、かと思えば再びドタバタと音が近づいてきて、勢いよく目の前の扉が開かれた。

「――ま、魔乙女少女？」

「は、はい。魔乙女ですが……？」

息を切らせて出てきたのは、トゥルーフォーム状態のオールマイトだった。よほど大慌てしたのかスーツは着崩れ、息が切れているせいで顔色が悪くなっている。

オールマイトは震える手を持ち上げて私の肩に手を置くと、

「ああ、良かった……ッ！」

「お、オールマイト!?」

くしゃりと顔を歪め、私を勢い良く抱きしめた。

あまりの事態に私の頭は混乱一色に埋め尽くされ、バタバタと手が宙を泳ぐ。

だが、オールマイトの体が微かに震えているのを見て、少し落ち着いた私は彼の体を抱き締め返した。
「ごめんなさい、オールマイト。心配かけて……」
「本当だよ、まったく！　君が目覚めずにいるのを見て、私が、私たちがどれだけ心配したか……！」
すっかりやつれた様に思える体を抱きしめながら、私はもう一度、ごめんなさいと小さく謝った。

☆

「どうぞ、オールマイト」
「ああ。ありがとう、魔乙女少女」
オールマイトの手前に湯呑みを起き、私は彼の対面にあるソファーに座った。
さっきは少し湿っぽくなってしまったが、互いの無事を確認し合うように1分ほど抱き合えば、すぐに何時もの態度に戻った。
どうも私も彼も、そういう空気は苦手なのである。オールマイトなんて、抱き合って本音を零したのが恥ずかしかったのか、わざわざマッスルフォームになって快活に笑い

飛ばしたぐらいだから。
「済まないね、魔乙女少女。本来なら私が入れるところなのだが……」
「いえ、リカバリーガールから大方の容態は聞きました。緑谷くんや生徒の前でならともかく、私の前でぐらい気軽にいてください」
私がそう言うと、オールマイトは苦笑してお茶を啜った。猫舌な私は、少し冷ますように息を吹きかけてから口に含む。
そして、
「いやあ、魔乙女少女は良いお嫁さんになるな」
ゴフッ、と不意打ちで放たれた言葉に咳き込んだ。
「ど、どうした魔乙女少女！」
「ゲホッ、コホッ……お、オールマイトが急に変なことを言うから……！」
「そ、それは済まなかった！　だが今のは本心だぞ！」
この男はまたそういう事を平気で言う。毎回毎回私が気を抜いているところにぶち込んでくるから、こっちも対応が取れないのだ。
恨みがましい目でオールマイトを睨みつつ、口元をハンカチで拭う。すっかり毒気を抜かれたような気がするが、私はとりあえず当初の目的を果たすことにした。
「もういいです。オールマイト、私、見ての通り体の方は完治しましたので、授業に復帰

したいと考えています。一応、その旨を伝えに来ました」
「もちろんそれは構わないが……本当に大丈夫なのか？　リカバリーガールに治してもらったとはいえ、内蔵損傷や骨折など重傷を負っていた上、『個性』の反動でそれらが悪化していた。後遺症が残っていないとも限らない」
「ここに来るまでに、体の動きはあらかた確認しています。不自然な挙動もありませんでしたし、痛みが走ることもありませんでした」
轟くんにして見せたように、むん、と力こぶを作ってみせる。オールマイトはそれを見て目を逸らしながら、
「そう乙女が気軽に肌を晒すものじゃないよ……――いや待て、君『体の方は』と言っていたな」
「……ええ、まあそうですね」
「ならば……『個性』の方はどうなんだ？」
「……」
オールマイト相手に嘘はつきたくないから、と本当のことを言わない程度に止めていた私も私だが、オールマイトも勘が鋭い。さすがはプロヒーロー、と言うべきか。
「……『個性』の制御が出来なくなっています。多分、脳無を倒す為に全力を出したのが原因です。態勢を整えようとしてあらぬ方向に体が回りましたし、地図を開こうとして

見当違いの場所を映し出しました」
「それは……マズイな」
「はい。……ごめんなさい、オールマイト」
私の『個性』は様々な事が出来るが、それに伴うようにして制御する項目も増えてくる。それらの調整が出来ないということは、実質私の『個性』は使えない物として扱うしかなくなったのだ。
不甲斐なさで自然と目線が下がり、膝の上に置いた手を力強く握りしめる。
あれだけタンカを切って飛び出しておいて、ボロボロになった上にこのザマだ。オールマイトの養子に恥じない活躍を見せるどころか、彼の顔に泥を塗っているようなものだった。
奥歯を強く噛み締めるようにして堪える私に、しかしオールマイトは私の頭に手を置くと、優しく頭を撫でてくれた。
「謝ることはないさ、魔乙女少女。君が緑谷くん達を守る為に、全力を尽くした結果だ。それを誇れと言えど、責める気なんて私にはないよ」
我ながら現金なことだが、彼にそう言ってもらえるだけで心が随分と軽くなった。悔しさで淀んだ気分が、スッと晴れていくような気分になる。
「……ありがとう、ございます」

小さくお礼を言いながら、私は頭を撫でる暖かい感触を少しの間味わうことにした。

☆

授業に復帰した私を迎えたのは、クラスメイトからの質問の嵐だった。

体は大丈夫なのか、もう復帰して大丈夫なのか、あの砲撃はなんだったんだとか、その他色々な諸々を続けざまに聞かれた私は、混乱のあまり目眩を起こしそうになったほどだ。

四方八方を囲まれた状態で一気に質問されて答えられるのは、聖徳太子かそういう『個性』もちだけである。

何とか全ての質問を捌ききった私は、ため息を吐きながら席に座る。なんだか体力を凄く持っていかれたような気がした。

途中、相澤先生のフォローが無かったらもっと疲弊していたことだろう。けれど正直、こちらの疲労度を考慮した質問を、なんて言葉が彼の口から出るとは思わなかった。質問自体を止めるかと思ったけれど、みんなの心配する気持ちを汲み取ってくれたのかもしれない。

ただ、困惑する私をニヤニヤと眺めていたあたり、私が勝手に飛び出したことに対す

る仕返しかもしれないけれど。

授業の進み具合自体は、昨日が臨時休校だったおかげで変わりはなかった。けど、午前中の英語だけは少し進んでしまっているので、担当であるプレゼント・マイクに範囲を聞きに行かなければならない。

……あの人、声が大きいしテンション高いから少し苦手なのだけれど。まあそうも言っていられないか。

……ともあれ、今日のところは全て座学だったので良かったが、明日からはそうもいかない。特に、明日のヒーロー基礎学は救助訓練だと聞いている。先日の襲撃事件の遅れをとる為らしい。

『個性』が使えない状態では授業を受けるのに支障が出るし、何よりみんなに心配をかけることになる。オールマイトから相澤先生たちには連絡があるはずだけど、クラスメイト達への説明は私に任されている。

もちろん私としては余計な心配をかけたくないし、轟くんにあれだけの啖呵を切った手前、『個性』が使えなくなりました、では格好がつかない。

幸いにも明日は救助訓練だ。最低限、身体強化さえ使えていればある程度誤魔化せる……はず。多分。

正直な話、私は自身の『個性』についてそれほど詳しくはない。

ただ漠然と、これは出来る、これは出来ない、というのが分かる程度だ。実際それでも今まで困らなかったし、先日の襲撃事件では小悪党（ヴィラン）相手とはいえ戦えていた。

『個性』の制御だって、意識し始めたのは緑谷くんの特訓が開始した頃からだ。それまでは『個性』なんて、私にとってはただただ鬱陶しいだけのものだったから。

そう考えると、こうして本格的に『個性』の制御法を考えるのは初めてだ。まあ制御法なんて、繰り返し練習するぐらいしか思い浮かばないのだけれど。

一先ず、今日は早めに帰ることにしよう。リカバリーガールへのお礼の品を用意しなければいけないし、一応病み上がりの身だ。無理をして体を壊しては意味が無いし。

☆

「……うわぁ」

そんな事を考えていたわけだが、流石にこれは予想外だった。

放課後になったとほぼ同時に、私たちのクラスの前に多くの生徒が群れを成していた。

廊下自体それなりに広がったはずだが、端まで余すことなく埋め尽くされている。とんでもない人数がいるようだ。

「うおおお……何事だあ!?」
「何事だろうねえ」
今まさに教室を出ようとしていたお茶子ちゃんが、あまりの事態に驚きの叫び声をあげた。
その隣にいた私も呑気に言ってみるが、彼ら彼女らの目的は分かっている。先日の事件、それから雄英体育祭が間近なことを考えると、
「敵情視察だろ、雑魚」
教室を出られないことに不満を漏らしていた峰田くんを一蹴して、爆豪くんが答えを言ってくれた。
まあその通りだろう。先日の敵(ヴィラン)の襲撃を乗り越えたクラスと、体育祭で競い合うことになるのだ。敵情視察ぐらいはしに来るだろう。
「意味ねえから退けモブ共」
「知らない人のこととりあえずモブっていうのやめよう!?」
まあ言い方はアレだが、正直爆豪くんの言っていることは正論だと思う。何でよりにもよって放課後に来るのか。帰り際に来たって顔と名前ぐらいしか分からないだろうに。
……雄英って、勉学の面でも割と難関レベルなのだけれど、どうしてこうバカっぽい

人たちが多いのか。バカと天才はなんとやら、というヤツなのかな。
「どんなもんかと見に来たが、ずいぶん偉そうだな。ヒーロー科に在籍するやつはみんなこうなのかい？」
　そんな風に思っていると、集団の後ろの方から男子生徒が一人、挑発とも取れることを言いながら歩み出てきた。
　ツンツン頭で、目つきが悪い。爆豪くんといい勝負ではなかろうか。多分、普通科クラスの人だろう。経営科という感じじゃないし、サポート科にしては手が綺麗すぎる。
　まあそんなことはともかく。
「いえ、彼が特別喧嘩腰なだけです。一緒にしないでください」
「魔乙女さん!?」「愛ちゃん!?」
「ああ!?」
「……あそう」
　緑谷くんとお茶子ちゃんは私の発言に驚いているが、別に間違ったことは言っていない。
「まあ何でもいいや。……普通科とか他の科って、ヒーロー科落ちたから入ったヤツとか多いんだ。知ってた？」
「ええ、知ってます。それがどうかしましたか？」

「体育祭のリザルトによっちゃ、ヒーロー科への編入を検討してくれるんだってさ。その逆も然りらしいよ……」

へえ、それは知らなかった。まあ、将来有望と分かった生徒を野放しにしておくのも勿体ないし、妥当な判断だろう。

相澤先生風に言うなら、合理的手段というやつだ。

「敵情視察？　少なくとも俺は、油断してると足元掬われるっつー、宣戦布告をしに来たつもり」

「それはまた、大胆不敵な事で」

表面上にこやかに応じてはいるが、正直なところ呆れが強い。そんな事やってる暇があるなら、『個性』を磨くなり体を鍛えるなりすればいいのに。

というか、そろそろ解散してほしい。今日はやることが沢山あるのだ。名前も知らないような人からの宣戦布告なんて受けている暇はない。

「B組のもんだけどよぅ！」

と、これまた集団の後ろの方で、元気にジャンプしながら男子生徒が声を上げた。

「敵（ヴィラン）と戦ったっつうから話聞こうと思ってたんだがよぅ！　エラく調子づいちゃってんなオイ！　本番で恥ずかしい事んなっぞ！」

「ああ？」

っと、しまった。思わずドスの効いた声が出てしまった。お茶子ちゃんや緑谷くんどころか、クラスメイトのほとんどがギョッとしてこちらを見ている。

私は1つ咳払いをしてから、

「何か勘違いされているようですが、私たちはあの事件の時、文字通り命をかけて戦い、先生方の助けがあったとはいえ自分たちの力だけで生き残りました。

そして同時に、それぞれがそれを糧に上を目指そうと頑張っています。……それを『調子づいている』の一言で済まされるのは、些か不愉快です」

私を侮辱するのは構わない。勝手に先走って、勝手にやられて、勝手にボロボロになったのだから。けど、先生たちの手を借りることなく、自力で生き残った緑谷くんたちを侮辱するのは許せない。

調子づいている？　バカを言うな、彼ら彼女らはただ一心不乱に上を目指しているだけだ。

「……というか、そろそろ教室の前に屯するのは止めてもらっていいですか。率直に言って邪魔でしかありません」

私が一歩踏み出すと、最初に発言してきた男子生徒以外が海を割るように道を開けた。

真面目に時間が無くなってきた私は、その道を歩いていく。

「……やっべえ、さすがＵＳＪに穴開けただけあるな」
「ああ、マジでヤバい目してた」
「絶対人殺してるよあれ……」
……聞き捨てならない言葉が聞こえた気もするが、反論する時間も惜しい。
私は少し頬を引きつらせながら、帰路を急ぐのだった。

☆

魔法少女と救助訓練

☆

「おはようございます、リカバリーガール。少しよろしいですか？」
「おや、こんな朝早くからどうしたんだい？」
翌日。
私はお礼の菓子折りを持って、授業の始まる1時間ほど前に保健室を訪れた。
幸いにもリカバリーガールはお暇だったようで、お茶を啜りながら窓の外をのんびりと眺めていた。
「すいません、昨日の今日で。怪我の治療でご迷惑をおかけしましたから、お礼と謝罪を込めて、粗品ですがこちらをお持ちしました」
「……こ、これは！　最中（もなか）一筋１６０年。ファンの間では伝説と名高い老店舗『越後屋』の一日限定３０箱の小豆最中じゃないか！」
おお、あのリカバリーガールが元気に驚きの声をあげている。
そこまで大げさに驚いてもらえると、頑張って入手したかいがあったというものだ。

「お前さん、これをどうやって……」
「最初は手作りにしようかとも思ったんですが、ランチラッシュに相談したところ越後屋を紹介されまして。今月いっぱい、土日に無償でお手伝いをすることを条件に1箱買わせていただいたんです」
ランチラッシュの頼みなら仕方ない、と苦笑混じりに引き受けてくれた店主さんには申し訳ないことをした。まあお金は発送料含めてこちら持ちなので、あちら側に損は無いはずだ。
私としても接客は得意なので、授業のない土日にお手伝いすることに否はない。
「お前さんも大概無茶なことするねえ」
「いえ、社会経験を得られるので、そう悪いことではないですよ?」
「そうじゃなくて、あのランチラッシュに借りを作ったことだよ」
「……? どういう意味でしょう?」
「知らないのかい? ランチラッシュは人使いの荒いことで有名なんだよ」
「ああ……」
確かに、彼の厨房で働く人たちは、みんな死にものぐるいといった様子で働いている。その殆どは目が死んでいるか、逆に爛々と輝いているかのどちらかだ。
そういう面で見れば、ランチラッシュの人使いは荒いとも言える。たまに厨房を抜け

出して生徒達に感想を求めているのだから、尚更だ。
「それに関しては、逆ですね。彼が私に借りを返したことになります」
一度、ランチラッシュが炊き出しをしている時に、その手伝いをしたことがある。
その時はたまたま人手が不足していて、ランチラッシュが1人で全てを賄っている状況だった。オールマイトの付き添いでその場を訪れていた私は、それを見かねて手伝いを申し出たのである。
私としては借りとも思っていない当然の事だったので、今回の件でお相子ということにしたのだ。
「まあそんな訳で、どうぞ召し上がってください。私これでお暇しますので」
「ちょっと待ちな。お前さん、この後なにか用事があるのかい？」
「いえ、授業が始まるまでは暇ですが……？」
「なら少し付き合いな」
困惑する私をよそに、リカバリーガールは湯のみを取り出してポットからお茶を注いで手渡してくる。
次いで最中1つ手に取ると、それを私に差し出してきた。
「色々聞きたいことも、話したいこともあるんだ。例えば、オールマイトの昔話とかね」
「……はい。では、少しだけ」

ニッコリと優しい笑みを浮かべたリカバリーガールに苦笑を返し、私は最中を受け取った。

☆

「ねえねえ魔乙女さん！　魔乙女さんがオールマイトの養子って本当なの!?」

「うわっ」

結局リカバリーガールと時間ギリギリまで談笑していた私が、始業時間ギリギリになって教室に入ると、何も無い空間から急に声が響いてきた。

ビックリして肩が跳ね、ちょっと大きな声を出してしまった。すぐそこに女子の制服が浮いていたから葉隠さんだと分かったけれど、透明人間に不意に声をかけられるのはなかなかに心臓に悪いものがある。

「あ、ごめんねビックリさせちゃって！」

「ううん。大丈夫だよ」

思わず『個性』で教室ごと吹き飛ばすところだったけれど。ビックリ系はちょっと苦手なのだ。

「えーっと、どうして急に?」

「昨日魔乙女さんが帰った後、みんなで色々話してたんだ。その時に魔乙女さんがオールマイトの義娘だって、緑谷くんが口を滑らせてて」
「あー……ナルホド」
　チラリと緑谷くんの方に目を向けると、彼は青い顔で体を震わせながら必死に頭を下げまくっていた。
　そこまで大げさに謝るような事ではないのだけれど。それなりの地位にあるヒーローには周知の事実だし、私としても隠す気はない。それに、あの手型の男が普通に言いふらしていたし、むしろ知られない方がおかしいぐらいだったと思う。
「うん、まあ本当の事だよ。ちょっと事情があって、身寄りのなかった私をオールマイトが引き取ってくれたんだ」
「おおー！　じゃあじゃあ、オールマイトの普段の姿とか――」
「ちょっと葉隠さん、こっち来ようか」
　普通に肯定を返すと、案の定といった感じで葉隠さんが興奮気味に質問してきた。
　が、横合いから伸びてきた尾白くんの手が葉隠さんを引き寄せ、切島くんや響香ちゃんを混ぜて円陣のようなものを組んでしまった。何やらヒソヒソとお話をしているようである。
「おい葉隠、養子ってことは何かしらの理由で親がいないんだぞ。そこら辺突っ込ん

じゃヤバいやつだったらどうすんだよ」
「ハッ……!?　か、考えてなかった……！」
「オールマイトの義娘ってので興奮するのは分かるけど、愛の事情も考えて質問しなきゃ」
「とりあえず葉隠さんは慎重に言葉を選ぶことを意識していこうね……」
「私の事情なんて、そんな珍しい事例じゃないんですけどね」
「「「うわっ!?」」」
　こっそり近づいて話を聞いていると、私の事を考えてくれていた様なので否定してあげると、４人が素っ頓狂な声を上げて飛び跳ねた。
　さっきの葉隠さんのお返しである。ほかの３人は巻き込んじゃったけど、まあちょっとくらい雰囲気になってたから吹き飛ばしてあげただけだ。
「まあ言いふらすようなことでもないけど、そこまで深刻に考えなくてもいいよ。それより、オールマイトの普段だったよね？」
「えっ、話してくれるの!?」
「もちろん。なんならオールマイトの失敗談とかもあるよ？」
「聞きたい聞きたい！」
　葉隠さんが目を輝かせながら、やったやったと飛び跳ねる。いや、目も姿も見えない

のだけれど、葉隠さんはそれでもこうなんだろうなあと想像出来るぐらい元気いっぱいなのだ。

「それじゃあ、オールマイトの普段から話していこうか」

申し訳なさそうにしながらも興味津々な様子の尾白くんたちや、耳をそばだてている爆豪くんと轟くん、近くに集まってきた緑谷くんたちに微笑みかけた私は、オールマイトのカッコ良くて恥ずかしい過去を赤裸々に話していくのだった。

☆

オールマイトの過去話は授業が始まるまで続き、救助訓練を行う為にＵＳＪに移動するバスの中でも続いた。何せ直前にリカバリーガールとオールマイトのことを話していたから、話の種はこれでもかというくらいにあったのだ。

といっても、派手な活躍の殆どはニュースなんかで報道されているので、その裏で起こった事や、ニュースで報道されなかった小規模な事件、それからちょっとした失敗談なんかも交えてだったけど。

特に盛り上がったのは、オールマイトの普段の生活だ。もちろん今のままに話せば色々と不味いところがあるので、全盛期の頃を参考にしていたけれど。緑谷くんまで目

を輝かせていたのには、少し笑ってしまった。
失敗談を話した時は、同じバスで移動していた相澤先生が吹き出しまくっていた。まあ、幼い女の子を助けたら顔が怖いと泣かれ、その後必死にあやしていたとか、その光景を想像するだけでシュールすぎて笑えてくるし仕方ないと思う。

そんなこんなで会話を楽しんだ私たちは、特に何事もなくＵＳＪへと到着し、早速といった感じで訓練を開始した。
最初の訓練内容は、誤って崖に転落してしまった３名の一般人の救助。１人は昏睡状態、他２人は足を骨折し動けない状態、という設定だ。
ちなみに、要救助者はヒーロー役以外の生徒からランダムで選ばれることになっている。
「頑張って怪我人のフリしてね、飯田くぶふぅ」
「笑うか檄を飛ばすかどっちかにしたまえ魔乙女くん！　いや、救助される側で檄を飛ばされるのも複雑だが！」
まずは、緑谷くん、お茶子ちゃん、飯田くんが要救助者役だった。これはまた飯田くんの名演技が期待できそうだ。
対してヒーロー側は、轟くん、爆豪くん、八百万さん、常闇くんという過剰戦力気味

な布陣。正直、救助だけならこのうち2人を選出すればなんとかなりそうなものだけれど。

ああいや、要救助者が3人ということを考えると、少し人手不足が否めないかな。そう考えると妥当な人選か。

けど正直なところ、私としては是非八百万さんと組みたかった。

なんとか昨日のうちに身体強化だけは実践で使える程度に叩き直したが、それでも不安が残る。私の『個性』と同じレベルの万能性を持つ八百万さんと組めば、崩落の危険性を建前に、彼女の『個性』を主軸とした作戦をゴリ押せたかもしれないのに。

まあ今更言っても仕方ないし、私個人の理由で彼女1人に全てを任せるのは少し気が引けるのでやらないけど。……メンバーによってはやったかもしれないけど、結果としてそうならなかったので未遂である。

「助かるぞ麗日くん！　俺たち助かるんだ！」

「ふっ……！」

それはともかくとして、今は飯田くんの名演技をしっかり見届けることにしよう。

「やっぱり、魔乙女ちゃんって笑いのツボ浅いわね」

「まあ無理もないとは思うけどな……。俺も、爆豪が人殺しそうな顔で救助活動してるのは、正直吹き出しそうになるしな」
「んだこら殺すぞ醤油顔！」
「爆豪さん真面目にやってください！」

☆

案の定というかなんというか、私はほとんど役に立てなかった。
割り振られたチームにお茶子ちゃんという救助の適任者が居たのもあるが、身体強化縛りでの崖下救助は出来ることが少なすぎたのだ。
「愛ちゃーん！　もう大丈夫だよー！」
「あー……りょーかーい」
崖の上から手を振ってくるお茶子ちゃんに手を振り返しながら、私はなんだか情けなくなって少し俯いた。心なしか、目から汗が溢れているような気もする。
一応、お茶子ちゃんが『個性』を使用している間の護衛的な役割を与えられはしたが、身体強化しか使えない状況では満足にこなせるかも怪しいレベルだ。何事もなく終わって良かったと思う反面、そんな自分が情けなくなってくる。

とはいえ、現状では出来ることが以前の１０分の１程度もないのだ。仕方がないといえる。
「お疲れ様、愛ちゃん！」
「あ、うん。お疲れ様、お茶子ちゃん」
軽く跳んで崖の上に戻ると、お茶子ちゃんがハイタッチを求めてきたので、少し戸惑いつつも応じる。
「次は倒壊ゾーンに移動だって！　一緒に行こう？」
「うん、了解」
テンション高く話すお茶子ちゃんに手を引かれ、移動を開始する。
自分の『個性』が有効に使えるから、お茶子ちゃんも楽しく感じているのかもしれない。
「それに比べて私は……」
「え？　どうかした？」
「いや、うん。ナンデモナイヨ……」
「？」
テンションの高低差の激しい私たちは、傍から見れば随分おかしく映ったことだろう。

☆

魔法少女と彼

☆

続いての訓練は、市街地での災害救助を想定した、要救助者の捜索及び保護。
ヒーロー側は５名。要救助者はその他全員、内数名は声を出せない状況と仮定される。
「それ隠れんぼだ！」
「芦戸さん、それを言ったら元も子もないよ」
やる気が出るのはいい事だが、本番を意識して挑まないと訓練にならない。まあ緊張して何も出来なくなるよりはマシだけれど、気を抜きすぎるのもダメだ。
とはいえ、本質を言ってしまえばその通りでもある。
『それでは、最初の５人はこちら！』
と、軽い感じで発表されたメンバーの中には私の名前もあった。他の４人は、緑谷くん、お茶子ちゃん、峰田くん、爆豪くんだ。
「ああ、これはまたお茶子ちゃんが大活躍するパターンかな……」

まあ今の私はほぼ役立たずな状況なので、ありがたい事にはありがたいのだが。

☆

「それじゃあ……あの辺から調べてみようか」

「おっけー！」

開始と同時に1人で突っ走ってしまった爆豪くんを除き、私たちは二人一組のチームを作って、お互いが確認できる範囲で捜索を開始することにした。

お茶子ちゃんと組んだ私は、とりあえず自分ができる範囲のことをやることにして、怪しそうな場所を見つけることに務めている。

怪しそうな場所といっても、クラスメイトの性格や『個性』、それから物が動かされた形跡や足跡から、居そうな場所を推理しているだけなのだけれど。

「あ、お茶子ちゃん、そこの瓦礫浮かせられる？」

「うん、任せて！」

私が指さした瓦礫の山に、意気揚々といった感じで『個性』を発動させるお茶子ちゃん。

やっぱり自分が活躍できるのが嬉しいのか、いつもより表情とか言動がイキイキして

いる。動きに至っては飯田くんの俊敏さに迫るほどだ。
「はい、響香ちゃんみっけ」
「……絶対見つからないと思ったんだけどなあ」
かくれんぼじゃないんだから、と悔しそうな響香ちゃんに苦笑を返す。
恐らく『個性』で壊した瓦礫を積み、自分はその下に隠れていたのだろうけれど、積み方はともかく場所がおかしかった。
道路のど真ん中は流石に不自然すぎるよ。
「隠れられそうな窪みがここにしか無くてさ……」
「響香ちゃんって、割と考えなしだよね」
「失礼な。愛程じゃあないよ」
「どっちもどっちだと思うけどなあ……」
さて、これで私たちのチームは5人を救助したことになる。先ほど緑谷君の声で尾白くんの名前が聞こえたから……残りは5人ほどか。
「お茶子ちゃん、響香ちゃんを先生達のところまで誘導してくれる？　私はもう少しこの辺りを探してみるから」
「うん、分かった。それじゃあ耳郎さん、ちょっと失礼するよ」
お茶子ちゃんは頷き、『個性』で響香ちゃんを浮かせて離れていった。一応救助される

側は怪我等も考えられるので、お茶子ちゃんの『個性』で安全に運んでもらうようにしているのだ。

その間に私は次の救助者を探し、戻ってきたお茶子ちゃんに運んでもらう、というサイクルである。

「……この辺りにはもう居ないかな。次は……あっちか」

こういう時に探知用の魔法陣が使えればいいのだが、生憎昨日のうちに使えるようにしたのは『身体強化』と『砲弾(BULLET)』だけだ。

しかも、身体強化に関しては少しでも気を抜けば制御を離れるし、砲弾は立ち止まって神経を研ぎ澄まさなければならないレベルだ。どちらも実践で使えたものではない。

せめてあと1ヶ月、いや3週間あれば全盛期とはいわずとも、戦えるレベルまでにはなるはずだけど。原因はある程度分かっているわけだし。

さて、先日の襲撃事件のあと、私は『個性』の制御が出来なくなった。それも『個性』を使うこと自体は出来るが、加減が出来ないという状況だ。

そこで昨日、色々と試して1つ分かったことがある。

私の『個性』が成長した、という事実だ。

体勢を整えようとして、体があらぬ方向へ向いた。想定していたよりも勢いが強かったから。

オールマイトの居場所を探そうとして、地球を映し出してしまった。これも、想定していたよりも規模が大きくなったからだ。

限界を超えた一撃と、予想を大きく超える『個性』の動き。これらを鑑みると、私の『個性』の上限が上がったと考えるのが自然だ。これに関しては、今朝オールマイトの昔話ついでにリカバリーガールに相談し、まず間違いないだろうと言われている。

そして、原因が分かってしまえば後は簡単だ。

今まで１０のうちの１を使っていたのを、１０００のうちの１に変えれば良いだけ――なのだけれど。

「うーん、上手くいかない」

ここ最近よく使うようになった探知用の魔法陣を前にして、私は眉間にシワをよせて唸っていた。

現在魔法陣に映し出されているのは雄英高校全体で、おそらく雄英にいるであろう全ての人間が、赤い光点で示されている。

「ＵＳＪだけで良いんだけど、っと……！」
範囲を絞るようにギュッと力を入れると、映し出される範囲がグングン縮んでいく。
グングン縮んで、縮んで……！
「縮みすぎ……！」
映し出されたのは、私の半径１０メートルほどの範囲だった。ＵＳＪの倒壊ゾーンを映し出すつもりだったのだが、これでは足を使って捜索することに変わりがない。
「――ん？」
がっくりと項垂れかけた私だったが、ふと魔法陣に映し出された光点が、私のものだけではないことに気がついた。
中心にいる赤い光点は、おそらく私。しかしその下、つまり私からして後ろの方に重なった二つの光点がある。
「というかこの点、動いて――――ッ！？」
不審に思いながら振り返ると同時に、私は大きく背後に飛び退いた。
「……どちら様でしょうか？」
「――――」
振り向いた、その先。
今の今まで気づかなかったのが不自然なほど近くに。

オールマイト並の巨躯を持ち、片手に轟くんをぶら下げた男がいた。

☆

――轟くんがやられた。

その事実だけで、目の前の男は最大級の警戒を向けるに値した。

ろくに『個性』を使えない今の私では、逆立ちしても勝てない相手だ。せいぜい時間を稼ぐ程度だが、それも１０分もつかも分からない。

「……」

私が警戒をあらわにして男を観察するが、男は微動だにしない。

ガスマスク越しでは表情は分からないが、視線だけは間違いなくこちらを向いている。

あちらも、こちらを警戒している証拠だ。

……と、いうか。

何故だかあの男に見覚えがある、ような気がしてきた。いや、見覚えというか、こう、気配的なものが――

「――ッ!?」

何かに気づきかけた瞬間、男が剛腕を振るった。
たったそれだけの動作だというのに暴風が吹き荒れ、私はまるで枯葉のように吹き飛ばされる。
「こっ、の……！」
何とか体勢を整え、地面に着地しようとして――
「な――」
目前に、男の手のひらが迫っていた。
それを認識した瞬間、私の体は勝手に首をそらして手のひらから逃れ、着地と同時にバックステップで大きく飛び退く。
「早いッ……！」
私の手前で一度止まるまで、まったく動きが見えなかった。視界に入っていたのに、まるでコマが抜けたような動きで目の前に現れたのだ。
それに付け加え、先ほどの馬鹿力。時間稼ぎすらも怪しくなってきた……！
「『展開（SET）』！」
けれど、ここで簡単にやられる訳にはいかない。
ＵＳＪ内にはＡ組のみんながいるし、怪我の治りきっていない先生達もいる。
「『魔力装填（CHARGE）』！」

男が動き出す。深く腰を落とし、空いている右腕を腰だめに構えた、迎撃の構え。
恐らく、あの男は私の『個性』を知っている。轟君を無効化したのも、『個性』を把握していたから。
それが何故かは知らないけれど、私の勘がそう言っている。というか男の正体もだいたい分かった。
私の想像した通りなら、私がここで彼を倒すのは少し展開に支障が出る。
だけど彼は私を止めようとしない。それどころか、私の『個性』を迎え撃とうとしているのだ。
「『砲門展開』（BARREL OPEN）――――」
彼に向けた手のひらの先を中心として、直径３０センチほどの砲門が展開される。展開しようとしていた物より少し小さいが、今更展開し直す暇もない。
すう、と小さく息を吸う。
込めた魔力は多くない。
けどそれは、襲撃前の私から見てだ。
ちょっとだけ手が震える。なんなら照準だってぷるぷるしてる。
今まで〝なんとなく〟で制御できていた『個性』がちょっと扱えなくなっただけでこのザマだ。我ながらとても情けない。

一歩間違えるだけで目の前の何もかもを消しされる、そんな力を持っていることなんて今まで意識してこなかった。そのツケが回ってきている。
もう一度、小さく、けれどしっかりと息を吸って、吐く。
その間彼は微動だにせず、抱えられている轟くんもされるがままだった。
まるで、私が『個性』の制御を間違えて自分の身が危険にさらされるなんて事を、一切考えていないように。
「……そんなふうにされたら、期待に応えるしかないよね」
迷いはある。けれど手の震えは収まった。
恐怖はある。けれど照準がぶれることはない。
そして、私は――
「――『発射(BURST)』！」

☆

結論から言うと、１３号先生のヘルメット位のサイズで発射された光弾は、ただのパンチでＵＳＪの天井へとたたきつけられた。
やはり筋肉。筋肉は全てを解決するのだろうか。
「うーん、理不尽」
「……ケホッ」
パンチの風圧で巻き上げられた砂塵で轟くんが咳き込む。やっぱり起きていたらしい。
「……なかなかいい一撃だったよ。弾いた腕が痺れてしまった」
「いやいやいや。さっきの軽自動車程度なら吹き飛ばせる威力だったんですけど……？」
振り上げていた右腕を軽く振りながらかけられた言葉に、呆れを抑えることなくため息を吐く。
ナンバーワンは伊達じゃない、か。
「それで？　さっきの光弾で、Ａ組のみんなはこっちに集まってくることになると思いますけど――」
彼が被っていたガスマスクを外すのを見ながら、軽く伸びをひとつ。どうせこの後は私の出る幕はないだろうから、もう気は抜いていいだろう。

今まで意識してこなかった『個性』の制御、頑張らないとな。

「――私はこの後、どうすればいいんですかね？　オールマイト？」

ガスマスクを外した彼の笑顔は、いつもと変わらない最高（No.1）の笑顔だった。

☆

「――さ、さぶら～いず」

「「「「オールマイトォ！」」」」

……サプライズ仮想（ヴィラン）敵襲撃訓練の最後は、なんとも情けない笑顔で締められたけど。

雄英高校：体育祭
魔法少女と体育祭①

☆

雄英体育祭。
個性社会に適応できずに形骸化したオリンピックに変わり、日本だけでなく世界からも注目される、年に一度のビッグイベント。
ヒーローを目指す雄英生からすれば、自身をアピールする貴重な機会であり。
現ヒーローからすれば、将来有望なヒーローの卵を品定めできるこれまた貴重な機会。
当然、それに対する熱意も相当なものになるわけで。
「愛ちゃん！　私!!　頑張るね!!!」

「お、おおう……が、頑張ろうね、お茶子ちゃん」
にしたって、このお茶子ちゃんの麗らかではない顔はなんだろうか。
「飯田くん、お茶子ちゃんどうしたの？」
「彼女はとても立派な志を胸に、雄英体育祭に向けて張り切っているんだ！　そう！　とても立派な志だ！」
「えぇ……飯田くんまで何なのさ……」
いつもより5割増しぐらいで動きまくる飯田くんから距離をとりながら、自分の席に着く。
雄英体育祭まで1週間を切ったね、なんて話題を出したらこのハリキリ様だ。ちょっとびっくりした。
「ブラーボー！」
「頑張るー！」
そんなこんなで、体育祭までもう1週間を切った。
だというのに私は相変わらず『個性』の制御が上手くいかず、もどかしい思いをしていたりする。
そもそも私の『個性』は物心着く前から私の体に植え付けられていたもので、制御云々の前に体の一部のようなものだった。第三の腕、とでも言うべきか。

元々くっついていた腕が突如として巨大化し、体のバランスが崩れたのだから、上手く歩けなくなるのも自然な話ではある。
「ブラァーボォー！」
「頑張るぅー！」
ちょっと前に、１０のうちの１を使っていたところを、１００のうちの１を使うようにすればいい、なんて簡単に言っていたけれどそう単純な話ではなかった。
けれど、ほんの少しずつだけれど感覚は掴んできている。
波打つ水の中で、コップ半分だけの水をすくうような、とても大変な感覚だけれど。
「ブラァーボォーッ!!」
「頑張るぅー!!」
いや、ていうかうるさいな。

☆

１週間なんてあっという間で、気づいたら体育祭を明日に控えていた。

『個性』の制御練習は順調で、全盛期――入学当初の私ほどでは無いものの、結構自由に使えるようになったと思う。

それでも出力は今までの５０パーセント程。それ以上を出そうとすると、抑えが効かなくなって暴発する事がしばしばある。

よって、私は今までの半分ほどの力しか出せない『個性』で、体育祭に挑むこととなった――。

☆

「外凄かったね。現役ヒーロー達がめちゃくちゃ居たわ」

「ＵＳＪの件があって、警備を例年の五倍にしてるって話だからな」

「これなら敵（ヴィラン）が来ても安心だなー」

響香ちゃん、切島くん、上鳴くんと、道中見えた外の様子を話しながら控え室に向かう。

相澤先生が五倍と言っていたのを冗談だと思っていたら、実際にとんでもない数の

ヒーローが外をパトロールしていた。さすが雄英、やることなすことスケールがでかい。

……ついでに体育祭会場がでかすぎて、トイレから控え室まで結構な距離があるのはどうにかならないだろうか。

「ただい――」

「お前には勝つぞ」

「まぁ……」

控え室に戻るなり青春が繰り広げられていた。

意気揚々と扉を開けた上鳴くんは、上擦った声を上げながら「ねぇこれ閉めた方がいいやつ？」と言わんばかりにこちらを振り返っている。

そんな顔をされても、私と響華ちゃんは「さぁ？」と肩をすくめるくらいしか反応できない。

「……僕も」

そんな私たちのやり取りを後目に、控え室内での青春は続く。

「僕だって、みんなと同じように上を目指してるんだ」

そう言って顔を上げた緑谷くんの目は、轟くんの目を真っ直ぐ見返していた。

「遅れは取らない――僕も本気で、獲りに行くから」

「――……おぉ」

「いいねぇ、青春ってやつ？」

「愛。茶化さないの」

それぞれがそれぞれの思いを胸に、ってやつなのかな。

……ところでそろそろ、入っていい？

☆

「緑谷くん、ちょっといい？」

「へぇあ!?　あ、うううん！」

入場１０分前になった頃、緑谷くんにこっそり後ろから声をかけると、ビックンッ！

とハネ回りながらも頷いてくれたので、控え室近くの廊下へと向かう。
軽く周囲に人がいないことを確認して、私は切り出した。
「今回の体育祭について、オールマイト（あのひと）から何か言われてたりする？」
「……な、何かって？」
あからさまに目を逸らして聞き返してくる緑谷くん。間違いなく何か言われている。
「例えば……んーと、そうだなー」
あの人の事だから、いい具合に緊張感持たせながら激励しようとして、結果としてプレッシャー与えるようなこと言ってますよね、きっと。
『君が来たってことを示して欲しい』……的なこととか？」
「凄いほぼ当たってる……!?」
あ、やっぱりか。
「控え室での様子を見た限り、それほど気負いすぎてるという訳ではないだろうけど、一応言っておくね」
と、私は一拍置いてかしこまりつつ、緑谷くんの目を見て語りかける。
「あなたはまだ学生です。それも、去年まで無個性だった。みんなとスタートラインが違ったのですから、実力に開きがあって当然なのです」
私みたいに、生まれながらにして『個性』を植え付けられていたわけじゃない。

轟くんのように、超人的な実力を持ったプローヒーローの子供に生まれたわけじゃない。

爆豪くんのように、幼い頃から『個性』と共にあったわけじゃない。

「負けても当たり前、とは言わないよ。けど、一つだけ覚えていて欲しい。あなたがヒーローを目指すことになった切っ掛け――オリジンを。そして、海浜公園で見た景色を」

以上、先輩からのアドバイスでした。

そう締めると、緑谷くんは数秒ポカンとした後に、プッと吹き出した。

「……なにさ。我ながら小っ恥ずかしいことを言ったと思うけど、本人の前で笑う？普通」

「えっ、あっごめん！　違くて！」

慌ててバタバタと手を振りながら、緑谷くんの顔は笑うのを抑えきれていない。

その様子に私がむくれ始めると、その、と続けた。

「あんまりにもオールマイトと同じことを言うものだから……ああ、血は繋がっていなくても親子なんだなあって」

そういった彼の顔は、ここに来るまでの堅苦しいものではなく、気の抜けた笑顔だった。

「……えっ、なんですか恥ずかしい。やめてくださいよそういう事言うの」
「ええっ!?　そっちが聞いてきたのに!?」

まあ、私も顔がにやけるのを必死に止めていたわけなのだけれど。

☆

魔法少女と失敗作

☆

「そういや、愛。あんたさっき先生に呼び出されてたけど、何やらかしたの？」
「失敬な、やらかしたこと前提じゃん」
入場のために移動している最中、隣に並んだ⊠香ちゃんが茶化してきた。だいぶ失礼だ。
まあ彼女も緊張しているだろうから、こうしていつもの会話をして少しでも調子をいつもと同じに近づけようとしているのは分かるから、あんまり言わないけどさ。
「そんなんじゃなくて、ただの選手宣誓の打ち合わせだよ」
「えぇっ？　愛が選手宣誓ぃ？」
「文句があるなら聞こうじゃないか、⊠香ちゃん」
いやだってねぇ、と⊠香ちゃんが上鳴くんと切島くんに目を向けると、２人はうんうんと頷いた。

「正直、個性の話なら納得だけど、魔乙女が選手宣誓ってのはこう……なあ……？」
「会場吹っ飛ばしてやるぜ！　って感じがあるよな」
「お望みなら今すぐここで吹っ飛ばしてあげようか？　君ら諸共」
「そこ！　列が乱れているぞ！　もうすぐ入場だ！」
手のひらに魔法陣を浮かべてバチバチ鳴らしていると、飯田くんの喝が飛んでくる。
渋々魔法陣を引っ込めた私は、安堵した2人に対して後で覚えといてねと声をかけてから、入場ゲートに向かいなおった。
「……ねえ、気の所為じゃなければ凄く見世物みたいな紹介されてない？」
「もしくは珍獣だね」
外から聞こえるプレゼントマイクの口上に、☒香ちゃんと揃って苦笑する。
まあ、気持ちはわからなくもないけどね。
「じゃ、お互い頑張ろうね、☒香ちゃん」
「言っとくけど、あんた相手でも負ける気ないからね」
軽くハイタッチをした私たちは、今度こそしっかりと前を向いて入場ゲートをくぐった――――

☆

『――ヒーロー科！　１年！　Ａ組だろぉおお!?』

「……ふん。くだらねぇ」

薄暗い部屋の中で、唯一の灯りであるテレビを見ながら、死柄木は吐き捨てた。

その僅かな動きだけで、先日スナイプに撃ち抜かれた傷がズキリと傷み、更に苛立ちが募っていく。

『落ち着くんだ、弔。今は傷を癒すことに集中しなければ――』

「分かってる。……ああ、分かってるよ先生。嫌という程にな」

ギジリと音を立て背もたれに身を預け目を閉じる。

まぶたの裏に焼き付いて離れないあの桃色の閃光が、今はまだ時ではないと死柄木に知らしめていた。

「先生。あのガキはなんだ？　爆破のガキも、オールマイトファンのガキも、Ｎｏ．２の息子も、あのガキほどデタラメじゃあなかった」

『……』

「なあ先生。……アレは一体何なんだ？」

テレビの中では今まさに、脳無を消し飛ばした少女が選手宣誓を行っていた。

静まり返った薄暗い部屋の中で、少女の宣誓だけが響く。

宣誓が終わり少しだけ間が空いた頃を見計らったようにして、先生はどうでも良さそうに答えた。

『彼女は――いや、アレはただの失敗作だよ。君が気にする必要も無い程度の、ね』

☆

魔法少女と障害物競走

☆

「さーて、選手宣誓も無事終わった事だし、早速第一種目の発表と行くわよ！」
ふう、なんとか噛まずに言えた。
原稿の方は先生に校正してもらってたし何度も読み返してはいたけれど、この衆人監視では流石に緊張するというものだ。
特に、前列にチラホラ見える報道カメラを見ないようにするのは大変だった。カメラ目線抜かれるのとかやだからね。
「雄英って何でも早速だね」
「しかも早速ってほどでもないよね」
さて、第一種目は何かなっと。
「運命の第一種目は――これ！」
高らかに響くドラムロールの後、今年の一年担当であるミッドナイトが示した画面に

表示されたのは――

「障害物競走……！」

周囲から息を飲むような声が上がる。いくつか戸惑い混じりの声も聞こえてきた。

……まあ、種目名は普通だよね。種目名は。

「それじゃあルールを説明するわね！」

第一種目、障害物競走。

全学科一斉にスタートする外周４キロのコースを、あらゆる手を尽くして駆け抜ける――と。

ミッドナイトの説明をまとめるとそんな感じだ。

「コースさえ守れば何をしてもいい……ねぇ」

多分、第一種目で一気にふるいにかけるためだろうな、と思考する。

事前に色々と聞いて回った情報だと、例年最初の競技で半数以上が脱落となるらしい。

そもそも経営科は第２以降の競技を見学しながらのディスカッションがメインだし、普通科とヒーロー科じゃどうしたって実力に差が開く。

そして何より――

（――うわぁ、圧が怖いなあ）

誰よりも上に、自分が1番になるんだという向上心を試す、というのもあるのだろう。と、選手宣誓をした自分に向かう視線の圧が増すのを感じながら、スタートラインに並ぶ。

「……ふぅ」

落ち着こう。そもそも、今の私じゃあんまり活躍出来るわけじゃない。

個性の出力は以前の半分。制御もブレがち。ついでに最近、食べすぎてちょっと太って――いやそれは関係ないか。

……しょうがないじゃん、ランチラッシュのご飯美味しいんだもん。

――閑話休題。

目標は、そうだな。ヒーロー科の合計人数が４０人。経営科を除いた普通科と技術科の枠を考えて最低でもプラス2。

安牌を考えると最低でも３５位よりも上に行きたい。――けど。

「「――――――」」

はっきりと感じた。

Ａ組のみんなの、空気をピンと張り詰めさせるほどの気迫を。

ううん、Ａ組だけじゃない。ヒーロー科だけでもない。
この場にいる全員、目指す道の異なる人もいるし、そもそもこの場で勝つ気のない人もいる。
けどみんな、確かに目標に向かって全力で突き進んでいるんだと、分かる。
――なら、手を抜くのはナシだよね。

☆

『――スタートォ！』
高らかに号令が響くと同時に、スタートラインに並んでいた全生徒がゲートに向かって一斉に走り出す。
「って、スタートゲート狭すぎっ……！」
数人の生徒がゲートにつっかえるが、その集団を抜け出して一人、男子生徒が――轟焦凍が突き進む。
「ここが――最初のふるいか」

パキ、と。
轟が駆け抜けた地面が硬い音を立てて凍りつく。
「う、お――!?」
「マジかよ、クソッ！」
後続の何人かがそれに巻き込まれ、足を取られ立ち止まる。
それを確認することも無く、轟はさらに突き進み。
「おさき、ね」

「――――ッ」
直後、真横を突き抜けた突風に身体を煽られ僅かに体勢を崩した。
瞬時に個性を使って体勢を立て直した轟の眼前には――
「魔乙女ッ……！」
べ、と舌を出しながら風を纏った魔乙女の姿があった。

☆

やったことは簡単だ。

スタートラインが明らかに狭かったから、とりあえず後方の集団よりも後ろ……というか、ほぼ最後方にいく。

この時点で、がっつり負ける気の経営科の面々から「何でここにいるんだコイツ」と言わんばかりの視線を頂戴したので、よろしくお願いしますの意味を込めてニッコリ笑顔を向けたら周囲5メートルほど人が居なくなった。

……解せない。

スタートの合図がなるまでは個性の使用は禁止なので、そのままの位置で待機。

準備時間中暇なので、近くにいた背の高い子にお願いして視界を確保し、前の方に誰がいるか確認したら、見慣れた紅白頭が居たので、ルートを上からに決めた。

で、スタートの合図がなると同時に足元に魔法陣を展開。

ついでにいくつかパワーアシスト的な魔法陣も起動して――跳んだ。

一足でぎゅうぎゅう詰めになっていたスタートゲートを跳び越え。

前の方から迫る冷気にやっぱりなとなり。

様々な方法でその冷気を避けるヒーロー科の面々をも追い越して。
「おさき、ね」
思ったよりスピードが出ちゃったので、ちょっと舌っ足らずになったけれど、轟くんの真横を抜けて地面に着地し、スタートダッシュを決めたのだ。

☆

「さぁて、問題はこっからだよね……！」
土埃をあげながら着地すると同時に駆け出し、次の手を考える。
空を飛ぶのが反則とは言われてないけど、コース遵守が原則な以上下手に飛んだり跳ねたりはしたくない。
さっき跳べたのはゲート自体が狭かったので、そのゲート内であれば大丈夫だという明確なラインがあったからだ。
よって、ここからは走るしかないのだが――
「私走るの遅いんだけどぉっ」

なんてったって、今までの私は個性でブイブイ言わせてただけの普通の女の子。
パワーの源たる個性のアシストが半減すれば、当然ながら普通のランニングでは男子に勝てる訳もなく。
「……お先」
凄く微妙な顔で横を駆け抜けた轟くんに、意趣返しと言うには私側があまりにも惨めな煽りを貰うのだった。
「くしょおう……！」

☆

魔法少女とチームメイト

☆

13位だ。

何がって？　障害物競走の順位だよッ！

「ぐぬぬ……抜かれたからって意地張って轟くんの前に飛び出すんじゃなかった……」

「見事な氷漬けだったねぇ」

ぐぬぬぬぬ、と悔しがる私の肩に手を置き、今まさにディスプレイに映し出されている私の醜態を眺めるお茶子ちゃん。

スタートダッシュ決めたくせにすんなり轟くんに抜かされ、焦った私は『個性』で身体能力をブーストしてダッシュ、というかほぼ飛行に近い速度でかっとび――タイミング良く轟くんの『個性』に巻き込まれて宙ずりになったのだ。

「俺としては、あの状態から13位まで上がってきた事に驚いているがな」

クールダウン中の飯田くんが言うように、氷から抜け出すのに非常に難儀した私は結局最下位からのスタートとなった。

こりゃ制御とか考えてる場合じゃないって感じで、必死にダッシュやらワープを使いつつ、なんとか13位まで漕ぎ着けたのだ。
「当初の予定では華麗に1位決める予定だったんだけどなあ」
チラ、と。
1位でゴールした彼の後ろ姿に目をやる。
「まさか緑谷くんが1位とは、ねえ」
見慣れた背中は興奮と冷静の間を往復しているのだろうか、微かに震えている。
けれど、僅かに見える横顔は――やってやったんだ、と確かな達成感に満たされていた。
「緑谷くん」
「……――え。あっ！　ま、まままま魔乙女さん!?」
「はい。まままま魔乙女さんです」
忍び足で近づいて声をかけると、逆にこちらがびっくりしてしまいそうになるほど盛大に緑谷くんが跳ねた。
……そろそろ耐性ついてもいいような気がするけど、まあ気長に待ちますかね。
「まずは1位おめでとう。ホントなら私が取る予定だったんだけど……まあ色々事故があったとはいえ、見事にかっ攫われちゃったね」

「あ、ありがとう。……でも」
「でも？」
緑谷くんが視線を観客席を向ける。その先にいるのは、私たちの目標（オールマイト）だ。
「本当の実力が試されるのは、ここからだから」
「……うん、そうだね」
うん。どうやら私が心配していたほど、彼はブレない男らしい。
雄英に来てからずっと、彼は成長を続けている。そのスピードは数々のヒーローを見てきた私としても驚くほどだ。
「それじゃあ改めて、お互い頑張ろうね、緑谷くん」
「うん。……ありがとう、魔乙女さん」

その後、次種目『騎馬戦』で個人に割り振られるポイントが、障害物競走1位の緑谷くんが１０００万と判明して助けを求める視線を向けられたけれど……。
まあ、緑谷くんなら何とかするでしょ。

☆

さて。
緑谷くんのことは置いといて、今は私のチーム構成に着いて考えなければならない。
まず前提として、私の配置は両手がフリーで使える騎手一択だ。
何故なら『個性』使用のモーション上、手をかざしたところから個性を発動した方が狙いが定めやすいから。足の先とかからも出せるけど、精度は落ちる。
次に、私が騎手とした上で騎馬を任せる人を考える。
「……んー。ダメそう」
パッと思い浮かんだメンバーを探してみるけれど、皆早くもメンバーが決まりかけているようだ。
……A組、B組それぞれで固まってるからそう見えるだけなのかな？
「となると、代替案を……」
……うん、これなら行けそう。

☆

「じゃ、作戦通りよろしくお願いしますね、鉄哲さん」
「わァってるよッ！　後ろの2人も、ちゃんと着いてこいよォ！」
「もちろん。足でまといにはならないよ」
「くそっ……こんなはずじゃ……」
騎馬戦開始直前。
騎手としてハチマキを巻く私の足を支えるのは3人。
前はB組の鉄哲徹鐵さん。
私の作戦はとにかく最前列の人がパワーでゴリ押せて、かつ頑丈な人が必要であることからスカウトした。
『個性』が切島くんと似通っているのを障害物競走で見ていたから、切島くんの代替案としてスカウトした訳だが……この事を話すと、なんと素直に私のスカウトを受けてくれた。
私としては渋られるものだと思っていたから意外だったけれど、私が素直に求める理由を話したことと、A組に啖呵を切りに来た時に私のマジレス（ブチ切れ）を聞いていた分、A組の中では少しだけマシなイメージだったようだ。何でも『漢気を感じた』との事。

……その後、B組の女子に『女子に何言ってんだ』って叩かれていたけれど。

続いて右後ろ。

鉄哲くんをスカウトする道中で捕まえたフィジカル強めマン。『個性』で急な制動・方向転換に対応しやすくなる他、騎手の足場も尻尾の分増えるという地味ながら凄くありがたい人材だ。

彼はもう1人と話しているところを助けるついでに引っ張ってきたのだが、鉄哲さんのスカウトが成功したのを見て快く承諾してくれた。ありがたい。

そして、最後。

「心操くんも、準備はいいですか？」

「……ああ」

普通科の中で唯一第1種目を突破した心操人使くん。

彼は尾白くんに『個性』を使おうとしたところを、通りすがりの私に阻止されるついでに連行された人である。

トリガーは分からないけど、多分精神系の『個性』だ。洗脳とか催眠とか、そっち系のやつ。尾白くんが明らかに普通の様子じゃなかったから、さすがに見過ごせなかった。

彼としても私に『個性』を使う予定だったのだろうけれど、生憎私は精神系の『個性』

は自動阻害出来るので運が悪かったと言うしかない。しかも今トリガー壊れてて常時阻害な上に私の半径5メートルくらい阻害範囲になってるからね。お詫びも兼ねて、というわけである。

……と、いうか彼。鉄哲さんが宣戦布告しに来た～って話してたから思い出したけれど、あの時前に出てきてた普通科の人だ。今の今まで忘れていた。

「そう心配しなくても、約束通り勝てますから、安心していいですよ」

「……そうかよ」

「あ、でも鉄哲さんも尾白くんも割と体力お化けっぽいので……頑張ってくださいね、マジで」

「こんなハズじゃなかったんだよ……！」

騎馬戦までの準備中、彼のプランを聞いたが……まあ私がいたのが不運すぎた。騎馬戦中に私に近づいたら『個性』即解除な上に下手したら即失格な可能性もある。

……騎馬戦開始も近づいてきた。

咳払いを1つしてから、ハチマキを巻き直す。

「それじゃあ改めて……『スーパー漁夫の利作戦』、スタートです！」

「ネーミングセンスどうにかならなかったのかよマジで……！」

「アハハ……」

「やってやる……！」